

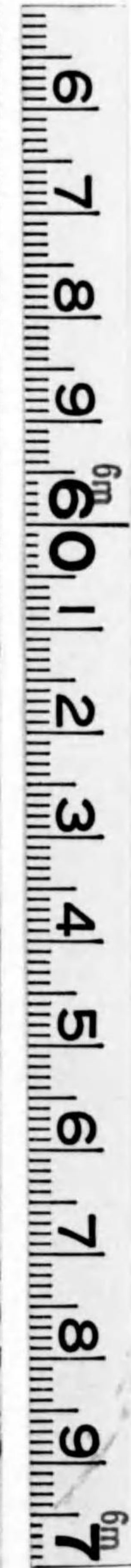
トI37-24

538.02
N 31

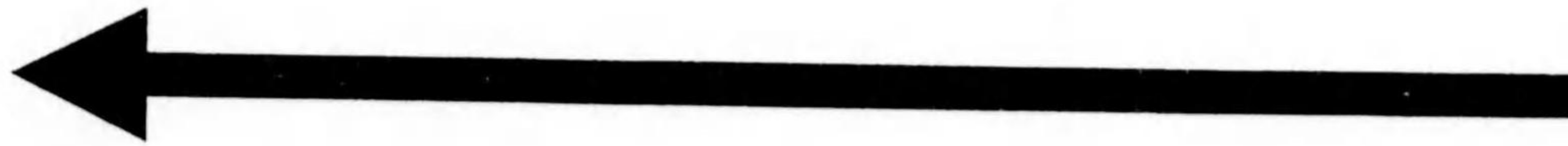
人巨のらそ逸獨

ンリペッエツ
スーカンユ
ゲンリーゲ

中正夫著



始



211

538.02
N31

人 巨 の ら そ 逸 獨

ンリベッエツ
スーカンユ
ゲンリーゲ

中 正 夫 著



964
2

序 文

近世史上に於てドイツの前大戦に於ける敗北と、二十五年間に於ける復興とは、世紀の驚異と云ふべきである。

筆者は、當時聯合國の一員たりし日本が、敗戦國ドイツより押收された航空機材が、日本に到着後陸海軍の手で展観された時、親しくその機材を參觀して、その當時幼稚であつたわが航空界に比して、驚くべき進歩と發達ぶりに感嘆したものであつた。

そして、これらの押收機材を、筆者の勤務する飛行場にも分譲されるに及んで、一つにはドイツが四面楚歌の裡にあつて、物資の窮乏にいかん苦しんだか、代用品の使用にいかん科學的な知能を絞つたかに驚きもし、これ程の國ならば、いかに條約攻めにしても必ずいつか再興するであらうと確信したのであつた。二つには、極めて些細な、取るにたぬ小部分品まで、根こそぎに、およそ航空力に關する限り一切の物資を沒收した英米の貪婪どんらんさに少からず義憤を感じざるを得なかつた。

その後、ドイツ航空工業を海外に移してその絶滅を防いでゐた時代、ドルニエ博士が神戸川崎造船所飛行機工場に招聘されて來朝し、親しくその講義を聞き、またラハマン教授、カーマン教授などが來朝

して、ドイツの根底に流るる航空機の實力は、決して英米の力を以てしても根絶やしできないことを確かに知るに及んで、その再興を何となく心待ちしたものである。

ツェッペリン飛行艇が日本の空に雄姿を現はした數年後、日本でも一時ドイツから飛行船三隻を購入して航空輸送を開始しやうとする目論見で東半球航空株式會社が出来ると云ふ噂が航空界を賑はしたことがあつて、硬式大型航空船について少からず興味を抱き、色々と書物を漁つたことがあつたが、米國のアクロン、メーコン、英國のR一〇一號、日本のN三號、SS一號などの爆破事故を見聞することに、最早次にドイツ航空界再興には飛行船の時代であるまいと、臆氣ながら考へたのであつた。

しかし、ツェッペリン伯その人の努力と、生涯の奮闘は、いつ、いかなる場合にも、青年に對して力強い教訓を持つてゐることは事實である。

失望と、疲勞を知らぬ人でなくては文化を進めることは出来ない、大きい事業を完遂し得ない。ツェッペリン伯は、かかる型の人物である。のみならず、伯の輩下から、ドルニエの如き大飛行機設計者が生れてゐることを思ふと、ナチス・ドイツの空軍の再建には、明治中期から、培はれてきたこの航空精神が脈動してゐることを否めないのである。

元來、ドイツは、日本と同様アルミニウム原鑛に恵まれぬ國であるに拘らず、ツェッペリンが輕合金の骨格に力を注ぎ、ユンカー博士が、世界で最初に全デユラハミン製飛行機の完成者であることを

思ふと、物資の不足に泣言を言ふやうな國民では決して大事業が出来ないと云つてよからう。

ユンカー博士の業績は今日尙ほ炳たるものがあり、特にユンカー飛行機が我國に與へた影響が、いかに我無敵空軍建設に役立つたかを知れば、彼の生涯はひとりドイツのみでなく日本にとつても思ふと云ふべきだ。

支那事變當初に活躍したわが陸軍爆撃機や海軍攻撃機には、ユンカー飛行機の設計を範としたところが少くない。

筆者は、ユンカーSF一三型水上機二臺を、その飛行場に常備して、たへず定期航空に使用してゐたことがあつたの、あの頑丈で、しかも巧緻そのものと云つた構造に一倍親しみを覺えるものである。

現在の大戦に活躍してゐるユンカー機は當時の舊式と似てもつかぬ精銳であるが、どことなく、やはりユンカー博士その人の面影を偲ぶことが出来る。

現在再興したドイツ空軍の威力については、ここに贅言を費すまでもなく、ゲーリングその人の男性的迫力は、近代における英雄と呼ぶに十分であらう。

ここで一言申しておきたいことは、ドイツ空軍の再興再建の主力となつたのは、青年の力によることなのだ。

凡そ、歴史に見れば、大きい國家の推進力、劃期的興隆の源泉力は、すでに青年の力によつてなされ

てゐる。大化の改新然り、建武中興然り、明治維新然り、また大東亞戦争におけるハワイ九軍神、眞珠灣空爆、落下傘神兵、盡く十九、二十の青年が大きい力となつてゐる。

いまや大東亞戦争は、同時に建設に向つて邁進すべき秋にあつて、その責任は、すべて青年の力に期待されてゐるのである。

ドイツが空軍再建に先立ち、全青少年層に模型飛行機、グライダーを通じて、航空機の科學的研究とその知識の涵養に主力を注いできた。

ナチス青少年隊航空部が、大戦の勇士のクリスチャンセン將軍の麾下にあつて、一切をあげて航空知識の養成に努力してきたことが、今次の戦争勃發と共に祖國に殉ずる忠誠の飛行士、落下傘兵を生み、航空工業の産業力を世界に冠絶するものたらしめたのにある。

我々は、日本民族の優秀性を信じ、日本青年の活力と意氣が決してドイツ青年に劣るものでないことを確信してゐる。しかし不幸にして日本は、ドイツの如き窮乏のどん底まで嘗めてきてゐないばかりか、なまじ前大戦には勝つた側にあつて、英米の自由主義思想や輕薄な左翼思想の浸潤をうけて、その影響が、今尙ほ青年層にも多少殘滓となつて沈澱してゐることを認めざるを得ない。

温室育ちの坊ちゃんには、大事業は出來ない。我々は、ドイツ青年が、窮乏のどん底から立ち上つた例を見て、恵まれた日本青年は、むしろ一倍努力してより以上の世界觀を抱き、大東亞共榮圈の建設に

挺身すべき任務の重大なることを自覺せねばならない。

この意味で、ドイツ空軍再建の日までツェッペリン、ユンカース、ゲーリングの三傑物の生涯から、何物かを感じとることが、青年に何かの感銘を與へ得るとしたならば、筆者の光榮はこれに過ぐるものがないのである。

二六〇二年五月、米航母二隻撃沈の報を耳にして

著

者

目次

序	文	一五
第一部	ソエッペリン	一
第一篇	軍人生活	三
第一章	彼の生ひ立ち	三
	ある日の決心	三
	彼の生ひ立ち	七
	國王の侍従	三
第二章	練られ行く人格	七
	普佛戦争	七
	大ドイツ主義	三
第二部	飛行船の發明	七
第一章	苦闘十年	七

新しき道へ……………七
 狂人扱ひ……………三二
 秀れた考案……………三三
 研究へ一歩……………三六
 諦めやうか……………三九
 熱情の再起……………四二
 委員会の態度……………四四
 ドイツ協會立つ……………四九
 第二章 建造と難破……………五三
 第一號船成る……………五五
 飛んだ、飛んだ……………五八
 資金難……………六六
 惨たり第二號……………六八
 莫逆の友……………七二
 第三號船……………七五

勝利か……………七六
 エヒターデンゲンの悲劇……………七九

この義侠……………八二

第三章 戦雲に駆る……………八七

カイゼルの招宴……………八八

デラীগ出現……………九一

惨又惨、巨船の最後……………九三

繼續か、中止か……………九五

偉たり新造船……………九七

大戦勃發す……………九八

第三篇 世界の翼……………一〇〇

第一章 大戦中のツエッペリン……………一〇二

ロンドン空襲!!……………一〇六

鬼船長の最後……………一〇九

大戦中の發達……………一一〇

祖國に奉ぜんと……………101

巨人の終焉……………104

破産か立直しか……………107

ツエッペリンを救へ……………110

誇るツエ伯號……………111

世界一周に成功……………113

第二部 ユンカーース……………117

第一篇 發明の天才……………119

スツツッカー……………119

幼にして才氣……………120

ガス機關の改良へ……………125

行くところ皆可……………127

飛行機に着目……………133

彼の考案……………133

拓け行く己れ道……………136

第二篇 飛行機王 ユンカーース

第一章 大戦中のユンカーース……………139

J I 號 成る……………142

軍用機 創造……………144

デュラルミン採用……………147

大 戦 の 翼……………150

第二章 平和の空へ……………150

敗戦の後に……………152

輝くF一三型……………157

鐵 鎖 の 日……………159

残る百二十人……………163

遂に大型機へ……………170

第三章 建設への道……………170

レルドクレーカ號の誇り……………175

空 を 結 べ……………175

ルット・ハンザ……………一八〇

素人の強味……………一八六

大戦勃發……………一九八

巨星遂に隕つ……………一九九

第三部 ルマン・ゲーリング……………一九九

第一篇 大戦の勇士……………二〇一

第一章 軍人への巣立ち……………二〇一

健やかなる青春……………二〇四

大戦勃發……………二〇七

運命の轉期……………二一〇

第二章 功名失意……………二一四

戦闘飛行家となる……………二一四

悲運の隊長……………二一九

休戦……………二二三

流浪する飛行家……………二二五

第二篇 雌伏の十年……………二二七

第一章 苦悶する民族……………二二七

北歐飛行生活……………二二七

奇しき縁……………二三〇

ヒットラーと知る……………二三三

呪變……………二三六

死の脱出……………二四〇

第二章 ナチスの勝利……………二四一

議席獲得……………二四二

カリンの死……………二四四

遂に政權を握る……………二四六

第三篇 空軍再建へ……………二四三

第一章 航空大臣ゲーリング……………二四三

すべては空へ……………二四五

空軍再建宣言……………二四六



W. J. ...

ツエッペリン篇

陣容は整ふ.....	二六
第二章 世界大戦へ.....	二六
コンドル部隊.....	二六
一朝波蘭を撃滅.....	二六
世界大戦へ.....	二七
ゲーリング片影.....	二八

第一篇 軍人生活

第一章 彼の生ひ立ち

ある日の決心

「世界はいま、何事か新しく呼吸をしようとしてゐるやうだ」

久しぶりで、住みなれた参謀本部の士官室へ戻つてきた若い士官、フェルゼナンドは、まだ旅装もとかぬのに、じつと腕ぐみしたまゝ、部屋中を歩き廻つた。

「この小さな大公國で、眺めてゐた世の中は狭いものだつた。世界中はいま、新しく生れ變らうとして、苦しんでゐるのだ」

と獨り言を云ひながら、トランクを開けて澤山の地圖や、本や、報告書を、机の上に投げ出した。

大ドイツ聯邦の出来るまだ前、ウエルテンブルグ國の参謀將校フェルゼナンド・ツエッペリン少尉は、貪ぼるやうに、歐洲見學から持つて歸つた資料を漁りはじめたのである。

「おい君、歸る匆々大した勉強だな」

「うん、世界はいま面白くなりかけてゐるぞ、どんな驚くべき事が起るかもしれないと、僕は思ふんだ」
「だつて君、このウエルテンブルグは平和だし、伊太利と佛蘭西の抗争にもまきこまれず、いゝ暮しぢやないか」

「いや、君の考へは違つてゐるよ。」

昔のまゝで、小さな領主が、狭い土地に、とちこもつて安穩とすごしてゆける世の中は、もう過ぎつゝ

あるんだ。歐洲の有様を見給へ、お隣の伊太利だつて、埃太利だつて、佛蘭西だつて、ぐんぐん伸びてゆくようとしてゐるぜ』

『や、君は怪しからん事を云ふね。』

ぢやこのウエルテンブルグ大公國に忠誠を誓へないとも云ふのかね。外國を見學してきて、外國かぶれをしてゐるやうだね、君は！』

友人たちは、フェルヂナンド少尉の話を攻撃しはじめた。

『いや、そうは云はん。』

僕は、飽くまで、軍人としてこの大公國に忠誠でありたいと思ふよ。しかし、大ゲルマニア人として、民族的な結合をせねば、やがて歐洲の強力な國々と對抗してゆけなくなるんぢやないか、とこう考へるんだよ』

『僕たちには、外國の事情はよく分らんが、ゲルマニア民族の結合と云つたつて、實際は困難なことぢやないかね』

『いや』フェルヂナンドは、數枚の新聞をくりひろげた。『ねえ君、同じアングロ・サクソン民族でありながら、アメリカではいま、盛んに南北戦争をやつとることを聞いているだらう』

『うん、新聞でもみたよ。』

『そこだ。成る程アメリカつて國は、新しい國だ。まだ、しつかり、纏つてゐるイギリスの殖民地のやうなものだ。これが、英佛の勢力に操られ、こゝうやつて戦争をしてゐるが、これは君どう思ふ』

『どう思ふつて？』

『やがて、新しいアメリカ合衆國が統一された新國家として生れてくる陣痛だと思ふよ、僕は。』

だから、僕は歸つてくる匂々、國王陛下に、もう一度アメリカへ渡らせて頂きたいと御願ひをしてあるんだ』

『何だつて、アメリカへ行く。また出掛けるんかね』
『そうだ、あの民族的な、大きい争ひを實地に見てくることは、ドイツ民族の將來のため、きつと、學問になると思つてゐる』

若いフェルヂナンド少尉の熱情は、どうしても移つてゆく世紀の區切りに立つて、新しい勢力の湧き上らうとしてゐる世界を、見つめたかつた。

國王にも申請したし、故郷にゐる父にも、その決心を打ちあけた。當時、歐洲の一大公國の士官が、遙々海をこへて、建設途中の新大陸アメリカに行くなどは、餘りにも突飛に近いことなのであつた。父は驚いて長い手紙をよこした。

『父は僕の計劃について心配してくれてゐる』

その手紙をくりひろげながら、フェルヂナンドは、喰ひ入るやうに讀んで行つた。

この手紙には、大體次のやうなことが書かれてあつた。

——お前は、今迄の経験から、地球の反対側で、いま新しい人類の創造が生れ、人間の精神が大きい仕事を生もうとして苦しんでゐる有様を見やうと云ふんだね。新しい物を見て自分の教養にしたいと考へてゐるだらうが、しかしアメリカ、驚嘆したり同情したりするだけの値打のない國のやうに思へる。報告によるとこの内亂は國際法を無視してやつてゐる戦争のやうであるから、お前が見學に選んだアメリカは、決して我々の抱いてゐる懷疑を解決し、精神を高めてくれるとは思はない。

これは、私の老人としての偏狭な、若いものへ對する無理解から云ふのではなしに、経験者であり、父であるものとして忠告せねばならぬ義務だと思ふ。

一八六三年三月二十日

父より

フェルヂナンド青年は、この手紙をよむと非常に動かされた。そして、また深い思ひに沈むのであつた。同僚の士官たちは、

『おい、君は何をそんなに煩悶しとるんだ』

『うむ、例のアメリカ行きの問題なのだ。僕は、いま海の向ふの新らしい國で、民族が新らしく創造されやうとする事情を知りたいんだ。そして僕の一生の目的である戦争の姿をよく見たいのだ』

『許可が下りないのかね』

『そうぢやない。僕の父は、反對なのだ。そこには何等眞理を發見されまいと云ふのだ』

『それ 君は』

『僕は、しかし、どうあつてもアメリカの姿を見たいのだよ。あそこには、まだ純粹な人間の熱情と衝動があるに違ひないし、奴隸解放のために宣言された理想の戦ひがあると思ふのだ。しかし、僕は老いた父まで苦しめて、自分の望みを達したくはないんだよ』

『成る程ね。ぢや、君、もう一度、妹さんにでも君の希望を書いて頼んでみてはどうだね』

『有難う。そうだね。もう一度手紙を書いてみよう』

フェルヂナンドは、熱心に自分の希望と、父の意見とについての感想などを書き送つた。

それから數日後

『君、君』

彼の生ひ立ち

廣い海は人間の心を洋化する。

大西洋を渡りながら、フェルヂナンドは幼かつた日の、楽しいことを一つ一つ思ひ浮べた。

青々と澄み切つた清らかな湖、コンスタンツのほとり、遠くスミス側の山々の姿を湖面に投げかけるボーデン湖に面して、廣い農園を持つ名門ツエッペリン家があつた。

もともと、ツエッペリン家は、北獨逸メクレンブルグの出で、五百年來こゝに城を持つてゐた貴族であるが、諸豪族が興亡する十八世紀の末、ツエッペリン家の二人の兄弟ヨハン・カールと、フェルヂナント・ルドイツヒは、南獨に下つてウエルテンベルグ太公に仕へ、伯爵を授けられ、フリードリツヒの

『お、フェルヂナンド君、今日は馬鹿に元氣だね』
『うん、いつか君の教へてくれた通り、早速手紙を書いたよ。そしたらね。父は、僕が一通り考へ直し、父の心配をよく理解してくれたから、今度は、お前の希望を失望させちやいけないと云つてね、許してくれたよ、行つてくるがいゝつて……』
『そうか。そりやよかつたな』
『うん、その代り、しつかりと見てくるぞ。人類が新らしく立ち上らうとしてゐる有様をね』
『そうだ。しつかり勉強して來たまへよ』
かくて一八六三年(皇紀二五二三年)四月三十日、青年將校フェルヂナンド・ツエッペリンは、勇みに勇んで、大西洋をこへ、アメリカへの旅にリヴァプールを出帆した。

代になつた。

その妻アメリーは、南佛の名門マカレー家の出身で、コンスタンツにキヤラコ工場を営む大工業家の令嬢であつた。

この品格のある夫妻の間に、一八三八年（皇紀二四九八年）七月八日、フェルデナントが生れたのであつた。

父フリードリッヒからは思慮と良心と義務の觀念を、母アメリーからは熱情と、美に對する喜びとを享け、廣い農園に出て自然のうちに遊び、詩を作りヴァイオリンを奏し、夢のやうに幸福な少年時代が過ぎて行つた。

『そうそう、僕は傳道師にならうとしたんだつたつけ』

船上で、煙霧に霞み去つた歐洲大陸の後方に向ひ



思ひ出の眸を向けながら、甘美な少年時代への追想に耽つた。

九つになつたとき、家庭教師として迎へた若い副牧師モーゼルの感化を思ひ出した。

『よく叱られたものだ。行儀が悪いとか、學科が出來ないとか云つては罰點をつけられたつて。だが、あのころ、ほんとうに傳道師になるつもりをしてゐたものだ』

それは、ソエッペリンが十四歳のときであつた。あの快活で優しかつた母が死んだのである。痛みやすい青春の胸は、かぎりなき嘆きの淵に沈んだ。そしてこの悲しみを、厳格な宗教的態度に持つて行つたので、一途にモーゼル氏の感化をうけて、傳道師にならうと決心したのであつた。

しかし、父の反對で、それは立消えとなつてしま

つたが、このとき受けた宗教的な感化は、彼の青春時代に大きい力となつて現れてきたのである。宗教家にはならなかつたけれども、彼の性格には、宗教的な人生觀と、處生觀を與へたことは否めない。

母の死が、若いフェルデナントの悲しみを見かねた彼の父は、生涯獨身でわが子の教育に當つた。

『私は、父の判断や忠言を尊重して父の満足しないと思ふことは一切やらなかつた』と後年ソエッペリンは手記に書いてゐる位、父子の情は濃やかであつた。けれども、たゞ父の言ひなりになつてゐる盲從的なものでもなかつた。たえず父と意見を交はし、父と理解し合つて自分の意見をやりとげてゆくのであつた。だから、フェルデナントが四十八歳になつて、父が死んだ後も、『もし父がわたらこんな場合どう云ふだらうか』と一應内省してみるのだつた。

だから、父の意見でもあり、彼自身の希望でもあつたので、軍人としてその生涯を捧げるべく決心したのである。

一八五三年(皇紀二五二三年)十五歳の彼はスツットガルト砲工學校に入り、ルドウイヒスブルグ士官學校を卒業し、五ヶ年の學校生活を終つて少尉に任官すると同時にウエルランブルグ第八歩兵聯隊付となつたのである。

學生々活や軍人生活は至極平凡であつた。しかし、若き少尉フェルデナント・ツエッペリンは、ただ、それだけで満足できなかつた。

チエヴィンゲン大學へ行つて、機械工學、無機化學、國民經濟、史學などの講義を片つばしから聽講して廻つた。

何かしら大きな不安を身の内にそくそくとして感

じる。じつとしておれないやうな、世界の鼓動が、はつきりと聞えてくる氣がしてならないのである。てうど、そのころ(一八五九年)イタリアはフランスとオーストリーとの間に紛争が起りつゝあつた。歐洲の空氣は何となく不氣味に流れてゐる。

『どうもやり切れない』
ルトウイヒスブルグ參謀本部工兵科に轉任してきた彼は、退席でたまらなかつた。

『そんなに君、あせることはないよ』友人たちは慰め顔に『この大公國は、伊佛の紛糾に捲き添えを喰はぬやう慎重な方針をとつてゐるんだからね。まあ落ついて暮してゆくことだね』

『さあ、それが僕には堪らないのだよ。世界中が、今にこう、何だか立て直しになるやうな氣がしてならないんだ。その眞只中で、生ぬるく暮してゆく』

ナポレオン三世は、快よくツエッペリン少尉を招いて、

「俺は、アレネンベルグ城に居たころの事を思ひ出す、君の御兩親の結婚式に招かれたこともよく覚えてゐるよ」と親しげに語りかけ、普通では容易に見られぬ場所や、寶物なども參觀する便宜を得たのである。

それからベルギーを、イギリスを訪れ、或は軍隊の組織を、或は美術と民俗を、心ゆくまでに見ることが出來た。

見れば見るほど、世界は活氣にみちて動きつゝあつた。廣い廣い世界がそこにあつた。

故郷のウエルテンブルグ公國の狭い世界とは違つて、何か大きく動き出そうとする力があふれてゐた。折から、遠く大西洋の彼方新大陸アメリカでは、

には堪へられんのだ』

とツエッペリンは、世界を見たい熱望にあふれてゐた。

何度も上官に願ひ出た甲斐があつて、三ヶ年間の外國視察を許可された。

『しめたぞ、生きてゐるこの目で、生きてゐる歴史を、見てこられるのだ!』

喜び勇んで、まづウインへ赴いて強大な奧太利軍隊の大演習を參觀した。皇帝に引見される光榮に浴し、そこからイタリアに出てトリエスト軍港も見だし、ベニスにも行き、更にフランスに入つてマルセイユの港の賑やかさに、始めて絢爛たる文明に驚きの目を見張つた。

そして、光榮と豪華を誇るバリを訪れて、若い胸に一杯、美と藝術の香りを満喫した。

南北戦争が、新世紀の陣痛であるかの如く繰りひろげられつゝあつた。

國王の侍従

ツエッペリンのアメリカ滞在は、六ヶ月餘りであつた。

この間の物語については、小説風に面白く書くことは必要があるまいと思ふ。初代大統領リンカーンに會見した後、リー將軍の麾下に加つて、騎兵斥候に出で、砲火を浴び、危険を冒して行動した物語などが傳へられてゐる。

だが、そんな小説めいた事柄は書かなくてもよからう。あれほど熱望し期待をかけてゐた南北戦争の戦場で、ツエッペリンが何を獲てきたかを知れば、それでよいのだ。

「社會の動きを常に正しく見て、政治の力を知ることが出来た」のである。

だから、この時代の彼が、南北戦争の終つた後、セントポールへ行つて初めて偵察用の氣球に乗つて空へ昇つた経験も、決して後年飛行船を發明する動機でも何でもないのである。

彼は、もはや軍人として以外の人生は、考へてゐなかつた。

そこで南北戦争の終つた年の十二月、歸國して元の聯隊付になると、ひたすらに軍務に勵んだ。

それから二年後、二十七歳の若い中尉は、突然、ウエルテンベルグ國王カール陛下の侍従武官に任ぜられる光榮に浴した。

國王は、若いツエッペリンに、

「わしは父親が子供に對するやうに話すから、お前

た時代であつた。

ドイツの青年たちは、

『労働問題は最も重要な社會の動きだ。いままで、力の弱かつた一人一人が結束して協力するのは當然の成りゆきだ』

『理窟としてはそうだ。だが、この運動の價値を生かしてゆくべき健全な指導者がゐるだらうか』

『それは我々青年の責任だよ、今日労働力は國家の一部門だし指導力だよ』

と口角泡を飛ばして論じ合ふ姿がみられた。然り、この時代はもはや傳統を守つてゆくだけでは過ぎてゆけなくなつてゐる。古い秩序はまさに失はれやうとし、しかし萬事が混沌として將來の見透しをつかない變革の時なのだ。

ツエッペリンは、たゞ昔ながらの傳統と、歴史の

も固くならず心に心を打ちあけて勤めてくれ」

と厚くこの名門の子を信頼したので、彼は非常に喜び、生來の道徳的な眞面目さでよくつとめたのである。

だが残念なことには、賢明な國王ではあつたが、カール陛下は、やはり舊封建國の國王としての型から抜け切つてゐなかつた。

殆ど新聞も讀まず、世界の動きにも心をとめない、日本で云へば所謂お大名であつた。しかし若い彼にとつて世界は違つてゐた。

嵐と怒濤の時代——そのころの獨逸聯邦は此の一言につきるものであつた。

新しい無産勤勞階級が勃然として頭をあげ始め、さらにドイツの統一問題が叫ばれ、歐洲の古い帝國は、いまにも倒れそうに苦悶する——そう言つ

沈殿した宮廷で人形のやうな侍従生活をするには、餘りに若かつた。

とりわけ、社會問題にも、政治問題にも、一つの理想を抱いてゐる彼は、古い傳統の殻を熱情に破らねば納らない衝動に駆られる。

ツエッペリンの仕へてゐるウエルテンブルグ太公王國をはじめ三十九の聯邦が、數百年來割據して、この聯邦をオーストリアが主宰者となつてゐた。

この時に擡頭してきたプロシヤには、ビスマルクが、所謂「鐵と血」を以て三十九の聯邦をまとめて一大ドイツに統一しやうとしてゐたのだ。

こゝなつてくると、プロシヤと、オーストリアはどうしても衝突を免れない。

「ビスマルクは横暴だ、彼はドイツ聯邦をわが手に併合しやうとする野心家だ」そのやうな考へが多



くの聯邦の間に擴がつてゐた。

『いや、そうでない。ビスマルクは、ドイツを統一して強力な國家としてフランスを打倒しやうとする傑物だ』

一方ではこのやうなビスマルク黨もあつた。嵐と怒濤の時代——ドイツ聯邦の上を吹き荒んでゐたのである。

『正直に云へば、私は、このやうな新らしい時代には、全體的に物事を見て、歴史の全過程を觀察して、永遠の法則を求めねばならぬ』ツエッペリンは苦慮した。『我々は大ドイツ人であらねばならないし、また全ドイツの理想を築いてゆかねばならない』とビスマルクの持つ理念には賛成してゐた。しかし『自分の生國として、また國王を愛する點から云へば聯邦分立主義をとりたい』と一つの相刺する惱みに激

しい苦悶をつづけた。

そのうちに、遂にプロシヤは、オーストリーと戦端を開くに至り、北方ドイツの大部分はビスマルクの陣營に馳せた。

ウエルテンブルグ國は、オーストリーの味方としてプロシヤと戦線に見え、ツエッペリンは大尉として野戦本部附となつて出征した。

しかし、戦争の結果は慘憺たるものであつた。オーストリーにしてすら、一ヶ月半でプロシヤの軍門に降つたのであるから、ウエルテンブルグ軍は到るところに慘敗を喫した。

しかも、本部の指揮はなつてなかつた。

ツエッペリンは一騎兵として勇敢にも雨飛する彈丸の下をくぐつて渡河して敵前に奮闘したが、その甲斐もなく友軍は敗退し或は退却し去つた。

『この敗北は決して、わがウエルテンブルグ國の軍備が弱かつたのぢやない。移りつゝある世界の新しい動きに反抗したのが間違ひだつたのだ』

とツエッペリンは、ビスマルクの政策に心を傾けて行つた。まだビスマルクの眞意を理解せぬ南獨諸邦を説き、ビスマルクと普佛戦争の場合その傘下に馳せ参じやうと密約を結ばうとつとめた。

ツエッペリンは、國王の侍従だつたので、まづ、國內は強化するため徴兵制度を敷き、北ドイツの聯盟に連絡して、大ドイツ主義に向つて國策を向けやうとした。

けれども、宮廷には、まだまだ、過去の夢から醒め切らない昔ながらの官臣が多く、中にはこの混亂に乗じて勢力を張らうとする策士や謀臣も少くなかつた。

その上、肝心の國王は世界の太勢に暗く、新らしい改革を逡巡してゐる。

『こんな事ではいけない。』三十歳の若さと、正義觀は、國王陛下に敢て直諫を申し上げずにはゐられなかつた。

『陛下自ら御所信を斷行遊ばされるか、大臣を更迭せられねば、我國の地位は必ずや危殆に瀕しませう』

と申し上げた。

だが、遂に國王の性格は、この若いツエッペリンの持つ世界觀と相容れないものがあつた。

二三日の後、ツエッペリンに對して「參謀本部技術部付ヲ命ズ」と云ふ冷やかな辭令が交付された。

『いつか、私の考へが正しかつたことを國王陛下も御悟りになるだらう。しかし私は、有用な人間にな

りたいと云ふ希望と努力とは尙失なつてゐない。ただ此處ではもう何事も出来ないのだ』と、かぎりない失望を抱いて宮廷を去つた。

時に一八六八年三月十四日だつた。

そこで、乞ふてプロシア軍を參觀するため伯林へ赴くことを志願し、許されたので四月の初めに、ベルリンへ赴いた。

見るもの、聞くもの、そこには新しく生れやうとする力強い呼吸があつた。

『何と云ふ小さな考へに囚れてゐたのだらう。故國の人々は、小さな古い殻に閉ぢこもつて、一體何を騒いでゐるのだ、もうそんな時代ぢやないのだ！』

第二章 練られゆく人格

普佛戦争

大きな祖國愛、大ドイツ國家を形作るために、今は個人を犠牲にして、大きい民族の結合に溶けこまねばならぬのだ。

ツエッペリンは、故郷にあつては、ビスマルクの遣り方に反對し、聯邦分立主義者であつたが、ベルリンへ來てみると、世界の太勢は、もう眼前に、はつきりとして事實となつて大ドイツの誕生の姿が浮び上りつゝあつた。

『どうしても、ビスマルクの説く大ドイツ統一を一日も早く實現せねば、ドイツ國民は不幸である』と熱心な、統一論者に變つたツエッペリンは、六

ヶ月の滞在期間中に、軍事的にも、政治的にも、學ぶところが多かつたので、原隊復歸を好まなかつた。ちようど、ベルリンには、ウエルテンブルグ國王の王子ウイルヘルム殿下が遊學してゐたので、國王は、ツエツペリンをこの王世子の世話をしてくれと依頼したのである。

ところが、この王子と云ふのが仲々難物だつた。世紀末的な、虚無思想に囚はれてゐて、故國の煩はしい政治から逃避してゐる無氣力な青年だつた。

ツエツペリンは、王子に會見してみると、『僕は生れただけで、他人を支配する権利はないと思ふんだよ。王位などと云ふ疑はしい榮譽を避けたいんだ』と語つた。

『殿下は、御自分で努力せられて、支配するだけの

御資格を得らるべきですぞ』

『そんな面倒な努力なんて眞平だよ』

『いえ、そうでありません。殿下のやうに善良な御性格と、恵まれた健康を持つていらつしやる青年がそのやうな無氣力な、懷疑的な事を御考へになるのはよろしくありません。父陛下も大變御心配になつておられます』と、何度となく、活動的で、精力的で、そして、いつも有用な人間たらうと努力して已まぬツエツペリンの全性格を傾けて忠告したのである。

この蒼白い思想の持ち主である、ハムレット型の王子を、ツエツペリンの強靱な意志の力と、活動的な義務觀念とは、遂に、性格を一變させ、國王になつたことを承諾するやうになつた。

かくてツエツペリンは、ベルリンにおける新らし

い世界の動きを十分観察し、王子の師傅たるにふさわしい自らの性格を陶冶して、一八六九年の夏、故郷へ歸つてきた。

このとき、彼は、リフランドのアルトシユワネンブルグ家の男爵令嬢イサベラ・フォン・ウオルフ嬢と結婚したのである。

たまたま、その翌年七月、遂に普佛戦争が勃發し、ツエツペリンは勇躍して出征した。

『今こそ軍人として祖國に殉ずる秋だ。もう、ウエルテンブルグもプロシアもない。ドイツ民族が、一緒になつて外敵を粉砕せねばならない』と決心して、佛蘭西軍に眞向から當つて行つた。

この普佛戦争には、ツエツペリンの勇猛さを物語る殊勳が數々残されてゐる。

開戦勿々の七月二十三日シルレンホフへ向つて偵

察騎行に出かけた。

彼は僅か士官五名、兵七名をつれて、翌朝早く、マクマホン部隊の動靜をさぐるため敵を蹴散らして深く侵入し、敵の騎兵斥候を發見した。

彼は、巧みに道路を避けて、部落を抜け敵中深くシルレンホフまで偵察したのである。

『敵だッ』

氣のついたときは、已に優勢な敵の包圍下にあつたが、激しい交戦の末、馬を飛ばして突破し、二十六日の夕方辛じて歸隊したのである。戦友を盡く失つて、たゞ獨り歸つてきたが、彼の齎らした偵察は有益なものであり、彼の勇敢さは、フランスの國民學校教科書にまで書き残されてゐるのである。

かくして普佛戦争は、五ヶ月にわたるバリ包圍戦となり、つづいてナポレオン三世の降伏となつて輝

しくプロシヤ軍の勝利に歸した。

この直前、一八七一年（皇紀二五三一年）一月十八日、プロシヤ王、ウイルヘルム一世は、ヴェルサイユ宮殿で、ドイツ皇帝即位を宣言し、こゝに大ドイツ帝國は成立したのであつた。

しかしながら、この統一は、決して全聯邦を圓滿にまとめたものではなかつた。プロシヤの武力と、權力によつて、統一されたところに、いろいろ不平もあれば、不満も生じた。

ツエッペリンは、

『なるほど、小民族國には、夫々いろんな不平もあるだらう。だが今は、すべての聯邦が純粹なドイツ人として、大ドイツ全體を完成するために、最善を盡さねばならないのである』と熱心に説いた。

けれども彼の説くところは、餘り理想主義にすぎ

るものであつた故に、聯邦分立主義者からは、「實際に即せぬ政治家」と冷笑され、またプロシヤ政府の高官からは、夢のやうな理想家と呼ばれた。

『人が何と云つたつてよい。

僕は、自分の信ずる通りやつてゆくのだ。まづ軍人としての本分を盡すことだ』

と、バリ開城後、ウエルテンブルグ軍が凱旋して參謀本部附を命ぜられるや、自ら乞ふて、新領土アルサス・ロートリンゲンの首府ストラスブルグ駐屯軍に志願した。

即ち、シユレスウイヒ・ホルスタイン槍騎兵第十五聯隊第五中隊長として、毎日馬を野外に飛ばして兵と共に操練し、武器の改良や、裝備の改善に熱心をこめて勵んだ。

部下の士官が、荒つぽつく兵士を怒鳴りつけてゐ

るのを見ると、後で、そつと士官を呼んで、――

『君、君たち士官は、國家と同胞のために身命をすてうる立派な人間だ。だから、兵士が君たちの前でおどおどするやうな事があつては、それは決して兵の教育が立派にゆけておると思へないからね』

と諭したものである。

それで、部下はツエッペリンを慕ひ、彼は、軍の教練も、任務も、至極愉快にやつてゆけた。

『僕はいま、とても幸福なんだ。だのに、僕は、いつも孤獨で、自分の無力を沁々感ぜずにおれない』と親しい同僚によく告白してゐた。

『そりや君、あまり物事を理想的に考へすぎるからなんだよ』

『だつて君、今年（一八七一年）の四月に制定されたドイツ帝國憲法を見たまへ。どうも僕は、これが

全國民の自覺から來たものぢやなくて、少數の政治家の手で、作り上げたやうな氣がするよ』

と、發布された憲法は、二十五聯邦の代表者で組織される議會と、一般選舉による帝國議會があり、一兵徴兵制の陸海軍を皇帝の直屬とし、内治は各聯邦委任とし、バイエルンと、ウエルランブルグだけは、特別軍制を有し、その他、國稅、郵便、鐵道、通信などを統一した内容について、大ドイツとしての、躍進ぶりは認められるが、ツエッペリンには、どこか物足りぬやうな氣がしてならなかつた。

『ビスマルク一人の政治と、軍隊の力だけでドイツが出来上つてゐるやうに見えるんだよ。どうもまだ國民が全體となつて、國民の意志、努力を力強く結びつける熱がないやうだ』

『そりやツエッペリン君、そう急速には行かぬよ、

すべての建設はこれからだよ』

『そう、だから僕は、もう少し政治的に働いてみたいと考へてゐる』

と、しみじみ語るのであつた。

けれども、ツエッペリンは、決して急進的な極端家ではない。どちらかと云へば、保守的で、慎重で、思慮深かつたのであるが、彼は、自分の信じたことに對しては飽くまで、確信を以て實踐に移さねばおかなかつた。

『どうも奴は時々穩やかならぬ言葉を吐くよ、險々な男だ』

と俗っぽい官吏には煙たがるものも少くない。しかし、國王を始め、大臣のなかでも二三は、彼に信頼を置いてゐたので、特別軍制を布いてゐるウエルテンブルグ軍を代表してベルリンに公使館を設ける

や、彼は選まれてその重任についた。

『成る程ベルリルは、いま歐洲の動きの中心だ。大戦時代に來たときと何たる違ひだらう』

と、驚きの目を見張らずにおれなかつた。彼の位置が上つてゐた斗りでない。社交も、軍事も、政治も一切が、ベルリンを中心として動いてゐた。

敗れたフランスでは、プーランジュ將軍の復讐運動が行はれ、ロシアと接近しやうと暗躍する。それに對して、ビスマルクは縦横無盡の腕を振つて、歐洲の外交界を潛伏せしめつつあつたのだ。

大ドイツ主義

『ビスマルクと云ふ男は、大したものだ』

とかく批判のあつたビスマルクのやり口を、ベルリンに於て、具さに觀察すると、どうもこの男こそ、

獨逸の隆盛の土臺を築く人間のやうに思へる。

ツエッペリンの政治的興味はいよいよ高められて行つた。

そこへ、故國から、ウルム第二十七騎兵旅團長任命の報がきたので、

『ウルムと云へば三年も暮して來たところだ、もとの軍人生活に歸れるぞ』

と喜んで、旅装をととのへにかかつた。ところが折も折、ベルリン駐在のウエルテンブルグ公使のパウル・ブライデンフェルト氏が逝去したのであつた。

『公使の後任のあるまで、歸任を見合せよ』

との訓令がきて、その翌年一八八七年（皇紀二五四七年）更に使がきた。

『國王は貴方の政治的手腕を御認めになり、正式に

公使にとの御内命ですが——』

『御信任は有難いが、どうも三十年この方、つづけできた軍人生活と別れたくないのでね』

『御受け願へませんのですか』

『では、こうして下さい。もし戦争が起つたら、いつでも軍人生活に戻ると云ふ條件付でお受けしたいと思ひます、どうか左様御つたへ下さい』

と答へた。

こうして二年間は、平穩な公使生活をつづけ、その間にツエッペリンの人格はますます圓滿なものに陶冶されて行つたのは申すまでもない。

かくて一八九〇年一月十二日、正式に退官して、久々に歸國し再び軍人生活に歸ることになつた。理想主義者で、しかも武人としての彼は、いよいよ腕を振つて師團長になる日の期待に胸を躍らせなが

ら、尙暫くベルリンに滞在してゐた。

この機會を利用して、彼は、故國にとつて重大な軍政問題の一つを解決しやうと思つて、個人の資格で、皇帝に對して一つの上申書を提出した。

それは、

「プロシアの監督將軍がウエルテンブルグ軍隊士官の任免移動の權を握つてゐることは不合理である。

かくては國王はただの批准者たるに止まり、兩國の融和を害するものである」との改革案であつた。

ツエッペリンの理想から云へば、これは當然のことであつたが、この上申書を受けたプロシアの高官連は苦い顔をした。

まして、ビスマルクを退け、ドイツ二代目の皇帝として親政に乗り出したばかりのカイゼルは、見る見る痲痺の強い額に太い靜脈を浮べて、

「何たる事だ、今どきに聯邦主義思想は呆れたものだ」

と怒鳴つた。

この印象が、やがてツエッペリンの軍人としての生命に致命傷を與へるものとなつたのである。

軍職を去る

三月になつて、待ちこがれたザールブルグ第三十騎兵旅團長に任命されたツエッペリンは、喜び勇んで軍務にはげんだ。

「今年の秋の大演習は、カイゼル陛下の御前で、しつかりやつてみせよう」

と、熱心な操練をつづけた。

時はきた。十一月二十三日、第一日、第二日と演習はうまく運んで行つた。

「ツエッペリンの指揮ぶりは確かなものだ。次は師團長になるぞ」

參觀してゐたヘーゼラー將軍やホイドウツク將軍は、眞面目で熱のこもつたツエッペリンの指揮、作戦に舌を捲いた。

「全くだ、あのやうな男がならなくて、誰が師團長になるのだ」

と、ツエッペリンをほめた。

が、演習が終つて、クライスト騎兵總監の講評は、全く反對だつた。拙劣を極めるツエッペリンの指揮は師團長たる資格なしと斷じたのである。

「何と云ふことだ。何處が悪いのだ」

ツエッペリンは心外でならなかつた。

「いや、君の軍事的才能については、疑ふところがないと思ふよ」ホイトウツク將軍は、慰め顔で「君

はベルリンの上層階級に何か反感を持たれてやしないかな」

「さうですね。そう云へば、いつかの上申書が祟つてゐるかもしれません」

「きつと、そうだ。君は餘り理想家で、徑行直情だからね。世の中は難かしいものだよ」

「或はそうかも知れません、しかし私は決して聯邦主義者ぢやないのです。むしろ大ドイツの完成を誰よりも熱心に願つてゐるものですが、ただその遣り方についての考へ方が違ふんですね」

「そうとも云へる。まあ、兎角命令を待つことだ」

その命令は悲しむべき、免官の發令であつた。十一月十五日、ここにツエッペリンの軍人生活は終つた。

こへて十二月二十九日、新らしい一八九一年を目

の前にして、陸軍中將國王附將官待遇伯爵フォン・ツェッペリンは、豫備役編入となつたのである。『俺の生命はこれで終りか。』

この世界に少しでも有用に、祖國に奉仕しやうとしてきたのに、もうその活動すべき場所を失つた』

快々として樂しまなかつた。

生涯をかけた軍人としての希望は、こゝに空しく消えた。

だが、讀者よ、これはツェッペリンの人爲りを語るための序奏曲であつた。決して彼の使命は終つたのではなく、いな、むしろ、こゝにツェッペリンの新生命が、いよいよその輝きを増して繰り展げられるのだ。

第二篇 飛行船の發明

第一章 苦闘の十年

新らしき道へ

われわれにとつて、フェルヂナンド・フォン・ツェッペリンの生涯を語るとしたら、むしろ彼の軍人以後の生活でなければならぬ。

一生を捧げて、軍人としての道を歩んできた彼にとつて、この献身の道が塞されたことは、精神的の死であつた。

『閣下、いよいよ御勇退ですな。悠々自適つて次第ですか』

と、この功成り名とげた高官の餘生を、定めし世

の多くの將軍たちが送るやうな閑雲野鶴を友とする生活で暮すものと思つてゐた。

だが、五十二歳のツェッペリンには、まだ脈々と浪打つ殉國の氣慨があつた。長い規則正しい軍隊生活で鍛へてきた肉體は、まだに衰へをみない。

『まだまだ、餘生と考へるには、俺の身體も氣持も許されぬものがありますよ。もう一働きお國のために盡してみたいと考へております』

と、きつぱり答へた。

そうだ、ツェッペリンの第二の人生は、この時から始まるのである。新らしい努力と、建設によつて、大ドイツ國のために盡したいと云ふ熱情が、軍人として遂げられなかつた後半生に於て、再び青春の意氣をとりもどして奮然と起たしめたのである。

祖國のため、社會のために盡そうとして、献げて

きた五十二年の命が、不幸にして、途中で断ち切れ、彼の人生を有意義に活動しやうとする意志は抑へられたのであつた。

それゆゑに、このまゝ残る生活を無爲にすごしたくなかつた。

生命のあるかぎり、祖國と社會のために、盡くるところなき献身をつづけねばならないのである。

『では、閣下、一體どう云ふことをなさる御考へですか、何か事業の方にも御關係になるとか——』

『私はそのやうな、老後の餘暇にやれる仕事などに、むざむざとこれからの生活を費してしまひたくはないのですよ』

『では、何か新しいお仕事を』

『ハハ！ そうですな、新しいと云へば新らしすぎるかも知れませんね。飛行船を一つ完成したいと

考へてゐます』

この意外なツエッペリンの答には、無遠慮な訪問客も驚いた。

『飛行船ですつて、あの輕業師のやうな風船をね。

なんだ、そんなものですか、ハハ、ハハ、』

『いや、今貴方は笑はれましたね。或は、世間の人々も笑ふかもしれませんが。今日の氣球や、玩具のやうな飛行船を見世もの興行半分にやつとりますからな』

『そうですよ、閣下、立派な御身分の閣下が、あのやうな輕業めいた事に手を出されることは感心しませんね。』

『或は今はそのやうかもしれん。しかしです。わが獨逸は、世界の強國とならねばならん、それには將來、飛行船と云ふものが必ず軍用に役立つことを私は信

じておりますのぢや』

『餘り、夢のやうな話ですな』

訪客は、この勇退した名門の將軍を利用して、何か企業でもと心に描いて訪れてみると、空を飛ぶなどと、氣狂ひか、馬鹿の夢物語りのやうな話を大真面目で言ひかされたので、長居は無用と匆々に歸つてしまつた。

だが、ツエッペリンの心の、内に描かれた飛行船への理想は決して夢物語ではなかつた。

それも、今日、きのふに、ふとした思ひつきから始まつた退役將軍のお道樂半分の考へでもないのである。

彼は、青年士官時代、北アメリカの、聖ホールにゐるとき、始めて氣球に乗つてゐる。また一八七〇年（皇紀二五三〇年）普佛戦争に、バリ包圍軍に

た彼は、佛蘭西の志士、ガンベッタが氣球に乗つてバリを脱出して、外部と連絡をつけたことを耳にしてゐる。

けれども、そのころのツエッペリンには、氣球などは、別に大して關心を持つてゐなかつたのだ。

そのころのツエッペリンには、ただ赫赫たる武人としての前途があつたのみである。

しかし、今になつてみると、これらの若かつた日の思ひ出が一つ一つ甦つてくる。

『人間が、空を飛びたいと云ふ希望を持つたのは、一體いつ頃からであらう。すねぶん、いろいろの物語や傳説も聞かされてゐるし、氣球が飛んだり、動力つきの氣球も出来てゐる』と彼は考へた。『だが、どれも、これも、まだ不完全なものばかりだ。物の役に立つものはない』

そこで、彼は、手文庫の中を、繰りひろげて、古い書類を探し出した。

もう、紙は薄茶色に、褪せてゐるが、なつかしいウルム聯隊長になる前年、一八七四年（皇紀二五三四年）の日記が出てきた。

「たしか、逓信大臣ステファン卿の話をきいたときに、感想をつけておいたと思ふが……」

バラバラと頁をくつてゆくと、三月二十五日のところに、「遞相より世界通信と航空なる講演をきいて」と題して感想めいたものが書きつけてあつた。

感慨深く読みかへしてゆくと、「飛行船は巨船のやうな大容積のもので、相當の荷物をつみ、且つ動力によつて自由に上昇しにり、下降したり出来ねばならぬ。ガスを入れるところは船の防水區劃のごとく、細かく數々に分けられるべきだ」と誌されてあ

つた。

ツェッペリンの胸中には、早くもこの大飛行船についての考案が組立てられてゐたのである。そして、一年後の一八七五年四月四日の日記には、

「飛行船は、明らかに海陸運の不便な二つの地點間を最も迅速に交通しうるだらう。

だから、建造費が高くついても、運航は結局安いものになるに違ひない」と書いてあつた。

ただの軍人でなく社會の状態について、深い關心を持つてゐたツェッペリンは、そのころから、日記に書き入れた感想の中に、飛行船が、遠隔地との連絡や、前進部隊との補給に使へることを、思ひつくまゝに書き入れておいた。

「この考へを、いよいよ實地に移す時が來たのだな」

ツェッペリンは、古い日誌をバツタリ伏せると、決然として大事業を、何人もやらなかつた未知への克服を、五十歳をこへて、これから、やり出そうとしたのである。

狂人扱ひ

ツェッペリンが、飛行船について抱いてゐた關心を、實際に移そうとしたのは、勿論、まだ軍職にあるころから、屢々政府に向つて訴へてゐたのである。

それは一八八四年（皇紀二五四四年）の秋、フランスのルナール、クルップ兩大尉が、飛行船ラ・フランス號を操縦し、僅かながら發動機の方で飛行をした事が、驚くべきニュースとして、傳へられてきた。

當時、聯隊にゐたツェッペリンは、

「ラ・フランス號の成功は、將來飛行船が軍用として十分役に立つものであることを證明してゐるのだ。それに、わが國はどうだ？ まだ繫留氣球しかないではないか」

と考へて、必ず軍用として、運航自由な、大飛行船の必要が起つてくるに違ひない。今のうちに、フランスに負けぬやうにやらねば、ドイツの國防のため、ドイツの安全のために危いことであると、意見を書いた。

「こんな愚にもつかぬ意見を述べるよりは、自分の部隊の訓練でも考へたらどうだね」

上官は、相手にしてくれなかつた。

だが、彼は、飛行船に對する信賴をますます募らせて行つた。

一八九一年、軍人としての彼の評判は餘りよくな

かつた。

参謀長シエリフエン將軍を訪ねて行つて、

「閣下、私は、かねて意見書を差出しておきました飛行船の事をいよいよ、本気でやつてみたいと考へるのでありますが」と申述べた。

「だつて君、君は今旅團長として、軍務のある身體だ、そんな出来るか、出来ぬか判らん仕事に熱中することはよくなからう」

「併し、参謀長、先頃の演習以來、私の軍人としての生命は、もう見込みがないと覺悟しております。便々と免官になるのを待つておれませぬ。前に意見書を差出しましたときは、ただ漠然と考へてゐただけでありまして、まとまつた研究をする餘暇がなかつたのであります。

それで、餘、申上げると、どうも氣狂ひ扱ひをさ

れたそうでありますから遠慮してゐたのでありまして……」

「今だつて、君、そんな事を云ひ出すと精神病院行きにされるぞ」

「お言葉ではありませんが、すでに、フランスでは、ラ・フランス號も成功しております、我國では」
「待ちたまへ、ツエッペリン君、君はどうも物事を過信しすぎるやうぢやよ。ラ・フランス號の速力は僅か秒速五米五（時速十九米）にすぎんぢやないか、それぢや軍隊に使つて、どれ丈の威力を發揮できると云ふんぢやね」

「その點については閣下、自分は、改良しやうと考へて、あの考案に手をつけて形を描いてみたんですが」

「ハハハ、君、紙の上でなら何とでもなるよ。それ

に技術者でない君が、どれ丈の事が出来るると云ふのかね」

と、てんで相手にされなかつた。

併し、今や何人の罵倒も、彼の熱を消すことは出来なかつた。否、反對され、嘲けられるほど、熱はますます高くなつてゆく。

しかもそれは、自分の名譽とか、成功による報酬とかによつて燃へ上るものではなかつた。ツエッペリンと云ふ一人の人間の、内部生命が、已むに已まれぬ祖國のため、同胞のためにと念願する使命によつて燃焼される義務の觀念であつた。

どんな見込みのないやうに見えてゐる問題も、困難にも、屈しない決心であつた。そのために、五十のツエッペリンが、改めて苦惱と試煉に曝されねばならないのである。

秀れた考案

とりわけ、ツエッペリンを惱ましたものは何であらうか。

世間の罵倒や、冷笑ではなかつた。

「イサベラや、僕はいよいよ軍隊をやめて、これから、かねがね話してゐた飛行船をやつてみやうと思つてゐる」

と、決心を妻に打ち明けた。

長い年月を、ツエッペリンのよき半身として信頼と愛との變らない忠實さを以て、つかへてきた妻イサベラは、ただ黙つて夫の偉大な決心に耳を傾けてゐた。

「ただ僕の心配してゐることは、このやうな大きい仕事をだね、しかも全く新しい技術上の事ばかり

の多い事業を、騎兵出身の軍人の古手が、やるのに適してゐるか、どうかと云ふことなんだよ』

『それは。御心配ないと思ひますね。そのために技術者を、お雇ひになりますし、専門家と御相談になればいいのですもの』

『うん、どうも俺は生れつき樂天家だね。技術は必ず進歩するし、どんな困難もきつと解決の道があると思つて、事を簡單に考へすぎるんだよ』

『いゝんですわ、それでこそ貴方は、どんな困難がこれから先に起りませうとも、きつと傍目もふらずに、やり遂げる事が出来るのだと思ひますわ』

『そうか、有難う。俺は決心したよ、きつとやつてみせるぞ』

『え、貴方は、やらうとする事を、必ずやりとげ

られる方だと信じてゐますのよ』

『よし、ぢや、俺は早速明日にでもダイムラー發動機工場へ行つて、専門的の相談をしてこやう』

遂に、歴史的な、飛行船建造への第一歩が印せられたのだ。

ダイムラー發動機會社を訪れたツエッペリンは、當時ガス機關の製造者として、着々と成功してゐたダイムラー會社と、シユナイダー博士への協力を乞ふた。

『いや、私の考へは、決して突飛な思ひつきぢやないんですよ、平凡なものです。』

今まで、何人かの技術者が失敗し、澤山の人々が犠牲となつて得た氣球の經驗を、その研究を集めて、成功するやうに組立てやうにするんです』

『で、具體的に云ふとどう云ふ事になりますかね』

『それはこうなんですよ』

ツエッペリンは、鞆の中から、長い間の考へを纏めあげて、細かく書きこんだノートや、圖面をいくつも取り出した。

——ごく、大きつばに云ふならば、今までの氣球は、ガスの力で膨んで氣球の形を保つてゐた。それだからガスが洩れるとか、氣球が破れると、墜落する外ないのである。

『で、私は金屬の骨組で飛行船全體の形を作り上げ、その内部を數々の區劃に區切るのです。そして、この中に氣球を別々に入れて置くと云ふ點なのです』

今までの氣球だと、熱に會つたり、冷えると、ガスが膨脹し、收縮するときには、別に空氣袋をつけて、形を補つてやらねばならなかつた。

「成るほど、するとこの氣球室の中で、氣球の膨脹

に備へる考へですわね』

『そうです、それ丈けぢやありません。骨組を繼ぎ足さへすれば、大型に作り得ますし、船室や、舵器をこの骨組にとりつければ非常に丈夫な飛行船が出来るのです』

『判りました。何しろ非常に新らしい考案ですから、一つ皆で研究してみませう』

ダイムラー會社は、そのころ 非常に進んだ考へを持つてゐた技術者がゐたので、とりあへずツエッペリンによつて持ちこまれた新設計を研究することになつた。

『面白い考案で、丈夫に出来るに間違ひない。だが、そんな重いものが飛び上るだらうか』

『いや、飛べたとしても、故障が起つたら、そんな重い骨組のもので着陸できるだらうか』

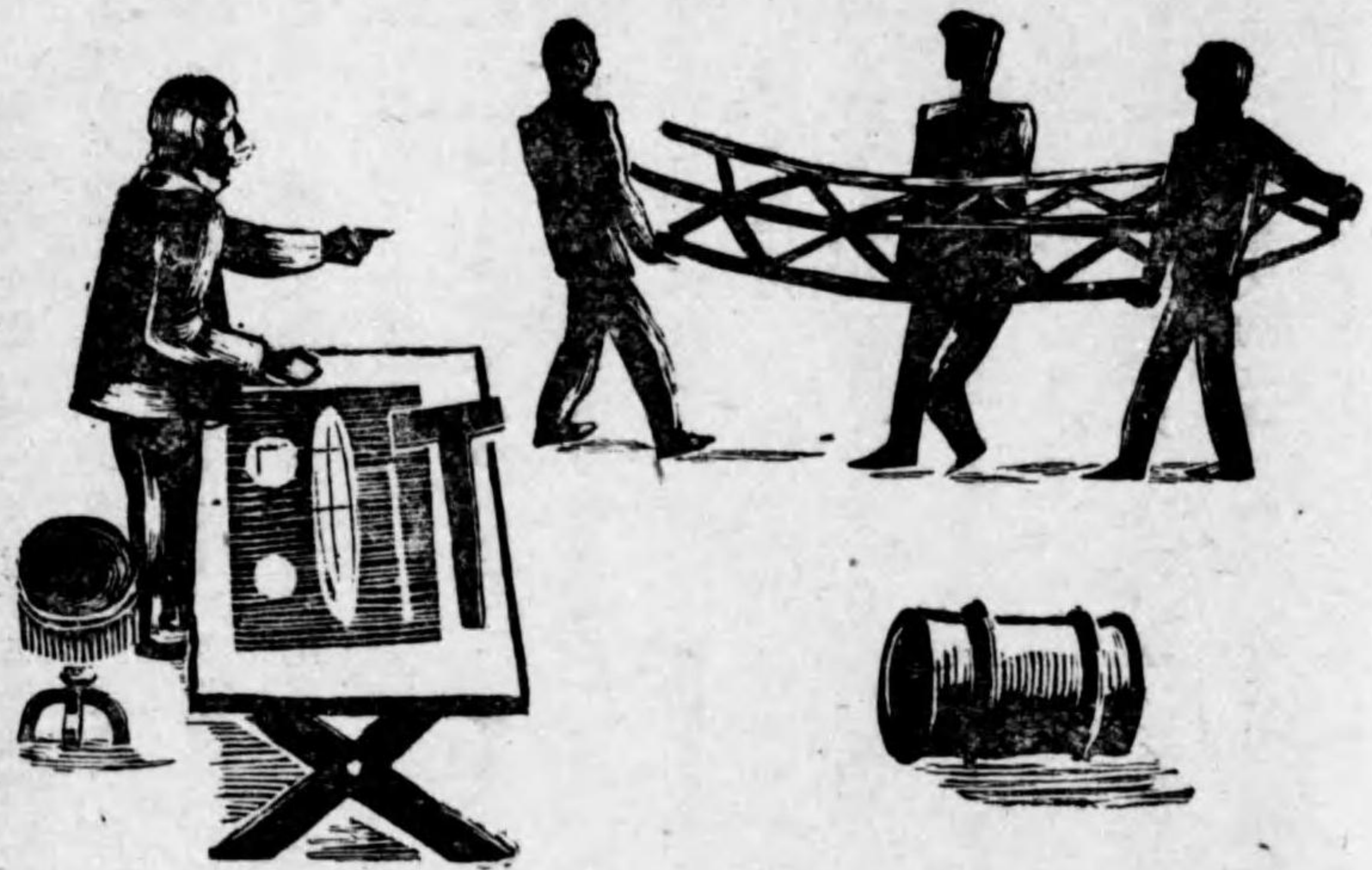
「それよりも、骨組の強さが耐へられまい。ガスの浮揚力と、船體の重さとで、眞二つに折れてしまふに違ひない」

「とにかく、呆れた考へだ」

「氣違ひ沙汰だよ」

技師たちから、ごうごうと非難と、反對との聲が持ち上つた。

「諸君は、とにかく専門の立場から非難されるやうだ」ツエッペリンは、技術者たちと會見して、皆の反對意見を聞いてゐたが「なるほど、私の考へは素人である。しかし、この細長い大飛行船が、まだ出來上つてゐないんだから、君たちにとつても、やはり素人なのだらう。やつてみなければ何とも云へないぢやないか」



研究への一歩

ツエッペリンは、毫も屈せなかつた。

「とにかく、やつてみやう。俺の財産を、全部投出すから、研究して欲しい」

と、惜しげもなく、全私財を投げ出した。そして、ダイムラー會社から推薦してきた技師のグロスに對して、

「出来るか、出來ぬか、まづ研究してくれ給へ」

と、ツエッペリンは、自分の邸の一部に、製作に關する技術者や學者たちの室を作つた。

そして、この人々によつて、ツエッペリンの考に基づいて、骨組の強さや氣球や外被や材料や、それらの重さなどの研究が細く進められた。

むづかしい打算が行はれ、發動機の研究、プロベ

ラの構造、水素ガスの發生法などの萬般の事を、進めて行つた。

『どうだね。仕事は、うまく捗つてゐるかな』

ツエッペリンは、技師たちと一緒になつて、計算尺を手にして、設計圖と較べてみたり、始終ニコニコと、働いてゐた。

彼の胸には、もう大きい夢想が今にも實現するかのやうに思つた。

書齋に戻ると、すぐ、彼は故國のウエルランブルグ國の首相に手紙を認めた。

閣下

豫て多大の御配慮を賜り、數年前より航空船の進歩に關し、格別の御關心を抱かせられました事について、私は、深く感謝申上ぐるところであります。

閣下、私の設計を急いでおります新飛行船は、
いかなる天候下に於ても、飛行し、旅客、貨物を
輸送しうる計画なのであります。勿論。これは地
上と異り、極めて迅速なる速力を出しうることに
確信いたしております。

併しながら、私の發明につきまして、各方面には、
根強き反對も少からず見うけられますので、政府
の御援助を乞ふに先立ち、世上の非難を打破るだ
けの成績をあげたく、以て軍事上有用なる利器
たらしめんと努力を怠らぬものであります。何卒
尊敬し奉る國王陛下によりしく御取成しを願ひた
いと存する次第であります。

ベンを置いたツエッペリンは、會心の笑みを洩ら
した。彼一流の樂天的な考へから、今にも大飛行船
が、大空高く浮み上るやうに思へてならなかつた。

そこで、もう一通、參謀總長シュリフエン將軍に
宛ててベンを走らせた。

閣下

小官の目下設計致し居ります飛行船は、十二時間
分の燃料をつみ、いかなる天候の下でも飛行し、
五百疋の兵士又は武器をつみ、秒速二十米の速力
で飛行しうる計画であります。

この計画が、果して見込みありや否や、軍事技術
者の御批判を仰ぎたく願ひ上げます——
數日後、參謀總長から返事に接した。

『プロシヤ氣球隊司令官フォン・チューデイ大尉を
検査員として派遣する』と云ふのであつた。

かくして、ツエッペリンの苦心は、まづ實際の形と
なつて現はれて來そうになつたのである。果して、
運命は順調に進むであらうか。

諦めやうか

『伯爵、伯爵、大變なことになるましたッ』

いよいよ、チューデイ大尉がやつてくると云ふ報
を受けた朝であつた。

技師の一人が、慌だしくツエッペリンの部屋を叩
いた。

『何だ、どうしたのだ』

『タイムラー會社の發動機工場から、こう云つてき
たんです』と一通の報告書を驚つかみにして息を切
らせてゐる。

『見て下さい、こちらの要求する重量では、發動機
二臺以上積めないんです。すると二十馬力にしか
なりません。』

これでは、豫定の四十五馬力の半分にもならないん

です』

『弱つたなア、それは』

『はア、ラ・フランス號の秒速二十米の三倍の豫定
の設計が、根本から引つくりかへつてしまひまし
たよ』

『一つ氣球製作家のリーダーインガー氏と相談してみ
やう』

と、早速彼の許へかけつけた。

『ですが、私には、こんな長細い飛行船が果して、
それだけの速力を出せるかどうか、疑ひますね』

彼の返事はこの通りだつた。

『それでせうか。普通の圓形の氣球と較べて、私の
長い飛行船は、遅いと仰言るんですか』

『遅いとは確言できませんが、空氣の抵抗がうんと
大きくなるやうに考へますね』

「しかし、空気の抵抗は、物体の断面積の大小で異なるが、長さにはそんなに影響がないやうに思ひますが——」

「そりやツエッペリン君、何か空気が學上の計算から申されるんですか」

「いや、残念ながら、今日の空気が等は、その計算を正確にするほど完成されておません。御承知の事と思ひますけれども」

「さうでせう。だから、實際にやつてみなければ判らん事です。少くとも私は不適當だと思ひますね」

「それに」とリーディングは、傍にわたジグスフエルトを顧みながら、「君の経験から、このやうな飛行船の操縦はどうだと思ふね」

「さあ、僕は、飛行船に乗つてみないから何とも云

へぬが、非常に困難ぢやないかと思ふね。第一そんな長い氣球が果して釣合ひをとつて飛べるかどうか——」

「そうだね。ツエッペリン君、僕は、むしろこんな計劃、餘りお勧めしない方、君のためぢやないかと思ひますかな」

二人の技術者は、眞向から反對の意見だつた。むしろ、ツエッペリンにとつて、同情者であるこの氣球の大家から、反對論を聞かされたことは、ツエッペリンにとつて、限りのない淋しさであつた。その上、歸ると、

「伯爵一寸お耳に入りたいことが御座いますか」

物思ひに沈んでゐるツエッペリンの側に立つた召使は、云ひ難そうにして彼の銀行から廻してきた莫大な支拂高を手にして、

「どうも研究費の方が嵩むやうでありますか——」

「うむ、判つとる。あとで見るから置いておけ」

「はい、では此處に」

執事が去つてしまふと、後に獨りツエッペリンは、部屋中を、あちこちと歩きながら、時々立止つて考へたり、洞ろな眸を窓の方に投げかけたり、限りのない苦しみを、内心で戦ひつづけた。

「駄目なものだらうか、見込みはないものだらうか。

「もう一度リーディング君と相談してみやう」

さすが樂天家のツエッペリンも、全く參つてしまつた。

そこで、翌日、もう一度ケッピンゲンへ出かけて、リーディングと會見した。そこには、澤山の技術者や、研究家がゐて、折しも當時研究されつつあつた翼付の飛行機の將來について、いろいろ意見を闘

はしてゐた。

「やあ、いいところへ来てくれた。ツエッペリン君、皆と一緒に食事をしながら色々話をしやうぢやないか」

「そうだ。ツエッペリン伯から一つ飛行船の特色を承りたいですね。僕等はどうも賛成しかねるんすが」

「僕たちは、いま飛行船か、それとも翼付の飛行機かと云ふ議論をしてゐたのですよ」

ツエッペリンを迎へ入れて、彼等は愉快そうに、賑やかに話が弾んだ。

リーディングは、この頃、むしろ飛行船よりも、飛行機に熱中してゐた。従つて話はともすれば、ツエッペリンの考へてゐる飛行船の缺陷や困難さに話が移つてゆく。

第一、そんな大きい飛行船を浮ばすだけの發動機が、要求する軽さで得られるだらうか。

莫大な建造費がかかる。果してそれで、ラ・フランス號の數倍の性能を出すであらうか、などと話しますますツエッペリンの氣持を沈ませてゆく計りであつた。

皆の話が賑になるほど彼の心は滅入つた。自分は果して、出来ないものを考へてゐるのではなからうか、などと不安が心の底から擡つてくる。

『そう伺つてみると、どうも私の自信が薄らぎましたよ。』

或は、私は飛行船の建造を思ひ切るかもしれません』

『そうなさい。その方が、利巧ですよ。どうも航空の將來は、翼のある飛行機の研究の方に分がありますよ』

ライダーンガーは口を極めて、ツエッペリンに、飛行船の製作を諦めさせやうとした。

皆と別れて、一人になると、彼はますます淋しかった。

理想の消失である。

希望は絶望と變り、夢想は崩れ去つてゆく。

『止めやう。』

手紙を書いて断らう。そして……』

飛行船を思ひあきらめられたら、何を一體したらいいのだ！

熱情の再起

机の上に、置かれた三通の手紙がある。

『これを出してしまつたものだらうか、それとも』

ツエッペリンは、もう一度考へこんだ。シユリーフュス將軍と、チューデイ大尉と、特許局とへ飛行船發明を思ひ切るからの断り状であつた。

『だが、まてよ、ライダーンガーの考へてゐる飛行機は或は將來發達するかもしれないが、いまのところそんな強力な發動機が得られるだらうか。それから、その發動機で、飛行船を作れぬことはあるまじ』

そうだ、彼は思ひ止まつた。断り状をすぐ破り去つた。

チューデイ大尉もそのうちにやつてきた。

『伯爵、貴方の計劃を是非實現して頂きたいですな』

『私も、やりたいと思ひますよ』

「やれますとも。それについて耳よりな話を申し上げやうと思ひます」と、彼は、フランスの陸軍氣球

隊が、シャレー・ムートンで實驗したところによると、軽くて強力な發動機が出来たと云ふことだ。と語つた。

しかし、こんな發動機は、まだ出来上つてゐないし、肝心の顧問技師のグロスは、

『いくら計算してみても、どうも成功しそうなと思ひますよ』

『そりや君、俺は素人だよ。素人だからこそ君たち技術者の力が入用なのだ』

『しかしツエッペリン伯爵、私は技術に忠實でありたいのですよ、出来そうもない仕事をこの上つづけたくありません』

『うむ、判つた。君は餘り技術に凝り固つてゐるよ。僕はもつと熱中してほしいのだ。新しい仕事には、石橋を叩いて渡るよりも、熱情と活動とがほ

しいのだからね』

と、遂にグロス技師を解雇して、その代りに若いコーベル技師を雇ふことにした。

一八九二年五月一日——。

『さあ、いよいよやるぞ。コーベル君、一つ新飛行船について、協力してくれ給へ。俺は設計さへ終つたら、すぐ製作にとりかかれるやうに、マンネオマン工場と、ノイハウゼン工場へ、アルミニウム骨組を作つて貰ふ契約をしてあるんぢや』

『よろしうござります。大いにやりませう。一つ計算の方を根本からやり直させよう。私は必ず成功すると思つてゐますよ』

『有難う。このやうな新しい仕事は、君のやうな若い人に、熱情を傾けてやつて貰はなくちやならん』

にお願ひして、どうか飛行船建造のため、ドイツ陸軍から援助を賜るやう、カイゼル皇帝へ御取りなし願ひたいと申し出た。

國王は、ツエッペリンを、かねがね信頼しておられたので、すぐその手続きをとつたのであつた。カイゼルも、國王からの信頼もあるので、捨ててはおけず、

歩兵總監フォン・ハーケン將軍を使にして、

『とにかく追つて沙汰しやう。何分仕事を盛んにやつて置くやう』

と傳へられた。

『有難い、これでどうやら光明が見えてきたぞ』と、ツエッペリンは喜んだ。

『そうですね。一日も早く陸軍が委員會を開いて、軍用飛行船として建造を援助してくれたらいいんで

老ひたる理想家ツエッペリンと、若い技師コーベルの、二人の理想を追求する心がしつかと結びつかれた。

夜に入つても、設計室は、いつも、明々と燈をつけて、次から次へ、複雑な計算をすすめて行つた。

『世間の誰れが相手にせなくても、専門家が狂人の夢想だと罵つても、私はどうも、ツエッペリン伯の熱に打たれると、必ず成功すると信じたくなる』コーベルは仲間の技師を勵まして、仕事をどしどし進めて行つた。

委員長の態度

『カイゼル陛下が、スツットガルトへ訪問せられるさうだ。これは願つてもない好機會だ』と、翌年九月、ツエッペリンは、故國のウエルランベルグ國王

すがね』

『今に何とか沙汰があるだらう。シユリーフェシ参謀總長にも、フォン・デル・ゴルツ工兵總監にも頼んである。何とか、話があるだらう』

『しかし、どうも、遅いですがな』コーベル技師は気が気でなかつた。『委員會に提出する設計も計算も、何度となく檢べて、いつでも出せるやうに準備してあるんですからねえ』

かぎりのない焦慮のうちに、その年も暮れてしまつた。

一八九四年(皇紀二五五四年)は果して希望の年であらうか。一月—二月、何の音沙汰もない。いなブロシアの軍部では「あんな氣狂ひ伯爵の發明にかかり合はぬ方がよい」と云ふ噂さへ起つてゐたのだ。

どこまでも、運命は冷たかつた。

そのうちに三月が来た。

『もう駄目なんだらうか。陸軍では、一體何をしてゐるのだ。飛行船の意義も判らなければ、構造も理解できぬ人々が、勝手に私の計劃のよしあしを判断してゐる。そんな馬鹿げたことがあらうか』

と、ツエッペリンは悶々とした。

だが、運命は、やつと微笑みを伯の上に投げかけ始めた。

政府では、いよいよ委員会を組織することに決した。これは全くツエッペリンの過去の華々しい経歴、軍人としての勳功や社会的地位が、物を言つたのだ。

そして委員長には、有名な物理學者のヘルムホルツ教授を、委員には、學者側では、スラヴィ、ミユラー・ブレスロー、アスマンの教授連と、陸軍側で

は、氣球隊のそう、そうたる士官のニーベル少佐、ミヒャエリス大尉、グロス中尉などであつた。

これらの人々は、理論の上からも、實地操縦の上からも、いろいろ研究を重ねて、中には多少の非難や異議を唱へる人もゐたが、ヘルムホルツ教授は、

『伯爵、とにかく只今迄検討いたしましたところで、この設計は、相當高く評價されるべきものだと思存じます』

『有難うございました。これで、やつと前途が明るくなつた氣がいたします』

『私は、必ずしも實行不可能の事でないと思ひますので、軍部へ然るべき補助を申請いたすつもりです』

『何分よろしく願ひます』

それから數ヶ月、委員会では、

の頭上高くに——』

しかし、もう彼の手許には、そんな費用を出す餘裕は残つてゐない。

『ツエッペリン伯爵、一體、軍部では何を根據として却下してきたのですか』

コーベル技師も心外でならない。精魂をつくした設計に缺點があると思へない。いろいろ調べてみると、委員会のブレスロー教授の靜力學的計算によると、骨組をうんと強くせねばならぬし、そうすると丈夫になる代りに重くなつて、浮揚力が減じ、軍用として、全く無意義になつてしまふだらうと云ふのである。

『なあんだ。そんな事ですか。そりや餘り靜力學的な考へにすぎますねえ』

『わしも、そう思ふ。ね、コーベル君、この強度計

『ツエッペリン伯は、今迄の準備や研究に、私財を使ひ果してゐるか、これ以上彼の私財を費はせてはならない』と決議したが、その結果を待ちに待つてゐるツエッペリンのところへは一向吉報がこないのであつた。

二萬マークの資金調達を申請した手紙も、軍務局の手で握りつぶされてしまつて、委員会では、七月になつて、

『コノ計劃ハ軍ノ要求ニ適セサルモノト認ム』とあつさり却下されてしまつたのだ。

『何と云ふことだ、何處に缺點があると云ふのだ』

ツエッペリンは憤激の極に達した。もう、私財はとつくに使ひ果してゐる。

『私に金があれば、立派に飛行船をこさへて飛ばせてみせるんだか。出来ないなどとケチをつけた人々

算には、ガスの内圧力を見積つてゐないぢやないかねえ」

「あつ、そうです。そうです。それが大切な點ですよ」

二人は相擁して喜んだ。プレスロー教授の指摘した缺陷なるものが、全く誤謬であることを證明できるのである。

當時、物理学の餘り進歩してゐなかつた時代だから、動いてゐる物體の強さと、動力學的に計算することなど考へに入れてゐなかつたのである。

骨組だけで強さを保たせなくても、水素ガスを張ると、それが十分船體の強さを受持つてくれるのだから、ツェッペリンの計算でよかつたのだ。

「おい、コーベル君、喜べ、喜べ、委員會をもう一度開いてくれるぞ。今度こそ大丈夫だ」

と、ツェッペリンは或は怒り、或は説明し、プレスロー教授と論争し、もう一度ウエルテンブルグ國王に訴へてみた。

だが得たものは、僅かに六千マークの下附金を賜つただけである。

さすがの樂天家で、強氣のツェッペリンも、これにはすつかり參つてしまつた。

「こうなつては致し方がない。何とかして獨力でもやつてみやう」

一八九五年（皇紀二五五五年）になつて。彼は、硬式飛行船建造の趣意書を書いて、世人に訴へ、八十萬マークの資金を集めにかかつた。

ウエルランブルグの國王にも訴へたし、舊友たちも盡力してくれた。

だが、結果はどうであつたか。

と二人は大いに期待をかけてゐた。そのころ、既に逝去してゐた前の委員長ヘルムフォル氏も「この計画はぜひ實現させたい」と云ひ残してゐた位だから、同情者のフォン・ゴルトツ將軍から、きつといひ吉報があるものと待つてゐたのだ。

が、何たることだ。又も拒否。今度の理由は、經費と實用價值との間に餘り差がありすぎると云ふのだつた。

「貧乏人の發明家を捨てておいて、役立つやうになつたら取り上げて使はうと云ふのか、馬鹿々々しい」
「このやうな新しい發明には、政府がうんと力を入れてくれなくちゃ駄目です」

「そうだよ、フランスでは、政府が、大分骨を折つとるらしい。ぐづぐづしてゐると、先を越されてしまふよ」

「そんな夢みたくないものが出来るかね」

「痴人夢を説く類だね」

有力者たちは、一マークも支出しやうとしなかつた。それだけではない。

ツェッペリンが、町を歩いてゐると、スツットガルトの人々は、

「おい、見な、あれだよ。氣狂ひ爺さんは」

「うん、いい年をして、つまらぬ道樂を始めたものだね」

「あれで、本氣なんだよ」

と噂をした。

集つたのは、何と、僅か十萬マーク。

トイツ協會立つ

「この十萬マークをどうしやう」

八十萬マーク必要なところへ、僅か八分の一では
どうにもならぬ。と云つて、國王始め多少でも同情
してくれる人々から集めたものを無責任に處置する
ことは出来ない。

「ねえ、コーベル君、私は、もう年もとつてゐるし、
ぐづぐづしてゐると飛行船の出来上らぬうちに死ん
でしまふ。何とかしてやつてみたいと思ふんだが」
「私もこのまゝで、この設計が埋れてしまふのは殘
念でなりません」

そこで、最後の望みとして、ドイツ技師協會へ手
紙を出して、一度この計劃を調べてくれないかと援
助を乞ふた。

もう、陸軍の委員會に望みをかけることは出来な
いのである。しかるに、運命と云ふものは皮肉なも
ので、ツエッペリンの手紙と入れ違ひに、協會幹事

長ベーターズ氏から、飛行船の考案を見たいから、
設計を調べさせてくれないかと申出の手紙が來たの
である。

「これは面白くなつたぞ。わしは、協會とよく話合
つてみよう」

とツエッペリンは喜び勇んで、協會へ出かけた。
何度となく交渉し、話し合つてみると、さすが、技
術家の集りだけに判りも早く、意見は、どうやら一
致を見たのである。

ときに一八九六年（皇紀二五五六年）十二月二十
一日。ツエッペリンが、飛行船建造を思ひ立つてか
ら、早や五年の歲月が流れてゐたのである。

しかも、失望と、困離と、冷笑の荊の道を、ただ
獨り、歩みつづけて來たのである。

が、仕事はやつと、緒がついたばかりである。う

かうかと喜んでではならぬ。

「コーベル君、どうやらこれで、少しは目鼻がつい
てきたぞ」

「そうです。ですが、今まで紙の上に書いてあつた
ものでさへ、これ丈け苦勞したのですから、いよいよ
よ實物を作るとなると、ますます困難さが加つてき
ますよ」

「全くだ。しかし、どんな困難にもわしは、打ち勝
つてみせるぞ。君もそのつもりでやつてくれ給へ」

「勿論です。しかし愉快ですな、ドイツ技師協會の
決議は——」

「うむ、俺の何よりうれしい事は、設計をすつかり
認めてくれたことだ。それに協會の委員會が、計劃
實現を一層促進するために、理事會に力をいれてく
れることだ」

「我々は百萬の味方を得たやうな気がいたします
ね。こんな大事業は一個人に委すべきでないから、
建造費を廣く一般から集めて、我が航空工業界の技
術の進歩發展に貢献したいとあるのですから、全く
愉快ですよ。あの協會の檄文は、もう大分反響を呼
んでゐるやうですね」

「それに君、わしの計劃を調べてくれた委員たちの
顔觸れを見給へ、實に堂々たるものぢやないか」

ツエッペリンは、ドイツ協會から各方面へ配布さ
れた檄文を手にして、コーベルと語り合つた。

協會では、土木局長フォン・バツハ、参事官バー
ズレー、プレスロー、スラー・ヴィ、それに、ステ
ルワルダー、リンデ、ベーターズの諸教授と、ベ
ーターズ幹事長が立ち、ツエッペリンの計劃實現に先
立ち、各種の空氣力學的問題の解決について、各分

科にわかれて、ドイツの名譽のために慎重に研究してゆこうと云ふのだつた。

しかし、それも、所謂、學者の机上論ではなく、一步一步、實現させるために實行運動まで各方面へ呼びかけてくれた。

『ドイツ技師協會ともあらうものが、取り上げた位だから、或は見込みがあるかも知れん』

『飛行船の可能性と云ふことは十分考へられることだ』

と工業界の有志もこれに答へてくれた。

一八九八年の春、「飛行船助成株式會社」がどうやら成立した。

とは云へ、理解のある人は案外少く、まだまだツエッペリン飛行船について不信を抱いてゐる人の方が多かつた。

八十萬マークの資本金の半分は、やはりツエッペリン自身が引受けねばならなかつたが、キユーブラー技師は、製作上の技術問題を一切引うけやうと熱のこもつた態度で奮起した。

殆ど絶望かと思はれた多難の時代は、ここに終つた。が、それは、無理解な人々の疑惑と不信に對する激しい戦ひであつた。

それはまだ必ずしも終り切つたのではない。その上に、これから實際の仕事と、技術とが格闘の相手に入つてくるのだ。

一八九九年、フリードリッヒスハーフェンの郊外、マンツェルに於て、第一號飛行船の建造がいよいよ始つたのである。

今まで十年間、紙の上にあつたものが、いよいよ物體となつて姿を見せてくるのだ。

だが、今まで、何人も作つたことのない、巨大な、誰も考へたことのない複雑な、この飛行船の建造は、決して生やさしいものぢやない。

夜毎に、机の前に屈みこんで頭を抱へ、考へあぐんで、ペンを放り出す。ころころと轉んで、ばたりと床に落ちた音に、はつとしてまた考へをとりもどす。そうした苦惱の日のつづくのであつた。

だが、既に第一歩は踏み出された。

第二章 建造と難波

第一號船成る

『ねえ、近頃、世間で貴方のことを何と云つてゐるか御存じ？』

すでに、昔の廣い邸宅を賣拂つて、ギールスベル

グの友人の居城の一部へ移つて、つつましやかな生活をつづけてゐたツエッペリン夫妻は、ある朝、微笑みながら、妻の間ひかけた言葉に、

『わしは知らん、そんな事に耳を傾けてゐる暇はないんだ』

『そうですね、こう云つてゐますのよ、「氣狂じみた巨大な計劃」ですつて、貴方がほんとの素人だからこんな化物を作るんだつて』

『その通りだ。素人だからこそ、やりとげるんだよ』

『え、妾も、きつと成功すると信じてゐますわ』
寄る年波にもめげず、改めて數學、物理技術を、若い技師と一緒になつて勉強し、一方には、尙ほ彼を信用しない軍部や、技術者と戦ひつづけた。

一八九五年（皇紀二五五五年）八月三十一日附で得た硬式飛行船發明特許（第DRP九八五八〇號）

を紙の上から、實物へ移さねばならぬ。こんな大きい飛行船を實驗するには、広い場所がある。

どちらから風が吹いても、自由に船庫から飛行船を曳出し飛行させ、下降できる広い場所として、彼は、ボーデンゼー湖を選んだ。

『ここなら、いくら失敗しても、やり直しが出るから——』

かくて、マンツェルのほと、ボーデンゼーの波静かな湖畔に工場が設けられ、水面には、飛行船を収める廻轉式の浮格納庫を錨でつないでおいた。

ウエストフアリア地方にアルミニウム工場を持つカール・ベルグと約束をして、アルミニウムを購入し、晝に夜をついで工事をすすめた。

しかし、今度の戦は、人が相手でないだけに始末が悪い。最初の冬を迎へるころ、やつと出来たばかり

りの浮格納庫は、嵐のために早くも大破損を蒙り、血の出るやうな十萬マークが、修理費として消えてしまった。

飛行船の方も、コーベル技師の考案した格子型の梁を使ふアルミニウムが思ふやうに手に入らず、工事は次第に遅れてゆく。

だが、一九〇〇年（明治三十三年）の初めには、どうやら型らしいものが出来てきた。

前部から後部まで貫く二十四本のアルミニウムの縦骨と、同じく十六本の環形の横骨とから成り、全體を網状に針金で堅く張り締めた船體の長さは百二十八メートル、直径十一メートル七であつた。

この船體の下には、吊船が二つあつて、その間を橋型の構造で連結してあり、長い船體が曲らぬやうにしてある。船體は木綿で包み、内部には十六ヶの

ガス囊を入れてある。

これらのガス氣囊は、環狀横骨の間にあつて、自由に膨脹收縮しうるのであつた。

ガスの容積は一萬千三百立方メートルに及び十二トンの搭載力を有してゐる。

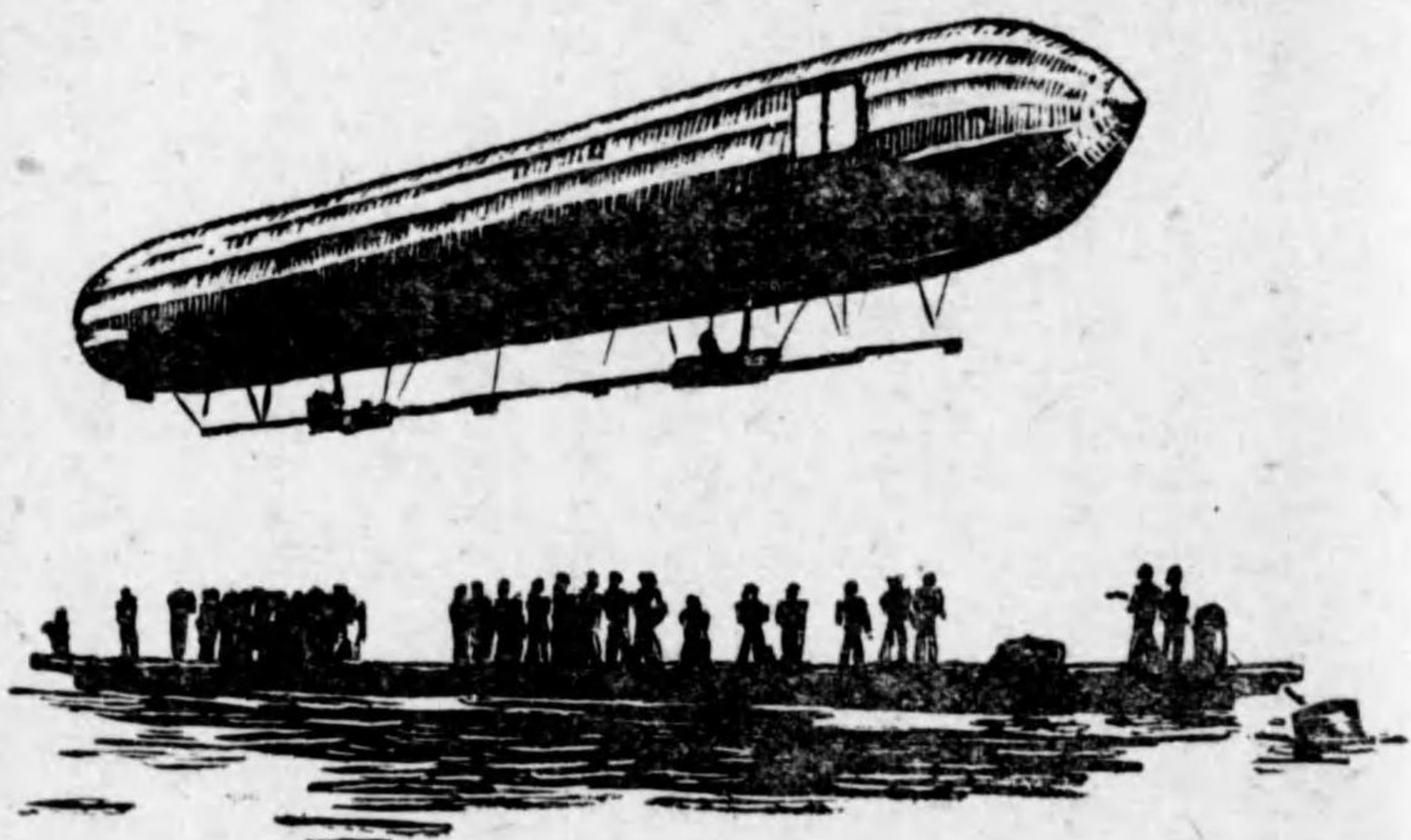
ダイムラー十五馬力を二臺備へた堂々たるものであるが、この空の浮船とも云ふべき大飛行船が、追て完成に近づいてくると、

『いよいよ、完成しますね。いつ飛行しますか、仲の御苦心でせう』

などと、今まで、冷酷と罵倒した人々が訪ねてきたり、新聞記者が押かけてきた。

『初飛行のときは一つ大々的に宣傳したいと思ひますが——』

などと、御機嫌伺ひをする連中さへあつた。



『私は人々の興味をあふるためにやつてゐるんぢやない。國のための眞剣な仕事に努力してゐるんですよ』

と彼等の輕薄な關心に冷やかに答へた。もう、資本金も使ひ果した。

果して一號船が飛ぶだらうか、強度はこれで十分だらうか、舵はうまく利くだらうか。

ツエッペリンの目の前には、まだまだ大きい苦惱が横つてゐた。

飛んだ飛んだ

破損した浮格納庫の修理も出來た。

一九〇〇年七月一日、眞夏の碧空に美しく輝くアルプスの白峯、初夏の軟風は靜かにボーデンゼーの湖上を拂ふ。

などと、無遠慮に、ただ好奇心にみちた人々が、最初の飛行をまちうけてゐたのだ。

この日は風が強く中止されたが、夕方になつて、凩いだとき豫備試験を行つてみたところ、モーターの具合も上々だ。

『明日こそ』、いよいよその日は來た。土曜日の朝、天氣は晴れ、風はない、

老發明家ツエッペリン伯は、黙々としてゴンドラ内に上つて、靜かに瞑目して祈禱を捧げた。

今日こそ、彼が後半世を捧げつくした飛行船が、世界最初の飛行を行ふ最も重大な、緊張した刹那なのである。

『錨を上げッ』

飛行船は靜かに浮格納庫から押出された。氣球の熱練家であるフォン・ジークスフェルトは船長とし

すぎし七年間、嘲笑と、攻撃のなかにあつて、撓まず屈せず、ひたすらに自の信念へ向つて、突進してきたツエッペリン老伯が、いまや實物を以て世にその所信を問ふのだ。

いままで、僅かに避暑地として、富豪階級の別荘地にすぎなかつた、湖畔の平和境フリードリッヒスハーフェンは、新聞記者、カメラマン、飛行家、その他の見物人で、押すな押すなの人出、百姓家まで滞在客で一ぱいだつた。

『うまく飛びますかなア』

『どうも、あんな長いものが空へ上つたら、眞中からボキリと折れさうだよ』

『いや、とんぼがへりを打つてしまふぜ』

『第一、あんな重いものが揚る筈はない。僕は、墜落するところの寫眞をとつておきたい』

て、三人の操舵者と共に、ゴンドラ内につつ立つてゐる。

『わア、出たッ、大きいぞ』

湖畔から、湖上の船から、數千の見物人が驚きの聲をあげる。

鋭く響くツエッペリンの飛行開始の合圖に船長は繫留網を放つた。今や全長百二十八メートルの巨船は、一メートル、一メートルと、浮び上つてゆく。

おい、硬式大飛行船、遂に飛ぶ。今こそ、歴史的な瞬間であるのだ。

歡呼のうちに、暫く空中に浮んでゐた飛行船は、やがてモーターが唸り、船首を風に逆はせつつ、二百メートルの高さに昇つてゆく。

速度、毎秒八メートル！

『あッ、飛んだ！』

ツエッペリンは、眸から滿ち落つる熱涙を拭はうともせず、十年の苦心、この一瞬に溶け去り、歡喜と感激は、青年のやうに彼の頬を紅潮させてゐる。みよ、飛行船は、舵をまげて、右廻りに大きく旋廻し、重心の移動も何等の危険なく行はれ、世人の危惧してゐたやうに、折れたり倒立ちすることはなかつた。

かくて約十分の飛行後、少し舵を損ふた外何の不安もなく着水したのである。彼は勝つた。遂に夢は實現した。だが、眞に勝ち抜くためには、まだまだ薊の道は長いのだ。

資金難

ついで十月十七日と二十二日に試験飛行を行つて、合計、三時間ばかり、飛ぶことには確實な結果

を得た。

『もう資金がありません、發動機のクランク軸をとりかへねば、後の試験が出来ませんが』

『それより舵の故障を早く直したいものだ。秒速は正確なところ、七・五メートル位だね。初めの設計とは大分開きが大きいやうだが』

もつと改造し、もつと實驗してみたい。だが、もう資金は残つてゐない。

これでは、どうすることも出来ぬ。熱心であつた人々も、こうなると改造する熱が冷めて行つた。

萬物凋落の秋十一月、大きい期待に反して飛ぶには飛んだが、思はしい成果を見なかつたのが災をなして「飛行船助成會社」は解散せねばならなかつた。

『皆が去つてまつても、俺一人でやる。死ぬまでやる』

ツエッペリンの信念は少しも揺がなかつた。材料と、もつと強いモーターさへあれば、きつと豫期した飛行が出来ると確信してゐた。

そこで片つばしから、知人を説き、世間に訴へた。

ドイツ技師協會でも「この飛行船は將來もつと強力なモーターをつければ、必ず成功するだらう」との意見を發表してくれたけれども、もう實際的に、一マークさへ支出してはくれなかつた。

『ツエッペリンの發明はなるほど氣狂ひではなかつたが、まあ實用的なものとは云へないね』

と軍部でも、眞面目に彼の發明を考へてくれるやうになつたけれども、實際としては、軟式小型飛行船の方を採用したがつてゐた。

ツエッペリンは屈しなかつた。

世間が、多少でも飛行船に興味を抱きはじめての

を知つて、紳士録を繰り、寄附を勧誘してみた。なげなしの金を拂つて、郵税前納で振替用紙まで同封した文書を六萬通も發送した。

その結果はどうだつたらう。

僅かに八千マーク。ひどいになると悪口や皮肉を書いて返送してきたのもある。

『これは誰だらう』

フランクフルター・ツァイツング新聞をとりあげてみると「無用なる努力」「未知の挑戦」などと毎日、違つた題目であるが、飛行船反對論が掲載されてゐる。

『ドクター・イー？ 誰れだらう。しかし世間の悪罵や冷笑と違つて、この投書には、根據があるぞ』

それは、氣象學上から、力學上から、ツエッペリン飛行船の缺陷を、はつきり指摘してゐるのだ。

出来る。

惨たり第二號

『それなら、我々の方も富籤を發行しやう』

と他のドイツ各州が、これに倣つてくれたので、純益十二萬四千マークが集り、プロシア政府は三十萬マークを特別基金から割いて支出してくれた。

この有様に軍部でも黙つておれず、溢々ながら、ガス製造用具を貸してくれた。

『どうやら運が向いてきたぞ。今度こそ成功してみせる。』

一九〇五年（明治三十八年）には、新らしい第二號船の建造が始まつた。第一號よりすつと丈夫で、技師デュルを督勵して、管形の枠と山形の棒を組合せた三角梁を使ったのと、船體の底に通廊を設けた

しかし、こんな事で落膽してゐる彼でなかつた。世の中のすべての人々が彼に背き、冷く當つてきて、僅かな一人、二人が、彼に同情の眸を向けてくれる。そこが世の中の面白いところであるのだ。しかも、この僅かな人こそ、何百萬人が反對しやうと、ツェッペリンを力づけてくれる大きい動力ともなつたのだ。即ち一人は、アルミニウム工場主のカール・ベルグだつた。飛行船に入用な材料を無償で提供しやうと云ふのである。

もう一人は、彼の若かりしころから、心の友と許したウェルテンブルグ國王である。

『政府が金を出すことは出来ないが、富籤を許してあげやう』

と、彼のために一つの道を開いてくれた。

どうやら、窮乏の淵から浮び上らうとすることが

ので、全體の構造はすつと丈夫になつた。

『今度は自信があるぞ。モーターだつて今度のは八十五馬力だからね』

『そうですね。それに何より心強いのは、今度のモーターが軽いことですよ』

前の十五馬力が一馬力について二十六疋もしたのに、今度のは僅か五疋で出来上つてゐる。だから、プロペラの直徑も前のより三倍も大きい。

十一月三十日、第一回の試験飛行だつた。このときは、出發を誤つたので飛び上ることが出来なかつた。

『また書いてゐる。何ものだらう。このドクター・イーと云ふ男は』

ツェッペリンは翌日の新聞に、再び彼の第二號船について、手ひどい非難を加へてゐる投書を見て氣

を悪くした。

翌一九〇一年（明治三十四年）一月十七日、第二回の飛行試験である。

はじめのうち、飛行船は美事に上昇し、二三メートルの高さに昇つて行つた。いよいよ飛行にとりかかるとき、急に強い西風が吹いて飛行船を押流しはじめた。運の悪いときはしかたのないもので、一クの發動機が故障を起してしまつた。

『大變だッ』

進行力を失つて漂流をはじめたが、どうにか對岸のキスレッジに不時着陸した。幸ひどこも破損がなかつたので、モーターを修理して明日でも飛んで戻らうと繫留しておいた。

『どうも風が變つたやうですぜ』

夜中になつて、風は次第に強くなり、果ては嵐と

なつて、飛行船を弄ぶ。

急報によつてツエッペリンが現場へかけつけたときは、あの美しい船體は見るかげもなく揉みくちやに地上に叩きつけられ、無数の金屬片の殘骸と化してゐた。

第二號船の難破

「經驗のないためか、慎重を缺いだのか、強風の中で上昇して行つて、不安定な空氣中で船體がビッチングを始める。舵で押へやうとするために餘計に揺れが大きくなつた。そこでモーターが止る。今度の事故は、それだけの事だ。構造に間違ひはなかつたし、不時着陸も、うまくやつてのけたぢやないか」ツエッペリンの勇氣は決して衰へなかつた。冷靜に、金屬片の中に立つて、跡片づけを指揮してゐた。「もつと作つてやるぞ」

と、白影の老人が、作つては潰れ、注ぎこんだ金は空しく消え、もう誰れも彼れのために一マークさへ出そうとせぬのに、青年のやうな熱情で、「眞剣に考へねばならぬ。第三號船をすぐ作つてやらう」と宣言した。

莫逆の友

「また悪口だらう」
二號飛行船の壊れた翌日、フランクフルター・ツアイツング紙をとり上げてみた。つづけさまに、彼の仕事を攻撃し、論説として、鋭い筆鋒で非難を止めぬドクター・イーは、この難破を、どう扱つてゐるだらうか。

ツエッペリンは、一行一行、讀んでゆくうちに、

次第にその眸は輝いてきた。

——そして破壊された船體の眞中に、すつくと靜かに立つて、その後仕末を命令してゐる人こそ老伯爵ツエッペリンである。眠られぬ一夜を熟考に熟考を重ねて、遂に彼が七年間、全力を擧げて建造したものを、今ここに破壊を命令する決心をすることは、この老發明家にとつて、どれほどのものであるか。誰れかその胸中を察し得やうぞ。

今ツエッペリンの考へてゐることは何であるか。併し、打ち下ろす斧の一撃一撃が、彼の胸底深く切り込まふとも、また鋸の一挺一挺が彼の心臓を切り碎かねばやまぬとしても、彼は泰然として屈せず、これに對抗して立ち、また冷嘲の眸のもとに毅然としてその勇敢なる態度を失はない。あゝ人間の心のいかに雄大で強靱であることか。

これによつて地上のあらゆる力と戦ふことが出来るのだ。さるにても人間の作つたものが、いかに脆弱なることよ、風の一吹きで破壊されるとは——と書かれて、最後にはじめて、ドクター・フリーグー・エッケナーと署名してあつた。

「おゝ、エッケナー博士だつたのか！」
エッケナー博士は、近頃労働問題の論評家として賣り出してきた經濟學者である。しかし、一面彼れは、神學と哲學を修め、流暢な文章は一家をなしてゐた。

昨日までの論敵は、俄然、ツエッペリンの人格を理解し尊敬してゐるのだ。しかも同じ町に住んでゐたのだ。

數時間後、いつものやうに庭園で植木の手入れをしてゐるエッケナーの許へ、何の知らせもなく、ソ

エッペリンが、訪れてきた。

フロックコートを着て、絹帽を手にした正式訪問服姿の伯爵は、

「エッケナー先生ですね。突然に訪ひまして」と鄭寧に挨拶をした。

まさか、伯爵が、やつて来るとは思ひがけてゐなかつたエッケナーは、

「植木いぢりをしてゐたので、御免下さい」と庭の一隅に導いた。

「先生、私は、多年、財産を失ひ、人智の限りをつくして建造してきた飛行船を破壊し、もう断念しやうかとさへ思つたのですが、今日の新聞に貴方が、論調を改めて激励して下さい。有難かつたです」

と論敵とは云へ、公明正大なこの理解と好意に對して、御禮をのべる伯爵を、エッケナー博士は、

「いや、そう仰言られては恐縮です。私の反対は、氣象學上の點から申し上げてゐるんです」

と答へる。ツエッペリンは、また、この發明は、國家のために、どの位大切であるか、是非とも完成せねばならぬ性質のものであるかについて説明した。

「もし、氣象學上の缺點があるやうなら、先生、一つ私と協力して、その點について御教へ願へませんか」

「いやよく判りました。

承つてみると、飛行船は成功を疑ふ必要はないと思ひます。よろしい、不束ながら私も御力添させて頂きます」

「えッ、御承知下さる。これは有難いことだ」と、改めて二人は握手を固く交はした。

昨日までは、見ぬ敵、今日は心から相許す莫逆の

友、この人ありてこそ、ツエッペリン逝きて後まで、大飛行船は世界の空を雄飛したのだ。

「是非やつて下さいよ、私は全力をあげて建造費を求めてみます」

と度重なる辛い金策をもう一度ウエルランブルグ國王に縋つてみた。プロシヤ陸軍にも政府への斡旋を乞ふてみた。富籤發行がもう一度だけ許可になる。こう聞いて元氣づいた彼は、Z號、第三號船の建造にとりかかつた。

第三號船成功

第三號船は、同年十月に完成した。

構造は第二號と殆ど同じだつたが、長い船體は、高速度を出すに横に外れ、動搖を始めることが判つてきたので、船尾に大きい安定翼をつけた。

矢の羽根と同じ原理で、横ゆれや、縦ゆれを起さぬやう二重の水平翼と、垂直鰭をつけたのである。

「ツエッペリン飛行船についてどう思ふ？」

軍部では、今まで、この發明を氣狂ひ扱ひをしてゐた人々までが、どうやら今は、伯爵の眞剣さに惹かれてきた。

「十月九日の試験飛行を見たが、素晴らしい安定だつたよ」

「十日の日には十二メートル秒の速力を出したつて云ふぢやないか、僕らは、第二號が壊れて、すぐ代船を拵へると聞いたとき、何て堅意地な發明狂だらうと内心嘲つてゐたが、あの自信の強さには頭が下るね」

冷淡だつた軍部の内でさへ、このやうな同情者が出てきた。

故郷のウエルランブルグ國では、

『この新發明を素知らぬ顔で援助せぬベルリン當局は無能だ』と、攻撃さへ新聞に書き立てる有様だつた。これは政府も黙つてゐるわけにゆかなくなつてきた。

とりあへず五十萬マークの飛行船研究助成獎勵金を追加豫算として決議された。そこで、ボーデン湖上に新しい浮格納庫を作り、もう一隻の新造船に着手することに決定したのである。

『どうやらこれで、俺の仕事も目鼻がついてきたぞ』ツエッペリンは一層精を出して働いた。

初飛行にボーデン湖上を三時間でも飛ぶことの出来た三號船は、一九〇七年（明治四十年）十月、出来たばかりの浮格納庫から曳出され、八時間に三百五十キロメートルを悠々飛んだのである。

勝てば官軍——ツエッペリン飛行船に對する政府の信用は俄かに高まつてきた。

この年の十月、政府は、内務大臣を議長とし、各大臣、參謀總長、技術將校を加へて飛行船事業獎勵案を建議した。

『ツエッペリン飛行船は國防並びに、ドイツ工業界發展に大いに貢献するものと認める。そこで本委員會で、一、新造船一臺の建造試験費用四十萬マークを提供する、一、この新造船と現三號船を二百十五萬マークで購入する。但し内五十萬マークはツエッペリンの功績と私財を支出したことに酬ゆるため伯爵個人に與へる。以上を提案する次第であります』

『賛成』 『賛成』

満場一致で可決され、議會でも承認した。

『但し』陸相は口を挾んだ。『飛行船が二十四時間

飛行に成功した上で實施して頂きたい』

陸軍當局は、どこまでも、實績を見た上でとの肚だつた。

しかし、もう誰も馬鹿扱ひはせぬ、氣狂ひ爺とも呼ばぬ。形勢は有利になつて行つた。

勝利か

『まだ安心は早いぞ。二十四時間飛行が關ヶ原ぢや』ツエッペリンは、技師をばげまして、第四號船の設計と改良に没頭した。その間にも冬の烈風は格納庫を破壊し、納めてあつた三號船に一月もかかつて修理せねばならぬ大破損を與へたり、このために新造船の着手が遅れたり、なかなか思ふ様に捗らなかつた。

一九〇八年六月二十日、「飛行船の將來」と云ふ

大きい問題の運命をかけたLZ III號、即ちツエッペリン第四號船が竣工したのである。船體は、ずつと大きくなつて一萬五千立方メートル、積載力も増えて十七トンになつた。百五馬力の新モーターを二臺据え、船體下部に三角形の龍骨が通廊となつて、ずつと丈夫になつたし、安定翼や舵の面積を、前より増したので、安定もしつかりした上に操縦性も、よくなつた。

『この飛行船こそ、我々の運命を決するものだ』

銀色美はしく、尨大な姿を現はした第四號船を仰いで、ツエッペリンの胸中には、深く決するところがあつた。この新造船こそ、政府の要求する二十四時間飛行をやりとげねばならないのである。

もし成功せんか、硬式大飛行船の將來は、あらゆる反對論者を沈黙させて、隆々と興るであらう。そ

の代り、もし失敗せんか。ひとりツエッペリン老伯爵が、冷罵と嘲笑のうちに墜り去られるだけでない。国防の利器たるべき飛行船は永久に祖國のものとならないであらう。

数回の小飛行を試みて、性能の小手調べを終つた四號船は、決然と唇を閉ぢて、ゴンドラ内に上る老伯爵の胸裡に描かれた大飛行のため、七月一日の朝空に舞ひ上つた。

大膽にも、晴れわたる紺碧の空をかすめアルプス連峯、白雲を戴く彼方へ、船首を向けた。

葉巻形の影をコンスタンツ、シャフハウゼンの野山に投じつつ、ライン河上を飛びつづけて、アールの合流點に現れた。

『おお、ルツエル市が見えるぞ』

船上には歡喜の聲が湧く。ここ南ドイツのアルプ

ス高原の空は晴れ、避暑客や觀光客は、高原に三々伍々ビクニックをやつてゐたのであるが、異様な爆音が天の一角からひびいてくるのを耳にして。

ふと仰ぐ空には白銀と輝く巨大な飛行船が、悠々頭上に旋廻しつつ、やがて東北へ飛び去つてゆく。

飛行船の勝利！ 今こそツエッペリン十年の苦心は酬ひられたのだ。かくて、ホルゲンバス、チューリッヒを経て、夕方になつてその雄姿、ボーデンゼ湖上に歸着したのである。

かくて十二時間飛行、成功した。ツエッペリン飛行船の成功、この報は忽ちのうちに、電報を、電話を總動員させて、世界中へ、「新世紀の發明の勝利」のニュースとして傳へられた。

次は二十四時間飛行だ。政府の要求をみたすための大飛行だ。

『おめでとうございます、伯爵』

『有難う。この日に、この大飛行をやる事を宣言できるのは、わしの最も光榮に思ふところだ』

七月七日、第七十回目の誕生日の祝賀宴は華やかな勝利の宴でもあつた。

一年前まで、冷笑し、嘲笑し、精神病院ゆきだと罵つた人々も、スキス訪問飛行の成功が一たび傳はると、掌をかへすやうに、彼を賞讃しはじめた。中には、あまり現金なので、苦笑したくなるやうな連中もあつたが、七十と云ふ人の長い道を歩いてきてあらゆる苦難と、試煉を通つてきた伯には、人の世の姿に何の愛憎もなかつた。

ただあるものは、自己の本分に忠實に、少しでも國家に有用でありたいとの念願のみであつた。

あらゆる方面から祝詞が殺到した。ドイツ各種團

體、協會、大學から祝詞を持つて代表者がやつてくる。外國からの電報、手紙が山とつまれた。

都市は争つて、名譽市民に伯を推薦し、民族の誇り、ドイツの英雄であるとして祝ひの言葉を捧げてきた。ウエルテンブルグ國王は、「藝術と科學のための誇りとして」黄金文化勳章を授けられ、勝利の榮冠はしつかと、ツエッペリン伯の頭上に戴かれたかと思へた。

然り、この榮冠は、果して老伯爵の頭上にしつかと載せられたであらうか。

待望の二十四時間飛行の日はいよいよ迫る。これさへ成功したら、勝利はツエッペリンのものだ。

伯の生涯で、最も劇的な一瞬なのである。八月上旬、二回ばかり出發したが、モーターの小故障ですぐ引かへし、四日になつて、誇らかにLZ

皿號が、希望の朝暈を浴びて眞青の夏の半空へかけ昇つて行つた。

目ざすは、ライン川に沿つてマインツに至つて引返す航程七百キロメートル、二十四時間の大飛行だ。

「成功を祈ります」

「無事歸つて来るのを、心からお待ちしてゐますよ」

數千の民衆は、世紀の巨船がスタートするとき、熱狂して見送つた。沿道の市民は、朝早くから仕事も手につかず、戸外へ飛出し、屋上へ登り、ハンケチを持つて、雄姿の現れるのを今か、今かと待ちうけた。

村落でさへ、軒に國旗をひるがへし、教會堂の鐘は巨船來ると祝福の音を空に向つてうち鳴らした。

轟々二百十馬力のモーターはラインの溪谷にひびき、ヒヤフハウゼンから、ライン河に沿ひつつバ

ーセルの上方に來た。正午の太陽はさんさんと船體にふりそそぎ、飛行は順調につづいてシユトラスブルグの上空をすぎ、シユバイエルを通り、夕陽傾くころ、オッペンハイム附近までやつてきた。

「船長、ガス壓力が減少してゐます」

調氣係はメーターを見ながら叫んだ。正午ごろ太陽に照されてガスが膨脹したので、船體がぐんぐん上昇するため、相當のガスを放出したのが原因で、夕方冷氣が襲ふころになつて、ガスが收縮しはじめたのだ。

「水を棄ていッ、砂を棄ていッ」

ガラスは投下され船體の降下を防いでゐるとき

「あッ、發動機の故障だ！」

片舷のモーターは、吹第に力を衰へつつある。このまま飛行することは危険である。

船長は突嗟に決心した。

「着水用意、各員持場につけ」

ああ、勝利は、ここで再び暗雲に包まれるのだからか。

エヒターデングンの悲劇

しかし、不時着水は堤防に挟まれたラインの河流上に巧みに行はれた。

「大飛行は失敗か」

人々は飛行船が降りたと聞いて心配したが、數時間後、修理を終つて再び夜空に昇つてゆく勇ましさ、ほつと安堵の胸を撫で卸した。眞夜中マインツ市の上空にかすかな爆音を殘し、動く星かと仰がれる光を曳いて、歸路についた。

マインハイム附近まで飛んできて、この分ゆけ

ば、成功疑なしと、船上の乗員は、美しいラインの夜景を見下ろしてゐたとき、

「左舷モーターが變調です」

「なに、又故障か」

早速調べてみると、軸承が減つてゐるらしくゴトンゴトンの妙な音をたてる。

「こりや一寸した故障でない」機關長は、直ちに決心した。「オーベルテュルクハイムに着陸して、あ

すこのダイムラ工場で交換する外ありません」

「よろしい。そこまで残る發動機でゆけるか」

「速力は可なり落ちますが、ガソリンは十分あります。」

「では」船長は、操縦者に命令した。「コースをかへシユットットガルトへ向け」

「承知しました」

カールスルイエの上空から、大きく左へ舵をとつて、船首はシュットットガルトへ向つた。

風は次第に吹きつにつて速度は減つたが、どうにか飛行をつづけて、五日の拂曉、シュットットガルトの郊外、エヒターディングンの野外に無事着陸したのである。

『おーい、出てみるよ、巨い飛行船が降りるぞッ』

『ツエッペリンだァ』

『飛行船だ』

近所の人ばかりでない。シュットットガルトからも見物人が、始めてみる大飛行船を側でよく見やうと押しよせてくる。

急を聞いて駆けつけた軍隊も、繫留索を握つて、曉の南風そよかに吹く野外に横つてゐる巨鯨を守つてゐた。

『發動機の修理は午前中にすむ筈です。午後はすぐ飛び上つて歸る豫定ですから』

落ちついた口調で、ツエッペリンは、技師たちに修理をまかせ、本部と連絡のため程近いエヒターディングンのホテルへ出掛けて行つた。

『今夜は凱歌をあげて歸れる。二度の不時着陸はい経験になつた。あの巨大を飛行船が、このやうに手軽く野外へ安全に着陸できることを實證してやつたやうなものだ』

とツエッペリンは極めて冷靜がつた。

一方現場では、刻々と見物人が増すばかり、『午後は飛ぶんだつてさ、それまで待つてやうぢやないか』

『そうかい、そりや是非見なくちやならん』

『又とない機會だ。わしは辨當を持つてきたぞ。ハ』

ハハ、ハ、ハ』

見る見るうちに、飛行船 周囲は、數萬の見物人が埋めつくしてしまつた。

午後になるころ、南の風が次第に募つてきた。南西の方が曇つてきた。黒い雲が湧いてきた。

『天氣が變りそうだぞ。修理をいそげ』

『風が強くならねばいいが——』

必死となつて作業がつづけられる。警戒の軍隊や警官が必死となつて繫留索を握つて、龐大な船體を風に立て直して安全を保たうと努力してゐる。

風はつものる一方だ。人と自然との格闘だ。突如、猛烈な雷雨が、叩きつけるやうに襲つてきた。

大粒の雨は痛いほど群衆の頭上から降りつけ、吼え狂ふ巨獸のやうな突風が、ひつきりなしに、西側から、吹きつけた。

LZ III號の、大きな腹を押へつけ、押へつけ揉み下ろした。

もう人力の及ぶところではない。繫索は、プツプツと切れる。ごうつと物凄く一陣の突風が唸つたと思ふと、龐大な飛行船は忽ち吹き上げられて、百メートル位まで跳り上つたと見る間に横ざまに、地上に叩きつかつた。一本の木が船體に觸れた。瞬間、天も地も一瞬、青白い光につつまれ、轟然とした音もたてて水素ガスは爆發した。

忽ち赤い焰が天に吐き上げ、恐ろしい勢で全船體を包んでしまつた。

この義侠

すべてが一瞬であつた。
人の力が、いかに小さく、みぢめなものであるか

を示した一刹那である。

駢つけたツェッペリンは、見よ、果々と重り合ふ金属片、焼けただれ、焦げつくしでめちやめちやに歪み曲んだ巨體の残骸、まだ所々に、ぶすぶすと燻つてゐる餘燼の中を、白影の頭を垂れて靜かに歩みを選んだ。

『…………』

一言も語らない。だが、急に年を老つたことを感じ、頭の中は激しく亂れ、生涯の希望の消失を知つたツェッペリンは、黙つて踵をかへして、停車場の方へ戻つてゆく。

道々、澤山の人々が、見知らぬ人々が、口々に悼みをのべた。慰めの言葉をかけた。が、今は耳に入らなかつた。

フリードリツヒスハーフェンに歸りつくつとそこに

は、やがて記録を作つて凱旋する飛行船と、ツェッペリン伯を迎へるための旗旗や綠門が、悲報を知つて急に取片づけられてゐたが、はがし忘れたか、ポスターが雨にぬれて、風に吹かれてゐるのが一層佻しい。

『この事件は絶望的である』この世の人とも思へぬ相貌で、ツェッペリンは、力のない足どりを事務所へ向けた。『構造に缺點はない。が、どんな天氣にも飛べる。目的地にゆける性能の飛行船——それから何と遠いものだつたか』

恐らく政府は買上げを中止しやう、もう援助も望めまい。ここまで来て、放棄せねばならないのか。

ツェッペリンは、暗澹たる氣持で、事務所へと入つた。

『この部屋から、もう二度と飛行船が生れることは

あるまい——』

と、奮闘と困窮の中に、ただ將來の希望をかけてきた事務所に入つてみると、その机の上に、何かあつたらう。

『や、これはッ』

そこには、山とつまれた電報があつた。速達があつた。

『心配するな、仕事をつづけよ』

『資本金はいくらでも出そう』

『僅だが別送一萬マーク御嘉納あれ』

『…………』

一通、また一通、どうも皆老伯爵の悲運を慰め、援助を惜まない獨逸民族の俠氣が溢れてゐる。

民衆は、遂に偉人を見出したのだ。不屈の魂、高潔な人格を知つたのだ。灰燼の中から尊敬と信頼を

燃え上らせたのだ。

ツェッペリンの祖國愛が、民衆の胸にひびいてきたのだ。

成功から失敗へ、悲嘆から感激へ、あまり今日一日の變轉の目まぐるしさに老伯の心身は綿のやうにつかれ切つた。が昂奮と、感激とは、ひしひしと、人生のあらゆる試煉にたえてきた彼の魂を揺り動かした。

『よし、やらう全國民の熱誠に答へるために——』折しも、この奇蹟的な出來事に夢ではないかと駢けつけてきた部下の一同も、各方面から尙ほ、續々と援助の手をさし伸べられてゐるのを知つた。

『大學生たちは、街頭演説をやつてゐますよ、ツェッペリンを再起せしめよつてね』

『學童がお小遣を使はないで寄附にきましたぜ』

富豪から五萬、十萬と纏つた大口もある。數日にして、六百二十餘萬マークに上つた。

『この金は一マークだつて無駄に使つちや國民に濟まぬ、再び失敗をくりかへしては申譯がない』

と政府と折衝して「飛行促進ツエツペリン基金財團法人」を設けた。このうち、三百萬マークでフリードリツヒフーフエンに飛行船製作工場を作り、これを會社にして「ツエツペリン飛行船製作有限責任會社」を組織した。

勿論ツエツペリンは社長であるが、商務參與官コルスマン氏が入つて取締役會長となつた。このコルスマン氏の父は曾つてツエツペリンの不遇時代アルミニウムを、無償にて提供してくれたベルグ氏である。

また往年の倫敦エックナー博士は、親交を結んで

以來、ツエツペリンの意中の人であつたが、宣傳と普及のため招かれて就任し、デニウル工學博士が技術部長の椅子についた。

轉禍爲福、ここに新らしい陣容は成つた。その上陸軍大臣は、

『あれ丈け飛へば立派なものだ。新に第五號船が出来たら購入することを約束しやう』と述べたし、ドイツ技術協會では、技術最高メタルを贈呈してきた。いや、もつと輝かしい光榮は、皇帝カイゼル自ら十一月にフリードリツヒス・ハーフエンを訪問して親しくツエツペリンを引見し、

『君は世紀の偉人だ。』

愛國的義務をなすとげると云ふ事を自ら實踐し、模範を示してくれた。獨逸國民に代つて朕は、君の成功を祈る』

とほめたたへ、手づから黒鷲勳章を老伯の胸間に飾つたのである。

輝かしい勝利、

上は皇帝から、下、民衆からの讚美、湧き上る俠授。

『だが、わしはこれに甘んじてゐていいだらうか。

いや、そんな事は良心の許さぬことだ』

民衆は、いつ讚美の聲を呪咀にかへるか判らないのだ。國民的熱狂が大きいほど、一朝冷却し去つて反くことも考へられる。

『我々は困窮に屈しなかつた。同じようにこの榮譽に甘へてはならぬ。

I Z四號の失敗は明らかに、飛行船が天候に對する弱點を曝露したものだ。これを改めなければ、眞の軍用には提供できないぢやないか。

我々は冷靜、謙讓に、技術の改良に努力しやうではないか』

老伯は、新會社員を集めて熱誠をこめて説いた。

そして、いよいよ眞の飛行船時代へ邁進しやうとするのだ。

第三章 戰雲に駈る

カイゼルの招宴

フリードリツヒスハーフエンの工場では、人々は蟻のやうに働いた。悲運の第四號と同一第五號船は一九〇八年（明治四十二年）の春に完成した。

『同じ作るなら、全く新設計でやつたみては』と一

部で云ふ人もあつたが、彼は

『いや、第四號は炎上したが、構造的に缺陷を認めてゐない。もし缺點があるとしたら飛行中の動力學的の點だ。それは同じものを作つて、もつと研究すべきである』

と主張して、自ら試験と研究を重ねやうとしたのである。

五月二十九日、新造第四號は、行先も告げず、北方へ向つて飛び出した。

『きつとベルリンへ来るに違ひない』

この噂が忽ち擴つて、ベルリンでは、氣の速い都會つ子は、テルベルホフ飛行場へ集つてくる。

夥しい群衆のなかには、何とカイゼル並びに皇后が、皇子、皇女を伴つて臨場してゐたのだ。

ところが、もう来るか、来るかと待つてゐる興奮

の最中に、

『ツエッペリン飛行船はバックフェルトから、引返した』とのニュースが來た。

『何だ、もう百キロほどなのに——』

『待ち呆けか』

と、不平たらたらで人々は引揚げてゆく。カイゼルの御機嫌も頗る斜めだつた。

だが、ツエッペリンにしてみれば、始めから、ベルリン訪問などを考へてゐなかつたし、多數の人々がテンベルホフへ待ちうけてゐることさえ知らなかつた。

歸途ガソリンが缺乏してグッペンゲンに降下し、その際、梨の木に船首を打ちつけて破損したが、直ちに修理して、翌日無事歸還した。

この相當、不安定な天候下に於て野外飛行の成功

したことは、伯の確信をいよいよ高めた。

そして、第三號船と共に二百五十萬マークで陸軍へ引渡され、直ちに第六號の建造が進められた。

『今度の新造船でベルリンを訪問しやう』

と發表して、待呆けを喰つて御機嫌の悪いカイゼルに約束した。

その年の八月、出來上つたL1第六號はプロペラの驅動に新しい工夫をこらしてゐたので、もつと十分試験をしたかつたが、氣の短いカイゼルから矢のやうな催促だ。

よし行かう。

敢然とベルリンへ向つて出發し、途中豫定のビッターフェルドに着陸し、ツエッペリンは、船室に立つて、晴れの首都入りを空中から、微笑を以て熱狂する市民に答へた。



近代大都市の上空に浮ぶ銀の巨鯨——市街は人で埋れ、サイレンは鳴り、國旗はひるがへる。

カイゼルは、ツエッペリンを官殿に招いて一夜の盛宴を張つた。そして官廷の露臺にカイゼルと相並んで立ち、熱狂する首都の市民の歡呼に答へた。

『私はいま光榮の絶頂にゐる。ますます責任の重となつたことを自覺せずにおれなう』
と彼は語つてゐる。

さて、第六號は、ベルリンを出發し歸途についたが、ビュルツツイヒ附近までくると、新しい鋼帶式傳導装置が壊れてプロペラーが飛んだ。

そして羽根が船體を破つて、ガスが洩れはじたので、已むなく不時着した。

『またエヒターディンゲンの二の舞をやるぢやないか』

誰も彼も、非常に心配して三日間吹き荒れる突風の中で、空模様を眺めて修理をいそぐのであつた。

しかし、幸なるかな、今度は無事離陸して、フリードリッヒスハーフェンに歸りつく事が出来た。

一九〇九年は、どうにか成功の記録を飾つて暮れて行つた。

デラীগ出現

『さて、どうやら飛行船は成功らしいが——』

ツエッペリン會社の幹部では、會社の經營について相談をつづけた。

『いかに飛行船が良くても買手が無くちや、あとの建造が出来ないんだ』

『軍の意嚮はどうなんです』

『今のところ、陸軍は、これ以上豫定はないやうだ』

し、この間デルベック海相に會つてみたが一向氣乗りせぬ様子だ』

これでは、折角の飛行船も寶の持ち腐れた。そこでコールスマン取締役は一つの案を思ひついた。

ドイツ飛行船航空輸送會社——略稱デラীগ——を設立し、この會社から飛行船を注文し、航空船で輸送事業を行ふと云ふのである。

勿論、こんな各都市間の短いところで飛行船で定期航空をやつても營業はならぬが、何しろ全國民のアイドールであるツエッペリン飛行船に、旅費さへ拂へば乗れると云ふので、人氣を呼び、各都市の市長二十七名が監査役となり、三百萬マークの新會社が出来た。

デラীগの注文で出来た最初の旅客用飛行船は、「ドイツチランド」號と命名され、全容積一萬九千

三百立方メートル、百二十馬力の發動機三臺を備へたものであつた。

この會社は、デュセルドルフ市の郊外、ゴルツハイムの森林近くに格納庫が設けられ、一方、ボーデン湖上の浮格納庫は廢止されて、フリードリッヒスハーフェンの野原に繫留柱を建て、格納庫を設けるなど、飛行船取扱ひ技術も進歩してきた。

かくして、全ドイツ民衆の期待と、新時代の歡喜を浴びて、「飛行船時代來る」と新聞紙は大々的に報じ、世界の眸は、この巨船の成果に向けられてゐた。

だが、幸運は長くつづくであらうか。輝かしい航空時代はやつてきたであらうか。

慘又慘巨船の最後

ツエッペリン伯が十五年の心血を濺いできた愛兒は、健やかに育つてゆくことを、どんなに祈り期待してゐたであらうか。

然るに一九一〇年は、ツエッペリンにとつて、再び悲運と失望の連続であつた。

陸軍第二號飛行船——元のLZ五號船は、この年の始めにジーゲン附近で飛行練習中、天候に祟られて不時着し、突風のために眞二つに折れてしまつた。つづいて七月には、デラーグ會社の旅客船ドイツチエランド號は、空の初旅に祝福をうけて出發したが、俄かに天候が悪くなり、加ふるにモーターは故障を生じ、強風に吹き上げられたので、已むなくガスを抜いて降下した。ところが篠つく雨が船體を重くし、乗員は必死となつて、バラストを捨て、お終ひには美しい客室内の椅子から机まで取外して投下

して浮揚力を保たうとしたけれども、遂に及ばずして、ハイリブルグの山林中に落下してしまつた。幸ひ、旅客に死傷者はなかつたが、眞青になつた人々は生きた心地もなく、樹木の中に粉碎されてゐる船體の下から逼ひ出した。

デラーグ會社では、發端の失敗をとり戻すべく、さきにベルリン訪問に成功したLZ六號を購入して、船體を長くし、第三のモーターをとりつけ、美事にバーデンバーデンの往復に成功した。

『幸先きがいいぞ』
と喜んだのも束の間だつた。

十月の中頃、デュセルトルフ格納庫内で、整備員の誤りから火災を起して焼失してしまつた。

しかし乗りかけた船だ。デューグでは直ちに第三の飛行船を注文した。

『今度こそ立派な成績をあげる飛行船を引渡すぞ』
ツエッペリン會社では必死となつて新造船、第二ドイツチランド號の建造をいそいだ。

『こう事故がつづくと、又しても世間で飛行船に對する信用が無くなるから——』

『いや、世間では、もう大分飛行船の性能について疑問を抱いてゐるやうです。何しろ一年間に三隻も失つたのですらねえ』

『そうだらう。だが——』ツエッペリンは、相變らぬ冷靜と、樂天的な態度で『我々はそのために自身で技術を疑つてはならない』

と一層研究に研究を重ねて、一九一一年三月三十日、第八隻目の新造船が生れた。

悲運のドイツチエランド號と同型で、全長百四十八メートル、三臺の百二十馬力發動機を有してゐた。

この飛行船は、五月末まで、三十回にわたつて、飛行し、一旦失墜しかけた信用を、漸くとり戻しかけた。

が、何たる不幸、格納庫から引出すとき、誤つて扉に船體を打ちあてて大破し、遂に解體の已むなきに至り、デラーグ會社は、休業することになつてしまつた。

繼續か、中止か

デラーグ會社にとつては、まさに存亡の秋だつた。同時にツエッペリン會社にとつて、何度となく重役會議が開かれた。

『我々は、慈善事業でやつてゐるんぢやない。技術的に澤山の疑問のある飛行船を、この際斷念した方が、よいと考へる』

「見込みのない事業を繼續することは、事業家として堪へられぬことだと思ふ」

と強硬に中止を、唱へる一派があつた。

「しかし、我々はツエッペリンと共に進むべきぢやなからうか、打ちつづく不幸にも、動搖せぬ彼の信念、事故の責任者に對しても、慰めと勇氣づける彼の態度を思ふと、ここで我々は事業を打切ることは老伯爵に對して氣の毒でならぬ」

と應じうした。

「しかし飛行船は、技術上からみてどうですか、第一性能が劣つてゐる。第二に氣象に對して餘りに弱い、第三に地上の取扱が不便だ。今迄の事故は皆この原因だ」

「或はそうだらう。だがモーターは年々改良されつつある。マイバッハ博士は、一臺ごとに強力で軽い

モーターを製造してゐる。間もなく性能を向上し、

どんな天氣にも飛べるやうになると思ひますがね。

地上の取扱ひだつて要するに熟練の問題で、根本的に飛行船を疑ふことは出来ないと思ひますよ」

「しかし、差し當つては、會社は事業を中止すべきだと思ふ。經營上から見て——」

「いや、然し、國防と云ふ事を考へると、多少の犠牲——つまり私の犠牲を拂つても軍用飛行船を促進すべきが我々の義務だと思ふね」

事實飛行船の性能は、次第に向上をみせてゐた。

第一號には一馬力二十六キログラムもした重い十馬力のモーターをつけ、辛じて二十一キロメートルの速力だつた。それがドイツテラランド號では、一馬力三キログラムの軽さとなり。七十キロメートルの高速力を出すやうになつたではないか。

「とにかく、今のところで、ドイツには飛行船の友は一人もゐない」と反對論者が叫ぶと「だが、ツエッペリンの友はゐるぞ」と繼續派の人々が答へる。

「とにかく、我々は飛行船そのものに、尙一抹の不安を免れないが、ツエッペリンその人の信念と、熱に對しては、無限の尊敬を拂はねばならぬ。

そのうちに、もう一隻だけ註文したいと思ふ」

コールスマンが決を求めた

これには誰も不賛成を唱へない。

かくして、ツエッペリン第十號シユワペンランド號が建造されたのである。

偉なり新造船

シユワペンランド號は、一九一一年六月二十六日に竣工したもので、全容積一萬七千八百立方メートル

ル、全長百四十メートル、發動機は更に強力な四臺で合計四百三十五馬力になつた。

そしてデラーグ會社では、前の苦い經驗に鑑みて厄介な地上操作を安全にするため、デーデンオースに格納庫を設けて、ここから發航することにした。

最も苦手の天候については、その時代は航空氣象學の發達してゐなかつたから高空の模様がすぐ判らない。それで、夏の比較的天候に恵れたときを選んで發航した。

かくて、シユワペンランド號は、毎秒二十一メートルの高速力を出した。

「二十年前シユリーフエン將軍に約束したスピードがやつと出せるやうになつたぞ」

ツエッペリンは、素志が、やつと一階程についたことを知つた。思へば長い長い苦闘の歲月だつた。

よくも、ここまで堪へてきたものだと思ふ。
シユワペンランド號は翌年へかけて、全く無事故
で二百五十回の飛行に成功した。

世人の信用は、再び硬式大飛行船の上に戻つてき
た。この好成功に刺戟されて、デラードは、ヴィク
トリアルイゼ號、ハンザ號、ザクセン號の三隻を加
へた。

ザクセン號は、バーデンからウインナまで國際
的大飛行を八時間で行つて「飛行船の勝利」を高ら
かに告げた。

陸軍當局も、この成功にいたく動かされた。シユ
ワーペンランド號に同型の陸軍Z三號船が完成して
引渡されるし、海軍でも長年の反對論を引込めて、
Z型よりも大きいL一號を注文した。

L一號は、二萬立方メートルの容積を持つもの

力のある飛行船を希望した。

一九一四年には、L三號が出来上つた。これは二
萬二千五百立方メートルの、六百三十馬力の強力な
モーターで、七十キロの速力を出しうるのだつた。

『これなら、軍用として使へるぞ』

『そうだ、この間の試験飛行ぢや三トンの武器をつ
んで三千メートルまで上昇したからな』と軍當局
も、飛行船の性能について確信を抱いた。

然り、その時代、ブレリオ單葉飛行機が、英佛海
峽三十五キロを、やつと横断したばかり、僅か二人
乗の飛行機が、二、三時間飛ぶのが關の山だつた頃
である。

將來のことは別として、今のところ、積載力や、
航續力では、飛行機はとうてい飛行船に及ばない！
これが、航空界の定評であつた。しかもヨーロッパ

で、試験飛行のとき、フリードリッヒス・ハーフェ
ンを出發して、ヘリゴランドの海軍基地を飛してへ
ヨハネスタールまで、三十四時間の繼續飛行に成功
した。

『二十四時間飛行の要求に慫慂されたのが、ついで
の間であつたのに——』

この輝かしい成功にもまだ満足はできなかつた。

一九一二年九月、もつと大きいL二號が出来上つ
た。直徑十七メートル、二萬七千立方メートル、全
長百八十メートルの巨大なもので、百八十馬力のモ
ーターを四臺備へてゐた。そしてゴンドラを連結す
る通路を船体内に設けたり、特色のある構造を有し
てゐたので、試験飛行のときに、水素が爆發したり
いろいろ困難も伴つた。

しかし、海軍では長距離軍用として、もつと航續

バは、伊土戦争、バルカン戦争と打ちつづく戦火に
不安と、危機は、ぢりぢりの國際的に迫りつつある
のだ。

大戦勃發す

かくて、ツエッペリン飛行船は、軍用として本格
的に採用された。

フリードリッヒスハーフェンの工場は、日ごとに
擴張され、リベットの音、ハンマーのひびきが、
活潑にひびいた。

ツエッペリンは、既に、七十七歳の高齡に達して
ゐた。

もう今は、完成した道にあつた。あの苦しい金策
や、反對者との闘争や、事故に對する不安はない。
エッケナー博士をはじめ、彼を信じ、彼を尊敬す

る部下たちは、ツェッペリンの心、そのままの心して致々として働いてゐる。

しかも、彼は、この飛行船を完成するまで金屬、瓦斯、發動機、計測器、球管の各部門について、ドイツの一流會社、工場、學者たちと協力してきた。グイムラー、マイバッハの兩發動機會社ベルグのアルミニウム會社、ノイハウゼン・クルップ等々……夥しい協力者を持つてゐる。

この協同、この一致、それこそ劃時代的な發明を完成させたのである。そこには一片の私心もない。發明によつて利益を求めようとするのでもない。「國家のための飛行船、國防のために必要な航空兵力としての飛行船」だつた。

そこへ、突如として、夏空に湧く雲の峯が、崩れ落ちて擴つた、夕立となつて降りしきるやうに、セ

ルビアの一角、サラエボで射ち放たれた一發のピストルを合圖に、一九一四年八月、セルビアとオーストリアは、つづいてロシアは、イギリスは、フランスは、ドイツを中心として漢々たる戰雲が、舞ひ上つた。

軍馬のいななき、進軍ラッパ、砲軍はきしり、ここに世界大戰は、それから五年にわたる長い人類相刻の幕をあげたのであつた。

戰爭が起ると共に、陸軍飛行船は、直ちに出勤した。海軍L三號船は、北海の空を飛んだ。

『もつと速い、もつと高く昇る飛行船を作れ』

軍は、ツェッペリン會社を督勵して飛行船の建造をいそがせた。

『今こそ祖國のために盡すべきだ』

ツェッペリン工場は、全能力をあげ、勞働力を巧

みに管理して、一隻の飛行船を六週間で完成する域に達した。

戦ひの第一年、即ち一九一五年（大正四年）末までには、次のやうな多數の軍用船が作られてゐる。

即ち、ツェッペリン第二〇號から第四十號まで、廿隻に及び、陸軍用第五號船から十一號船まで、海軍第四號から十二號船まで、まるで魔法使ひのやうにあの巨大な飛行船 生み出されたのである。

これは、ただ技術の進歩だけのなし得たところであらうか。

否、ツェッペリンの偉大な人格の反映に外ならない。ただ國家のために、國防のためにのみ、飛行船の眞價を發揮させようと願ふボーデン湖畔の巨人の精神力が、この著しい進歩を齎したのである。

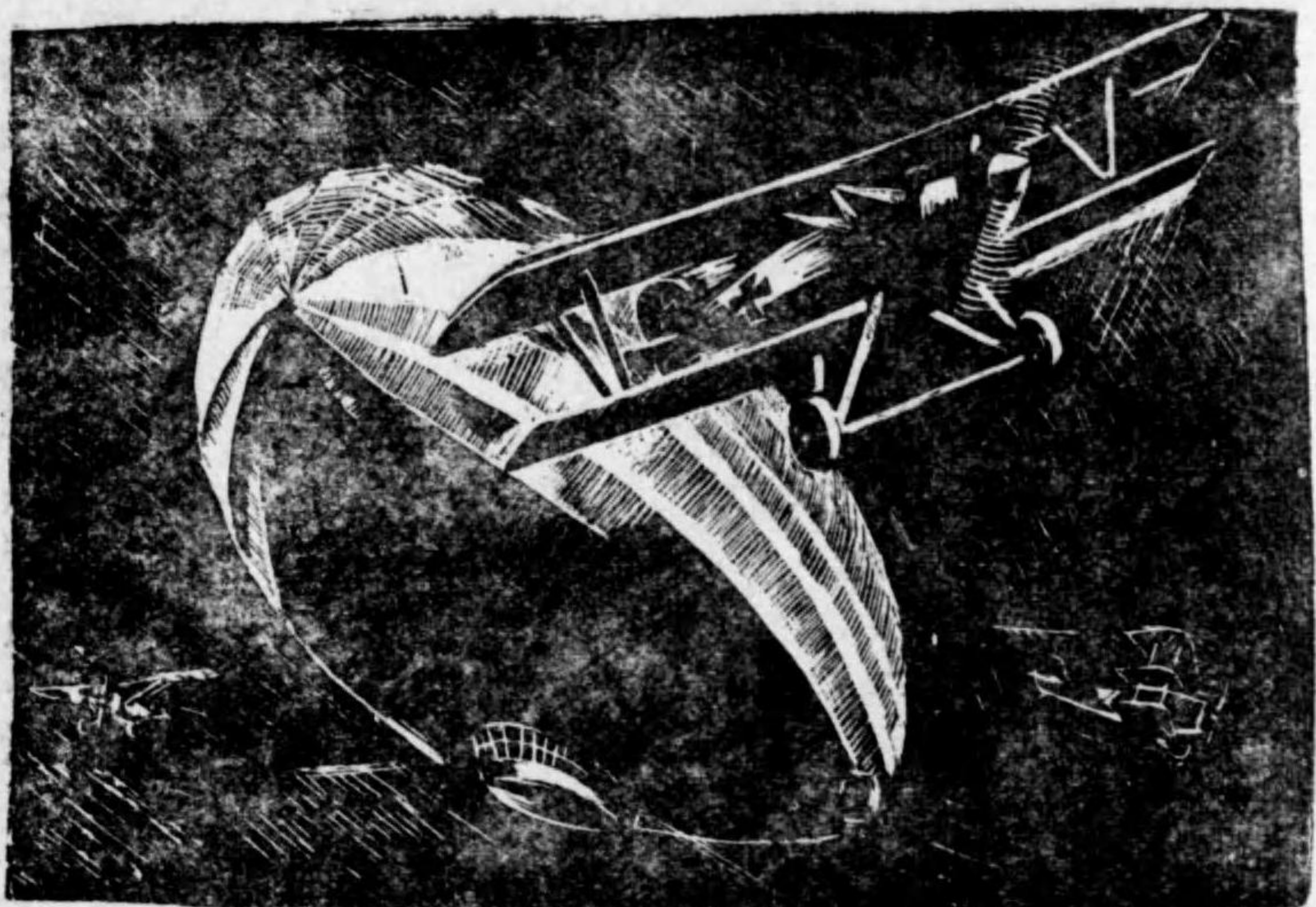
第二篇 世界への翼

第六章 大戦中のツエツ ペリン

ロンドン空襲

それは一九一五年（大正四年）の一月十九日の夜のことであつた。

外出先から十一になる長男をつれて、英國グレート・ヤーマス市の自宅へ歸りをいそいでゐたセイヤーと云ふ男は、眞暗闇の空に、
『ごおーん、ごおーん』



九〇

と異様に唸る音をきいた。飛行機にしては、ちと音が違ふやうだ。空を仰いでも何も見えない。

『お父さん、恐いよう』

不気味な音に、おびえる小供を抱へるやうにして二人切りの静寂な街路を憑かれたやうに走つた。

とたん、頭上から一閃、また一閃、何事とも判らぬ混乱した音がして、地上に物の碎ける響が耳を壓した。

セイヤー親子の周囲は、金屬的な物音といろいろと碎け落ちる破片で一ぱいになつた。

二人は方向も關はず逃げ走つた。

そつ邊には何物もなく、生き物は小犬一匹もゐなかつた。かうかうと崩れ落ちる響は、周囲が急激に破壊を始め、この世の終りかと思つた。セイヤー親子は全く生きた心持もなかつた。

これがツエツペリン飛行船のイギリス本土空襲の最初の印象だつた。それは既にこの頃、物資の缺乏に苦しみ始めたドイツがイギリス本土を爆撃して、最も慘澹たる戦禍を海上に孤立する島帝國の住民に與へ、戦の終結を齎らそうとした手段であつた。

一九一四年には、ツエツペリン飛行船は、六隻が海軍に、四隻が陸軍に配屬されてゐたが、屢々イギリス飛行隊の遠征で、格納庫を爆撃されたりしたので、大切な飛行船を失ふことを恐れて、容易にイギリス遠征の命令を下さなかつた。

しかしこの日、遂に決然「イギリス本土を討て」との命令一下、巨船は出動し、ノーフォーク州を襲ひ、ヤーマスとキスグスリン住宅街を脅かしたのである。

初めて、民衆の心に刻みこまれた空中艦隊の幽鬼

的な姿は、たへない恐怖と不安を興へた。

第一回の空襲は、結果に於て僅か四名を殺し、十六名を傷けたにすぎなかつたが、ノーフォーク州一帯に起つた恐怖は非常なものだつた。

つゞいて東海岸は、屢々飛行船來るの不安に脅かされたのであつたが、天候はツエッペリンに幸せず二隻が難破して、新造に追はれ、本格的空襲は決行されなかつた。

しかし、春が再び北海に戻つてくると、銀の巨鯨は泳ぎはじめた。

し九號は四月十四日タインサイント市を襲つた。

『是非ともロンドン爆撃したい。イギリス人の心臓にメスをつきさしたい』

これが、ツエッペリンの念願だつた。

新造船は、晝夜を分たす工を急がれた。陸軍飛行

船LZ三八號は、リナルツ大佐指揮して一路ロンドンへ向つた。

しかし霧と逆風のため、サウスエンドの上空まできて引返す外なかつた。

「汝、イギリス人よ、われらは既に來たぞ。又、すぐやつてくるぞ。お前等は殺されたいのか、それとも降服したいか、ドイツ飛行船」と青鉛筆でノートに書きなぐつて投下した。

リナルツ大佐は残念でならなかつた。

五月三十一日、晴れた夜空を縫つて、ロンドンへロンドンへ向つた。

『飛行機ですッ、船長』

それは勇ましく駆け上つてきた英國防空飛行隊のムーロック中尉だつた。

『關ふな、高度をとつて振りはなせッ』

飛行船はバラストを折下して、ぐんぐんと高度をとつた。

もう飛行機は追ひついてこぬ。

飛行船は全速力で驀進した。が、遙か彼方、燈火を滅して闇に沈む首都ロンドンは、S型のテームス河の輝きは消すべくもない。

『來たぞ、いよいよ、ロンドンだ』

リナルツ大佐の顔は始めて、ほころびた。

『投弾用意！』

大ロンドンには、恐怖のどん底だつた。東區、北東郊外へは、爆弾が雨と降つた。實際の戦果は、あづかに七人を殺し三十五人を傷つけたにすぎなかつたが、防空の飛行機九臺は空しく地上に舞ひ戻つてしまひ、地上は破壊と不安と、恐怖の中で呻いたのである。

あゝ、ナポレオン以來、外敵を一步も入れないと誇る大英帝國の誇は、ツエッペリン飛行船の下に粉

砕され、首都ロンドンは降る火の雨を浴びねばならなかつた。

『どうだ。俺の持論は正しかつたらう。飛行船でなくては、このやうな敵國の心臓をつくことは出來ぬのだ。この積載力、この航續力——だが俺はまだ不満足だ。もつと速く、もつと高く、もつと遠くへ飛べる飛行船を澤山作らう』

ツエッペリンは、一旦隠棲したボーデンゼ湖畔の別荘を出て、老齡にも拘らず工場へ、つめ切つた。

六月九日の朝だつた。

『閣下ですか、こちらは飛行船隊本部ですが』
けたたましく電話が鳴りひびいた。

『昨夜ハル市を攻撃致しました。し九號をマシイ大

佐指揮し、多大の損害を與へましたが、LZ三十七號は、ベルギー海岸で英國の哨戒機のために撃墜されました」と報告だ。

さつとツエッペリンの顔は曇つた。

一臺の飛行船も彼にとつては愛兒にひとしい。

『今にみる、やつつけるぞ』

彼は工場に命じて、晝夜兼行でL一〇、一一、一二、一三の四隻の四隻の空中艦隊をととのへてロン

ドン空襲を行はしめた。

だが天候とイギリスの防空火力のために、ロンドンに達したのみであつた。フェイエルトラア中尉の指揮した十二號と、バテルゾン少佐の十三號船は、敵砲火のため焼失してしまつた。

『俺は屍古れないぞ!』

ツエッペリンは全精力を傾倒した。八月十七日、

遂にL一〇、一一、一四號がロンドンに向つて、ウエック大尉の十號船は美事ロンドン市の中心に達しマシイ大佐の十一號も郊外附近一帯を猛爆し、ロンドンには、火の海と化し、慘澹たる光景を呈したのである。

『この機を逃すな』

と追ひうち、九月七、八兩日には、マシイ大佐が歴戦の手練を以て、百七十一名の死傷者は街頭に果々と横たはり、ロンドン市民は崩れ落つる家の下で、生きた心地もなく、防空の不備を訴へ、恐怖の中に蠢めかきしめるに至つた。

ツエッペリン空襲! それはロンドン市民にとつて夢魔であつた。

十月十二日の黄昏時、曇つた夕空はまだそんなに寒くないころ、倫敦のライシエム座が「女の友情」

の公演を始めやうとしてゐるときだつた。初冬の空気を楽しんで人々が街頭に溢れてゐるとき、不気味なサイレンの唸り、「空襲! 空襲!」

人々は算を亂して地下鐵へ潜りこもうとするときより早く、濛々たる煙、ライ・シーエム座は眞二つとなり、十七人は粉々となつて惨死し、二十一名が傷き、ストランド座では四人が絶命し十五人が傷いた。

ロンドン・インの美しい古代硝子窓は、無慘に打くだかれ、ハットン・ガーデンからファリントン路へかけ一帯には、空魔の荒狂つた跡が残つてゐる。

これぞブレイトハウッド大尉、マシイ大佐らのI一五號、十一號、十六號の大船隊の振つた猛威だつた。

ロンドンのみでなく、ブロークンスバーン、ハッ

トファイルト、ソークリフ、ヘイス、タンブリッチ、ヴィクレイなどの都市も、それぞれ大なり小なりの被害を見、百九十九名の死傷者を出し、ツエッペリン禍は、いよいよイギリス國民の心を暗くさせた。しかし、ロンドン市の防空も次第に充實し、高射砲や探照燈が、しきりと巨鯨を狙ひはじめた。

一九一六年(大正五年)になつて一月三十一日、L十一、十三、十四、十五、十六、十七、十九、二〇の八隻から成る大船隊が、ロングボローグとブレトン・オン・トレントの兩市に猛爆を浴せたのを最後に、今迄のやうな空襲を行へなくなつてきた。

このときもウット・ロウヴェ中佐の一九號は、高射砲の一弾をあびて船體を破損し、北海に落下してしまつた。

來合せたトロール船に救助を求めたが、

『船が小さくて乗員を收容し切れないから』
と見すてて行つた。

ロウヴェ中佐らは「我等の最後が来た」と沈みゆく船體の上で、報告瓶を流し、そのまま全員壯烈な殉職をとげてしまった。

三月末にはL十五號は、氣囊に高射砲彈が命中して海上に落下し、ブレイスハウプト大佐以下乗員は捕虜の憂目を見たのである。

『よし、今に仇を打つてやるぞ』

ツエッペリンは、新らしい威力のある新飛行船の建造に、工場を督勵した。

陸海軍當局や、國民の間からも、

『ツエッペリン飛行船は何をしてゐるのだ』

『天候と高射砲には敵はないのか』

と、喪はれた飛行船の隻数を數へて、ツエッペリ

ン飛行船の無力を非難するものも現れてきた。

このころ、主にゴータ爆撃機が代つて、イギリスを空襲しはじめ、相當の成果を収めつつあつたからでもあらう。

『飛行船に缺點はない。もつと、もつと作らねばならぬ』

ツエッペリンは、もう餘程齡をとり、健康も良くなかつたが、それでも屈しなかつた。

鬼船長の最後

一九一六年（大正五年）八月二十四日、百戦練磨のマッシーは、老伯の決意に感激し、再び決然ロンドンを襲つた。

『大擧して前進せよ』との命令をうけ、十六隻から成る大飛行船隊は、更に九月二日ロンドンに向つて

進攻したのである。しかしイギリス側の防空陣も整備され、必死と照らす探空燈の十字照射をうけて、

シュツテ・ランツSL十一號は、エンフィールド附近で、防空飛行隊のロビンズ中尉の飛行機の猛撃をうけ、忽ち巨船は炎々と燃え上り、カフレイの野に墜落し、ツエッペリンとして最初に英本土内に残骸を曝す悲運をうけた。

しかも、それについて、超ツエッペリンL三三號は建造されたばかりの處女航空をロンドンの空襲に向つたが、地上砲火に射ちまくられ、九月二十三日東海岸に不時着してしまつた。更に二十五日は同じ超ツエッペリンL三三號を、ビルリシイ附近で射落されてしまつた。

もちろん、この間、ロンドンを始め、附近の都市は、數度の爆撃をうけて死傷者を多數出してゐるが

相つぐ飛行船の喪失はさなきだに、材料不足に悩むドイツにとつて大きい痛手だつた。

十月一日、初秋の晴れた空、星屑の數まで、讀める静かな夜、こんなときは、きつとツエッペリンが來ると、ロンドン市民は燈を消し、聲をひそめて戦慄々としてしてゐた。

果せるかな、イギリス人にとつて恐ろしい空魔王ハインリッヒ・マッシー大佐は、常の如く一路ロンドンへ向つたが、防空砲火を避けつつハートフォードセーアの上空を、左に右に迂航しつつ、執拗に首都へ迫つて行く。

しかし、地上の花火と探照燈も、容易に目を放さない。

『出直した。縁起でもないサーチライトだ』
とマッシー大佐は、チエスハント附近へ全彈を投

下して歸航の途についた。

が、このとき、こつそり飛び上つたイギリスの防空機を操縦するテンベスト中尉は、探照燈の光りをすかしてみると、

「見えるぞ、怨敵でござんなれ」

と巨船の上空に迫つた。

マッシー船長が「飛行機だッ」と氣のついたときはもう遅かつた。

タ、タ、、、。

一直線に巨大な船上を通過しつつ焼夷弾を射ちこんだ。

と、焰が一行に走る。支那提灯のやうに赤々と内部から炎上した。

やがて船首は焰を吐き出した。火だ。一團の塊つた火だ。

ミドルセックス州ホッター・バーの野に、焼けただれた金屬片となつた。残骸の中でマッシー大佐以下は盡く殉職してしまつた。

「もつと、いい飛行船が出来ぬか」

「イギリスを、もつと空襲せないのか」

再び國民の中から、そうした非難が聞えてきた。

また、宣傳に巧みなイギリスは、ノースクリフ卿をして、あらゆる方法で、ドイツは人道の敵、平和の仇であるかの如く宣傳せしめた。

曰く「ツエッペリン飛行船は、軍事施設に何等の損害を與へ得なッ」

曰く「ツエッペリンの空襲の犠牲となつたのは、無辜の市民である。か弱い婦女子と幼児のみである」

曰く「ツエッペリン伯は人道の敵だ」

曰く「ツエッペリンは文明人の許すべからざる惡

魔の權化だ」

あらゆる惡罵と、呪咀の言葉を老伯に向け始めた。

中にも、老伯の心を痛ました宣傳は「ツエッペリン伯は不完全で、高射砲に無力な飛行船をして、強ひて空襲を行はせて、多數の同胞たる青年軍人を彼の名譽心の犠牲にしてゐるのだ」と云ふ言葉だつた。

戦争已に三年、四面盡く楚歌、その上、國內の物資、食糧は窮迫して國民の心も、ややともすれば動搖しはじめなのだ。

今こそ、彼が年來の希望である二十隻の大飛行船隊を、イギリスの頭上に送つて、痛烈な猛爆撃を加へることだ。

そのために、新造船LZ四十八號以下を建造してゐる。

軍當局にも進言した。

次第に弱つてゆく健康、長い間の苦闘に、身心ともに疲れ切つてゐたが、病を押してベルリンへ赴くために、フリードリッヒスハーフェンを出發した。

見送りの人々の中には、

「いつになれば、英國を叩き伏せられますか、大空中艦隊が出来上りますか」

「一日も早くツエッペリンの威力を見せて下さい」

「飛行船は果して天候に無力なのですか」

と、ツエッペリンの口から、安心の出来る返事を求めた。

心持ち蒼白な顔を伏せ、白髪はいよいよ粗になりめつきり、老の衰へをみせたツエッペリンは、ただ一言

「暫く待て」

と叫んだのみであつた。

ああ、動き出した汽車の車窓に眺めたフリードリッヒスハーフェンの大格納庫、これが、彼にとつて最後に眺めた生涯の場だった。

大戦中の發達

ここで、大戦五ヶ年におけるツェッペリン飛行船の發達について簡単に述べておこう。

すべて戦争は、武器の急激な發達をとげさせるのであるが、ツェッペリン飛行船の進歩もまた著しいものだった。

一九一五年には出來た陸軍用LZ三八號から全く面目を一新し、三萬二千立方メートルの巨船となり船尾は極度の流線形化し、複葉だった尾翼は十字型の水平、垂直の尾翼に改められて、空氣抵抗を少くし、速力は八十キロにも達するやうになつた。

海軍用L二〇號は、もつと大きく三萬六千立方メートルで、一萬七千キロプログラムの搭積力を持ち、上昇力もよくなつた。

一九一六年中にこの型のLZが二隻、L型四隻が作られた。けれども、屢々悩まされた海上の荒天に耐へるため、同年の終りには、L三〇號が、五萬五千立方メートルの巨大さを持ち、發動機も二百四十馬力を六臺に増したのである。

かくて積載力は二萬九千キログラムとなり、四千メートルの上空へ昇られるやうになつたし、秒速二十九メートルの高速力を出す新鋭さを發揮した。

『しかし、これだけで十分ぢやないです』戰場から歸つたマッシイ大佐は『敵の防空火花や飛行機も進歩しましたからね。積載力を全浮揚力の六十パーセント位にして、モーターの力を藉りなくても六千メ

ートル位まで上昇するやうにして頂きたい』と進言した。

『よし、君の希望以上のものを作らう』ツェッペリン工場は全機能を發揮して、改造に改造を加へた。

大戦末期に作られたL五九號は、容積六萬八千五百立方メートル、速力は八百キロをこへ、四萬三千キロプログラムの積載力を持つやうになり、九臺の發動機は合計千八百二十馬力を出し、それこそ、空中巨船の名に恥ぢぬものになつたのである。

ツェッペリンの愛兒とも云ふべき、ツェッペリン飛行船は、一九一〇年までに破壊した破壊を重ねて根氣よく七隻を作つたのであるが、漸く好運に恵まれてきた一九一一年には三隻、十二年に四隻、十三年に七隻と次第に建造能力をあげてきたのであるが、大戦中には、全能力を舉げて建造されたツェッ

ペリン飛行船は次のやうに夥しい數に上つてゐる。

一九一四年	十二隻
一九一五年	二十六隻
一九一六年	十三隻
一九一七年	二十三隻
一九一八年	六隻

この八十隻に上る巨船建造が、物資缺乏に苦しむ四面重圍のドイツ國內で行はれた事は、一にドイツ航空技術の優秀、二に國民の意志の強固によるのであるが、また他方、巨人ツェッペリンの人格の反映でなくて何であらう。

祖國に奉せんと

祖國、戦に赴く！

老ひたるツェッペリン伯の胸中には、若き日の普

佛戦争の情熱が蘇つてきた。

いまは、現役を退き、飛行船事業からも一旦は隠退して、静かなボーデン湖畔に「回顧録」のペンをとつて高齡をたのしんでゐたのであつたが、國難に直面しては、じつとしておれなかつた。

「祖國は美しい、献身に價する」と立ち上つて、直ちに政府の要路に、書面を差出したのであつた。

「何でもいい、どんなつまらぬ役目でもいいから、もう一度働かして頂きたい」と、申請した。

しかし政府では、この大發明家を老齡の偉人を、いかに國難と云へ、働かすに忍びなかつた。

「貴方の功蹟は、もう十分奉公の實を挙げられてゐる。靜かに、この國の英雄として御休養下さい」

と答へたが、伯にしてみると、それでは不満足だつた。

「いや、私の飛行船がどんなに活躍してゐようと、それは、忠勇武烈なる陸海軍人のお手柄です

私は今何も關係してゐる仕事はないから全身、全靈を傾けて祖國に盡したいと思ふのですよ」

と、飽くまで努力を誓つた。

そこで彼は、再びツエッペリン工場のために老齡も厭はず汝々として、計劃をすすめた。

「この戦争は、勝ち抜かねばならぬ

祖國の安全のため、祖國の將來のために、戦争目標を確立して邁進すべきだ」と説き、大飛行船艦隊を以て、一舉にイギリスを粉碎しやうと欲した。

「ツエッペリンのやり口は、まるで悪魔だ。罪もない市民を殺し、都市を破壊する文明の敵だ」——こゝう云つた非難が、巧みな聯合軍の宣傳上手に乗せられて世界中に渦まき、獨逸と同盟國のイタリアをし

て、親獨的だつたアメリカをして、聯合軍側へ走らせる結果となつたのである。

果して、ツエッペリンの飛行船空襲は、非人道的だつたらうか、非文明だつたらうか。

戦争學説の大家ジョン・フィシャー將軍でさへ、

「最も苛酷なる攻撃手段を以て敵を最短時間に征服することは、むしろ最少の犠牲を要するのみなる點からみて、人間的である」と云つてゐる。

しよせん、戦争は殺戮と破壊である。然らば、假借なき手段を以て、出来る限り速やかに戡定することは人道的である。

一九一六年、ツエッペリンは、この持論を以てホルウエツヒ首相に

「もつと飛行船とUボートを澤山配備して、攻撃をして貰はねばならん、そうすれば今年中にイギリス

を參らすことが出来る」と、申言した。

が、ホルウエツヒ首相は、あまり飛行船の價値を信じてゐなかつた。

「しかし、飛行船の建造費は、戦果の割に嵩むのでねえ」

と、餘り氣が進まぬやうであつた。

「大體、あなたが、對英攻撃にブレーキをかけるやうなものだ」

とツエッペリン伯も、屈してゐなかつた。こんな事があつて、二人の間は、拙いものになつたと云はれてゐる。

戦争が長びき、國內の窮乏が重壓を加へてくると國內政治にも、いろいろと動搖を生じた。一部に收戦主義の社會主義の一派が暗躍し、政治機關は、幾多の影響をうけた。

ツエッペリン伯の胸中には、若かりし日から培はれてきた政治的關心は、この齡になつても、決して衰へなかつた。

この祖國が臨んでゐる運命の急淵に立つて、ありし日の熱情は燃え上つた。そのためにツエッペリン伯と、政府とは屢々意見が對立し、摩擦を生じた。「何たることだ。」

眞の愛國とは何だと思つてゐるのだッ」

彼はもう一度、ベルリンへ赴いて、政府とよく相談し、大飛行船政策を遂行しやうとして、フリードリッヒスハーフェンを出發したのである。

「よし、政府が飛行船よりも、ゴータ爆撃機がやつたロンドン爆撃の効果の方を重大視するならばそれもよい。わしの工場では、もつと大きい、強力な爆撃機が出来てゐるぞ」と北叟笑むのであつた。

しかり、ツエッペリン伯は、ひとり飛行船のみに固執してゐるのではない。彼の股肱の一人とも云ふべきドルニエ博士らによつて、ベルリン近くのスタッケン工場で、六臺の發動機をつけた大型爆撃機の建造に着手してゐるのだつた。

不幸にして、このツエッペリン・スタッケン式爆撃機は、ロンドン空襲に使はれなかつたが、當時世界最大の爆撃機だつた。これはツエッペリンの廣い客觀的性格の表はれとみることも出来やう。

巨人の終焉

ああ、しかし世紀の巨人ツエッペリンの胸中に抱かれてゐた大空中艦隊も、大旅客航空船も、まだ實現するに至らず、祖國ドイツが戦場の赫々たる勝利に比べて、國內における物資の窮迫と人心の動搖を

支へ切れず、最も不幸な、最も慘澹たる結末が、民族の上にふりかかつてくるに先ち、一九一七年三月八日、ベルリンに於て、巨人は客死したのである。

あたかもこの日、新たに建造したばかりの飛行船が、處女飛行を終へて、フリードリッヒスハーフェンに歸還し、格納庫中に引き入れるや否や、一天俄かに掻き曇つて嵐が來襲した。

南西 烈風は、浪を起こし、風は吼えて、平和なポーデン湖上、山のやうな怒濤は岸邊を噛んだ。砂は濛々と吹きあげられて、天地はまさに、暗澹たる有様となつた。

この時刻、はるかベルリンの客舎にあつて肺炎を病んでゐた老伯は、一生の意志力も情熱も、死の轉機には耐へられなかつた。

巨人逝く！

この悲報に接したフリードリッヒスハーフェンのツエッペリン飛行船製作合資會社では、格納庫上高く哀悼の半旗を掲げた。

しかし、吹き荒れる烈風は、この旗竿をへし折つて、半旗をひようひようと晦冥の天の彼方へ吹き飛ばしてしまつた。

この有様は、聯合軍の不當なる非難や、國民の疑惑に對して「暫く待てッ」と叫んだ魂の如く、飛行船發達の將來に對する激勵ともみえた。

だが、この世紀の偉人すでになし。

カイゼルは、故伯爵のために、悼問使をその客舎に遣はし、遺骸をフリードリッヒスハーフェンに送るに當つては、特別仕立の列車を、警備するため一ケ聯隊の儀仗兵を特につけしめた。

かくて獨逸全國民は、ツエッペリン伯の逝去を悼

み、盛大なる葬列の上空には、亡き伯の遺児たる超ツエッペリンが數隻堂々編隊をととのへて翔つた。葬儀場に於て、コルスマン取締役は、

「この國歩艱難の秋に於て、我々は最も尊敬し愛慕して已まぬ中心を失つたのは誠に、痛恨に堪へないが、伯の逝去こそ、その生前の偉業を我々に残し、我々に完遂せよとの無言の傳導であつた。」

と叫び、數萬の會葬者を感激させた。

それで會社は、故人の親友であつたエックナー博士が社長となり、フリードリッヒスハーフェンの本工場の外にポツタム、シユタアケン、フランクフルト、アン、マインの三ヶ所の工場を管理し、餘力をあけて、飛行船の完成にとめたのである。

されば、一九一八年の夏に竣工したツエッペリン飛行船は、し七十號は、速力、百三十メートルとな

り、發動機は二千八十馬力の威容をそなへ、その搭載能力は、全浮揚力の七十パーセントに達し、四十トンをつみうる、容積五萬立方メートルの巨船を製作したのである。

そして伯の死後、あたかもこの巨人の志を繼ぐかの如く、數隻のツエッペリン船隊は屢々ロンドンを空襲して猛威を振つた。

それは全く新しい戦術で、日の暮れるころ五六千メートルの高空を保つて侵入し、發動機を停めて夜に入るのを待つてゐる。

やがて、夜になつて敵飛行機の活動が出来ないのを見すませ、突如舞ひ下つて強襲を浴びせるのだ。

この「無音の空襲」でロンドンの賑華街ピカデリーは一擧にして死の巷と化し、或は劇場を爆砕され大多數の死傷者を出させた。けれども大戦末期ごろ、

戦争の終熄は、ツエッペリン飛行船の終焉であつたらうか。

否、既にツエッペリン伯は逝いて再び見ゆるに由もないが、その偉大なる心を心とするエックナー博士以下は、ツエッペリン飛行船をして、航空界における使命を完遂せしめたことをここに附記しても決して無駄でなからう。

「わしの飛行船は、決してそんな悪魔的なものではない。今に平和が戻つてきたら必ず飛行船で交通をする時代が来る。

わしの飛行船はその役目を果すのぢや」と、晩年のツエッペリンはいつも、部下に言つてゐた。

その遺志をついで一九一九年（大正八年）には、早くも容積二萬立方メートルの小型飛行船ボーデン

ロンドン防空陣の強化と共に、空襲部隊の被る損害も多くなり、名船長ズトレッサー少佐以下、新造し

七〇號を始め盡く失ふ悲運にさへ會つた。大戦中ツエッペリンのロンドン空襲で與へた損害は、死者五

百五十七名、負傷者千五百五十八名、被害高百五十

二萬七千五百八十五磅であつた。しかし實際には精神的にロンドン市民——英國民に與へた影響は著し

いものであつたのだ。けれども、その次に來るものは？——

そこに待つてゐたのは何であらうか。悲しむべき祖國の屈服！一九一八年十一月十一日午前十一時の休戦喇叭は誇かなドイツ民族への挽歌であつた。

破産か立直しか

ゼー號を完成して、フリードリッヒス・ハーフェンから、ベルリンまで六百五キロの定期航空を開始し、次で姉妹船ノルトステルン號を製作にとりかかり、平和的交通に乗り出そうとした。

『大變で、何れも駄目ですぞッ』

氣遣はれてゐたヴェルサイユの講和會議が調印されてみると、思つた以上聯合國がドイツの兵力と經濟力を徹底的に叩きのめそうとかかつてきた。

米英は「人道主義」の名にかくれて、ドイツ航空力の一切を没收し、禁止したのである。

『ああ、老伯がこの有様を地下から見ても、どんなに嘆き悲しんでおられるだらうか』

『全くだ』エッケナー博士は、感慨深く愛兒にもひたひたの飛行船を引渡す書類に目を通してゐた。

賠償債務の一部として、ボーデンゼー號とノルド

ステルン號は、伊太利とフランスへ引渡してしまへば、もうフリードリッヒス・ハーフェンの大船庫は、がらんとした空である。

『ああ、いつの日、ここにまた飛行船を納めることが出来やう』

と、萬感もも至る淋しさと、痛憤とに、エッケナー博士以下の心中は、察するに餘りがあつた。

残る軍用船は、聯合軍に引渡される前に自爆してしまつた。全ドイツはそのころ、革命と、窮乏との混亂の眞只中であつた。

大戦中あの赫々たる功績をたてたツエッペリン飛行船を、國民の誰もが忘れやうとしてゐる。

もう、ツエッペリン會社は破産し、分散してしまふ外なかつた。あの巨人が、半生を捧げて、人間の達しうる最大の苦惱と戦つて、獲ち得た文明の光り

はここに消滅してしまふ外ないのであつた。

『已むを得ん、一切を放棄する外ないのだ』

エッケナー博士は、ありし日、爾汝の交りを結んだツエッペリンの靈に對して、申譯のない苦痛で、めつきりと白髪 増えたやうだ。

そこへちやうど、アメリカから、賠償金の代りに欲しくてならぬ大飛行船を作つて引渡せと注文してきた。

再びフリードリッヒス・ハーフェン工場には、久しぶりの鎚の音、ハンマーの響きが、活潑に聞こえてきた。

『だが残念ですか、折角作つたものを、そつくりアメリカに呉れてやるのは』

『いや、そうぢやない』エッケナーの胸中には、全く別な、もつと大きい考へが浮んでゐた。

『二十五年の経験と知識を以て、實現しうる唯一の機會なのだ。これを一つ作つたら、我々は必ず、未來の飛行船を完成しうるよ』

と、遂に一九二四年に至つて休戦後最初のLZ百二十六號を完成した。それは純粹の旅客輸送用であり、十月にはエッケナー博士自ら搭乗し、レトマン船長以下と共に、大西洋を六十六時間で押渡り、七千八百三十キロメートルを翔破して、十五日の朝、ニューヨーク市上に現はれるや、全米國民は、狂喜してこれを迎へた。

が、もつと喜んだのはエッケナーであつた。

『これで故人の遺志をついでゆけるぞ。今度はドイツの飛行船を作るんだ』と、技術に誤りなかつたことを證明し得た大飛行に、彼は始めて會心の笑をもらした。

ツエッペリンを救へ

「ああ、飛行船が飛んできたッ」

「ツエッペリンだ、久しぶりだなア」

LZ一二六號（後アメリカで、ロザンゼルス號と改稱）が、アメリカへ飛ぶべく、ベルリン市上に現れたとき、全市民は屋上と云はず、街路と云はず、一ぱいの人出だつた。

「残念だッあれをむざむざアメリカに引渡すのは」誰れの胸にもこの感想が湧いた。巨鯨を見送る目には暗涙が浮ぶ。ツエッペリン飛行船は、一ツエッペリン個人の遺産であらうか、一會社の存亡に關する事業であらうか。

いかに敗戦後に困窮してゐやうと、誇り高い民族は、この世紀の發明を見殺しにしてもいいのだらう

か。否、否、

「ツエッペリン飛行船は全ドイツのものだ。ドイツ民族のものだ」

「ツエッペリンを救へ」

「ドイツ人のための新飛行船を作れ」

大學生から、勤人から、兵士から、街頭から、新聞から、こうした叫びが、次第に高まつて行つた。

エッケナー博士は、また自ら民衆に呼びかけた。

もし今日のドイツ國民にして、ツエッペリン伯の遺業を廢絶させるならば、それこそドイツ民族の生存の意志と將來の確信に對する單なる無知と貧困を示すことになるであらう。

われわれは光榮ある民族であることを欲し且つ生き、そして將來を信するものである。

然り、私は確く信ずる。

もつと太い。

マイバッハ五百五十馬力を五臺据えつけ、面白いことは、燃料はプロパン・ガスを使ったことだ。

長距離を飛ぶとき、ガソリンだと減つてくるにつれて船體が軽くなつて、釣合ひがとれなくなる。そのため大切なガスを放出せねばならぬことになる。

そこで空氣と同じ比重のプロパン・ガスを使ふならば、減つた丈はタンクに空氣を入れておけば、全體の目方に増減がないので、長距離飛行に付きもつてこいである。

その上、グラフ・ツエッペリン號は、始めて作られた「浮べるホテル」とも云ふべき、空の大商船なのだ。

巨大なゴンドラには、船長室や、操縦室につづいて、中央の廊下を挟んで、二十人の旅客を收容する

私がドイツ國民に向つて呼びかけた結果、諸君は、ドイツの工業と精神を生かし、うることであらうことを！」

と呼びかけた。

誇るツエ伯號

エッケナーの叫びに、國民は立つた。

窮乏不安のどん底にあつて、尙ほ一片のパンを節し、一着の衣を廢して集つた「ヒンデンブルグ・エッケナー！寄附金」は四百萬マークをこへた。

再び工場は息吹きをとりもどし、一ヶ年最高の技術と、精神をこめて、LZ一二七號が完成した。

これぞ「ツエッペリン伯爵」號である。それは、全長二百三十五メートル、直徑三十メートル、十二萬五千立方メートルの巨船で、ロザンゼルス號より

十室がある。

ガラス張りの展望室は、大サロンで空中の佳餐をしたためる二十世紀の旅人に、脚下の風光を楽しませる。

豪華な調度、清楚な便利極まる設備、これが空を飛ぶのかと疑はれるほど美事なものであつた。

エッケナー博士は、

「我々は將來この大空中商船隊を作らねばならぬ。そのために、三年五年では養成できぬ。飛行船の船長を澤山作つておく必要がある。」

と力説し、レーマン、フレミンケ、フォン・シラーなどの船長を、いつも乗せて行つた。

後日日本へ来たとき、

「お國の諺で、「船頭多ければ船山へ上る」といひます。だからこの商船、いつも空を飛ぶです」と冗談

を云つてゐた。

さて、一九二八年（昭和三年）完成した。直ちに全國民の輿望を擔つて訪米への處女航空に上つた。この飛行は途中暴風雨に遭ひ難航を極めたが、盛んなるかな、百十一時間五分の快翔をつづけて、フリードリッヒスハーフェンと、ニューヨーク郊外レークハースとの間、九千六百キロを飛び切り旅客一同は大元氣で、世紀の旅を語るのであつた。

世界一周の成功

ツエッペリン伯號は、一九二九年（昭和四年）いよいよ、世界一周に上ることとなつた。

いままで、航空機の世界一周と云へば、一九二三年に、アメリカ陸軍の飛行機か、六ヶ月を費して辛じて飛んだばかりである。しかもそれは、一つの冒

険飛行であつた。

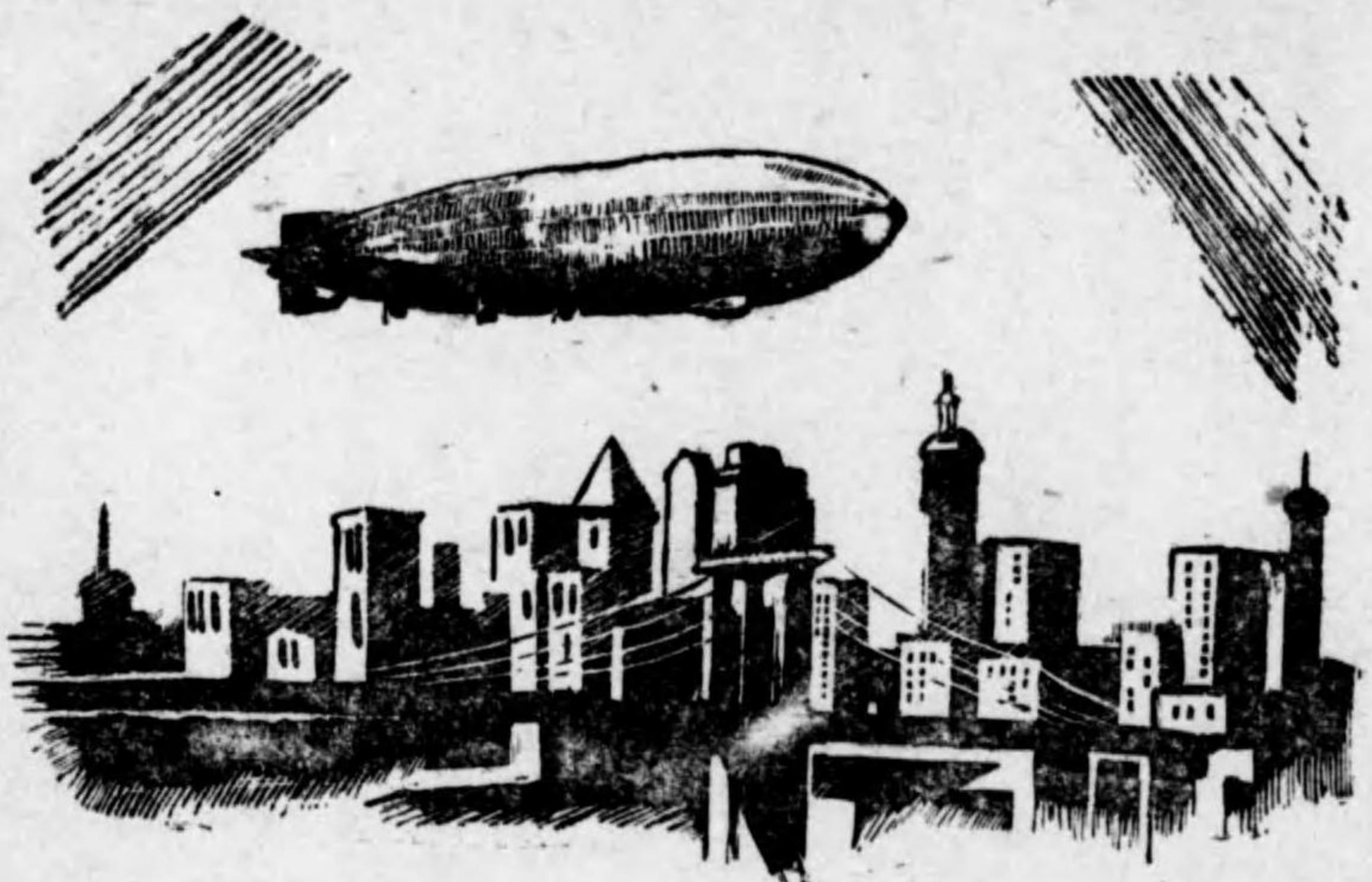
今度の飛行は、各國からの希望者を旅客にして、ほんとうの空中旅行を楽しみつつ、ゆつたりとした客室から、地上の大觀をほしひままにして飛んでゆくのだ。

わが國からも、朝日新聞社の北野、毎日新聞社の圓地兩記者をはじめ、太平洋横斷のときは海軍の草鹿少佐、藤吉少佐が乗組んで行つたのである。

そして、まだ何人も飛ばなかつたシベリアの奥地や、北太平洋を飛び、世界一周三萬五千キロメートルを三段飛びにして、たつた二十一日七時間三十分で飛び切つた。

世界早廻りの新レコードでもあつた。

出発点ときめた紐育のレークハーストから、八月七日に出發して、五十五時間二十六分にドイツへ



着き、そこから、一萬キロの無着陸飛行をつづけ
て十九日の夕刻霞ヶ浦へついた。

筑波の彼方に沈む夕陽を浴びつゝ、巨船をいま收
めやうとする霞ヶ浦飛行船庫こそ、あのドイツ敗戦
の日に、日本へ引渡した勝利品の格納庫なのだ。

ツエッペリン伯の思ひ出のじむ船庫なのだ。い
まは盟邦として、わが官民の湧くがごとき歓迎をう
けつつ、エッケナー博士は老ひたる双眸に熱涙を浮
べて、

『今日こそ、故伯爵の志をとぐる日である』

と感激して語つた。かくて太平洋上の嵐をつき口
ザンセルスに着陸して無事ニューヨークに歸つたので
ある。

世界一周後、ツエッペリン伯號は、南米への定期
航路に就航し赫々たる成績を収め、商業用として

航空船の持つ強味を十分に發揮した。

この成功に乗じて、ツエッペリン會社では、更に
巨大な、LZ一二九號「ヒンデンブルグ」號を製作
した。

ツエッペリン伯號は、一九三二年末に、數々の大
飛行を終つて、一冬を手入れのためにフリードリッ
ヒスハトフェンの格納庫に收めたが、ツエッペリン
會社では次のやうな面白い數字を發表して、飛行船
の商業的用途について、故伯の先見の明、誤らざり
しことを證明した。

竣工以來	一九三二年中
飛行回数	二九〇回
飛行距離	五三〇、六〇〇軒 一八〇七八〇軒
同時間	五、三六九時 一七六六時二十分
旅客輸送數	七四九五入 一一一八名

郵便物

二七四五宛

貨物

二〇二二宛

世界各地着陸回数一一一回、赤道横斷二六回。太
平、大西洋横斷三三回となつてゐる。ドイツと南米
バーナンブロン間を往航七一時五一分、歸航八六時間
の平均飛行時間を以て、僅か二回出發を延期した以
外は、一ヶ月三航空を翔破した。さて一方新造さ
れたヒンデンブルグ號は、世界一の巨船であり、全
長二百四十八メートル、全高四十四メートル七〇〇
最大直徑四十一メートルと云ふ巨大さで、ガス容積
は、ツエッペリン伯號の七割も多く、二十萬立方メ
ートルで、旅客七トン、貨物十二トンをのせ、全浮
揚力は二百四十トンに及んでゐた。

スピードは、一段と早く、千二百馬力のデイル
エンヂンLOF六型十六氣筒V型のものを四臺装置

し、旅客室はツエッペリン伯號の倍となつて二十五
ケ五十人乗りになつてゐた。

昭和十一年三月竣工して以來、南米へ、北米へと
定期航空に従事して、旅客の收入三百萬圓、郵便貨
物五百七十萬圓と云ふ莫大な收入をあげて、航空船
が定期航空に、いかに有利であるかを立證したので
ある。

不幸、その翌年春、北米への第一回飛行の際、滯
電のために爆破焼失してしまつて、これにつづくL
一三〇號「ツエッペリン伯第二號」も建造中ばに第
二次大戰の勃發に會ひ、遂にツエッペリン飛行船の
雄姿は再び大空に仰ぐ由もなくなつた。

最近における、飛行機の著しい進歩、特に積載力
が増加し、航續力が伸びたので、飛行船の唯一の強
味としたところを奪はれるに至り、軍用としての飛

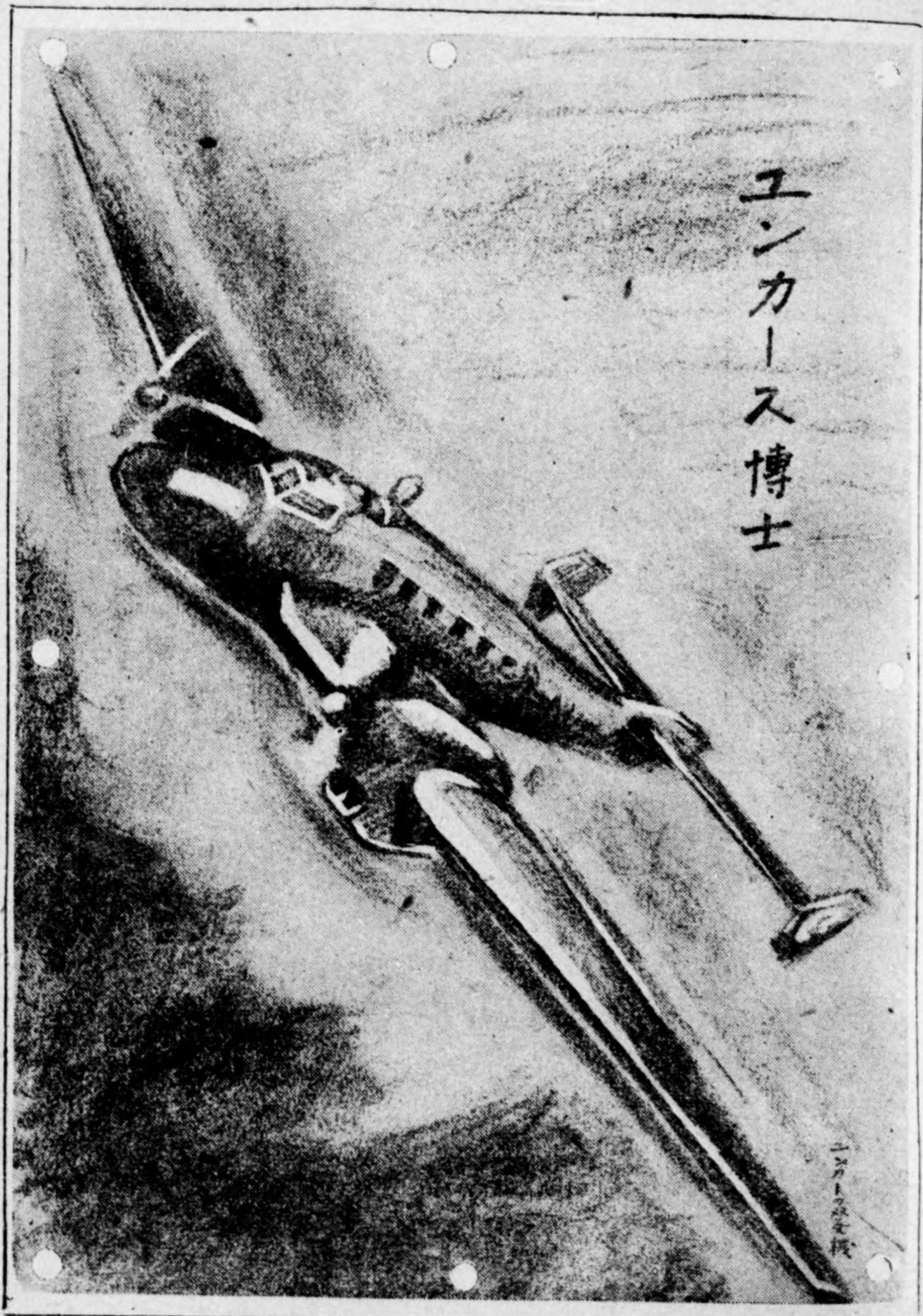
行船は、もはや速力の點からも、行動の遅い點からも無價値となり、飛行船は、過去の遺物となつてしまつた。

しかし『航空界の發達するまで、翼のある飛行機が十分役に立つまで、飛行船によつて國民は航空の重要性を示し、國防における航空機の威力を示すことは必要だ』と説いたツェッペリン伯の叡智は、なほ生きてゐる。

彼ほどの熱情と、不屈の精神と、たへざる努力がなかつたら、今日のドイツ空軍を育てあげる素地は築かれてゐなかつたに違ひない。彼の部下だつた技師からドルニエの如き、有名な飛行機の設計者も生れてゐなかつたらう。

ドイツ空軍を育て、築き上げた大きい根幹は、五十年前から、空を飛ぶことに全精神を打ちこんで生

涯を苦闘に捧げ盡してきたツェッペリン伯の功績に外ならないのである。



エンカース博士

第一篇 發明の天才

スツツカー

『西部戦線』——一九四〇年五月二十五日

豫見は、フランス人には陸の、イギリス人には海の、そしてドイツ人には——空の領域をそれぞれ與へたのである——ジャン・パウル、ベルギーとフランスの領空を飛んだ今日の午後ほど、ジャン・パウルの此の言葉に、辛辣きわまる皮肉を覺えたことはなかつた。

この詩人が、およそ百年以上も昔、ドイツの政治的受難時代に就いて云つた言葉は、いま完全な眞實として甦つて來たのである。わが空軍は二週間以

來鐵冶屋の槌のたゆまざる力を以つて西部戦線へ空襲をつづけてゐる。

……さあ、ダンキルクだ。今しも先頭の機隊が怒濤の如く海岸の此の都會へ殺倒した。われわれも後れじと飛ぶ。依然、出發當時のままの陣形だ。

港から急いで海上に滑り出した驅逐艇があつた。五隻、六隻、先を争つて遁げまどふ容子が、まるで金魚鉢の中へ突込んだ手に驚いて右往左往する金魚のやうである。先陣のスツツカー(急降下爆撃機)が、最初の爆弾をゴロリと落した。

この日最初の噴煙がさつと立ち騰る。直接海に沿つた船渠のあるあたりである。眞赤な噴水だ。つづいて二ヶ、埠頭を掠めて水に落ち、文字通り噴上げ一聯そこらを渦と泡に化した。

更に一弾、これは荷揚げの棧橋をうつて、砂塵と

焰の渦とを捲き上げる。一番に集中投下を蒙つてゐるのが直線を引いたやうに美しく突出してゐる北の防波堤だ。

だしぬけに、バリバリと云ふ音響と共に、シウレ・ヌ水門の重い開扉が裂けたと思ふと、潮が躍つて物凄い水圧で貯水池が奔流してきた。同時に、ラ・クアトル・エクルウズのポンプ装置がまるで蜃氣樓のやうにひらりと消え去つた。

つづいて十萬立方メートル以上のガソリンをみたしてあつた大油槽から、メラメラとまるで赤熱し槍の穂先のやうな炎が一條燃え上つた。

ダンキルクは暗雲のごとき噴煙のなかに全く掩はれ去つてゐた……。

ドイツ空軍の色スツッカ（急降下爆撃機）の恐るべき刃は、パウルの豫言の通り、空の主権者として

發動機會社」こそ、またこの猛鷲を生み育てる母として、ドイツ國防の中心なのである。

しかし、この大會社が今日あるまでには、幾多の起伏變遷があり、ユンカース自身もまた苦闘の生涯を、航空機の改良發達に捧げつくしたのである。

世界の航空機製造者には、天才的な閃めきをみせるメツサー・シエミットや、學究的な、クロード・ドルニエを始め、幾多の俊才も少くない。けれどもユンカースの如く、事業家として、技術家として、製作者として、研究家として、八面玲瓏、行くところとして可ならざるなき人物は決して多くない。

また彼の生涯は、常に一歩進んで改良と、甦新への偉大な夢想家であると共に、その夢の偉大な實行家であつた。

一八五九年（皇紀二五一九年）であつた。

その快速と精銳とを以て、イギリス本土へ選出しつつある楔の背後に、つねにむかれてゐるのだ』
——これは、ドイツが緒戦における花々しい白蘭戦線席捲の日の一飛行少尉の手記なのである。
この花形スツッカこそ、ドイツの誇るユンカース飛行機であり、その生みの親フリーゴ・ユンカースをいま語り出でやうとするのだ。

幼にしてこの才氣

今の戦ひの強鷲、ユンカースの強靱な翼がどれだけ、ドイツの勝利を導いたであらうか。

この猛鷲の生み親、フリーゴ・ユンカースこそ、ドイツ空軍の建設に對する、最大功勞者の一人でなく何であらう。
デュッスウ市に本社を有する「ユンカース飛行機、

流れも清いライン河に沿つて、ライットと呼ぶ小都市があつた。

小さな地方都市ながら、濛々とした煙突の煙は天に吐き出され、鐵道の驛には、いつも山ほど荷物が積まれ、街ゆく人々の顔にも活氣を呈してゐるのであつた。

ライットは、工業都市として、平和な、潑刺とした姿をみせて早春の陽光に輝いてゐた。

二月三日、フリーゴ・ユンカースは、この都市の一機業家の家庭に生れたのである。

『可愛い、坊ちゃんだ。丈夫そうですな』

『ハイ、おかげさまで、悪戯つ兒で困りますのよ』
母親は、嬉しそうに、この偉大なる巨人の幼い日を、慈愛にみちた目で眺め、平和な家庭が、フリーゴの健全な發育を恵んで行つた。

『また、毀したの、坊や』

『うん、だつて、この汽車どうして動くんか判らないだもの』

買つて貰つたばかりの機關車をバラバラにしてしまつて、伸びたゼンマイを投げ出して、坊やは今にも泣き出しそうだ。

『仕方がないのね。悪戯ばかりして——』

フリーゴー坊やは何より機械いぢりが好きだつた。

危い、危いと父親が止めても、裏の工場へ入つてボタン、ボタンと織布を動かしてゐる紡織機の構造をじつと眺めてゐた。

『お父様、この機械は、どうして動くの』

『それはね、お前がもつと大きくなつて、學問をしたら、だんだん判つてくるよ』

『そうぢや、僕大きくなつた勉強するよ』

フリーゴーはこうして、だんだん機械いぢりが長じて行つた。

人が訪れてきて、ドアをあけると、玄關のベルが鳴つて、電燈がつくやうにしたり、お庭の噴水を、ぐるぐる廻して、どこへでも水が飛ぶやうな工夫をしたり、一日お部屋に、とちこもつてゐると思つたら立派なヨットを造つてきて、

『お母様、これ、お庭の池へ浮すと勝手に動くよ、見てごらん』

と、夕餐の仕度にいそがしい母親を、無理やりに庭へ引き出したりして喜んだ。

『僕は、機械の方で身を立てたいと思ひますよ、お父様』

國民學校を出ると、彼は、もう一人前の青年として、自分の行くべき道を、しつかり心にきめてゐた

よ』

『あッ、そうでしたね、ドイツは、これから國民が心を合せて、ヨーロッパの、どの國よりも強い立派な國家にならなくちやならないんです。よく判りました』

そこで、バルメン市にある高等工藝學校へ行つてからも、たへずお國のために役立つ學問を、しつかり身につけやうと、そのみが、フリーゴーの念願にあつた。

『要するにこれからは、科學の世の中だよ、恐らく産業も、生活の方式も、すつかり變るだらう、科學の進歩によつて——』

『僕もそう思ふ、交通だの、戦争だのが機械の發達によつて、うんと違つた形をとることも考へられるね』

のだ

『うん、お父さんはお前のために、やれるだけ高い學校へ上らせてあげやう。その代り、しつかり勉強しなくちやならんぞ』

『ハイ、勉強いたします』

『その勉強もだ、お前一人が賢くなつて、立身しやうの出世しやうのと云ふ小さな考へぢやいかん』

『成功するために學問するんぢやないですか、お父様』

フリーゴーは、不審そうに、父の言葉に、問ひかへした。

『もちろん、それもある。しかし、自分一人が出世しても、何もならない。お前の勉強したところによつて、世の中の人々に便利を興へ、この世の中を良くし、お國に役に立つ學問をせなくちやならんのだ

「そうだ、僕等は、そのために努力しやうぢやないか」

「然り、大ドイツの將來のためにね」

學生々活は楽しかつた。

仲のよい、しかも若くて元気で、希望に燃えてゐる青年たちと共に、難しい理論や、複雑な技術がだんだん判つてくる。

もつと高度の學問をしたい。——彼の希望は、幸にして故郷で相當機業主として、産をなしてゐた父によつて聞きとどけられた。

ベルリンへ、そこには新興ドイツの首府として、新知識と文化との花が咲いてゐた。カールスルーエ市へ、そこでは新しく勃興しつ々ある機械工作の實地指導がゐた。

更にアーヘンへ、ここは工業技術のメッカである。

アーヘン工科大学の門をくゞらなくては、近代工業を語る資格が無いと云はれる最高學府だつた、最高權威者が集つてゐた。

「愉快だなア」

「こんなうれしいことはないよ。我々こそ、ドイツの將來を荷負ふべき使命を持つてるんだぞ」

五月、緑の木かげに、若い大學生は、ビールのをあけて、青春と、新知識と、そして大ドイツ帝國の將來を祝福した。

フリーゴ・ユンカースは、健康に恵まれ、知識慾に燃え、希望と期待に胸ふくらませるのであつた。

「いよいよ卒業だ。」

僕は、技術試験をうけてやるよ、資格をとらなくちやならんからね」

「君なら大丈夫だよ、ユンカース君、きつと合格す

るぜ」

同窓の友も口々に彼の才能をほめてゐる。

ガス機關の改良へ

「これで、技術士の資格は取れたと……」

アーヘン市で行はれた地方廳の試験には、果して友人が保證したやうに、拔群の成績で合格した。

このときユンカースは二十四歳であつた。

「さてこれから、何をしやうか……」

と、當時勃興しつ々あつた多方面の機械工業を調べてみた。何が最も將來有望であらうか、いまいかなる工業を進歩させることが、ドイツの工業界を發展させ、また生産を促進するであらうか。

一まで故郷に歸つて、父と相談してみた。

「わしは、別に紡績業を、お前に繼いで貰はなくて

もいい、お前は、お前の才能を伸ばしてゆくがいいだらう」

と、父は、十分に彼の獨立力と、實行力をみとめてゐたのである。

「しかしお前は、どう云ふ方面に目をつけてゐるのかね……」

「まだ、はつきりとは申せません。」

しかし、いま最も新しい動力機關として、ガスエンジンが出來つ々あります。どうも私には、あれこそ、今迄の蒸氣機關にとつて代るべき動力ではないかと思ふのです」

と、ベルリンや、アーヘンで實際見てきた印象をのべた。

十九世紀の末まで、蒸氣機關は、動力界の王座をしめてゐた。それは曾つて人の力や、馬の力を唯一

の動力としてゐた人間に、大きい革命を興へた發明だつたと云へる。

蒸氣機關は、陸運、海運、工業のあらゆる方面に用ひられ、改良に改良が加へられて、ほとんど完全に近づいてゐた。

だが、何としても重い。

十九世紀末から、人々は、空を飛びたいと希ひ、馬車に代る乗物を欲してゐた。しかし蒸氣機關は、これらの輕便な運動機關としては、發生する馬力に比べて、重すぎる機關の外で、水をわかし蒸氣を作らねばモーターは廻らない。

もつと何か代るべき方法、即ち機關の、シリンダーの内へ、ガスをつめて、これを爆發させれば、ピストンが動いて廻轉することが出来る。

機關の内、燃料を燃やす動力——内燃機關であ

る。この新らしい動力機關の改良、發明に一心になつてゐたのは、オットー博士がゐた。ダイムラー技師があつた。

四衝程のガス機關を製作しつゝあつたオットーはすでに、熱力学の立場から、オットサイクルの理論を發表してゐた。

一方を閉ぢた氣筒の内で、ガスをつめこみ、壓縮し、これを爆發させ、動力を得る。

そして、燃え残りのガスを排出する。この吸入、壓縮、爆發、排出の四つの行程をくりかへせば、一つの動力を連続的に得ると云ふのである。

この理論を、實行に移したのは、ダイムラーであつた。

『ダイムラーの發動機は成る程、劃期的なものだと思ひますよ。だがまだまだ改良の餘地があるやうに

思ひます』

と、フリーゴは、自分の所信を父に述べるのだつた。

『よからう。お前が、しつかりした自信を以て、やつてみやうと云ふなら、その目的へ進んで見い。俺は、出来る丈けの事はしてやらう』

そこで、フリーゴ・ユンカースは、學生時代に氣の合つた友達と一緒に、多少の資本金を集めてガス機關の改良事業を始めることに決心した。

『もつと便利で、燃料にしても、機關にしても、經濟的なものでなくちやならん。』

實際に工業に役立つ、生産に使はれなくちや、いかな高尙な理論も、立派な發明も、死んでしまふこれがユンカースの持論であり、自ら實行しやうとする所でもあつた。

行くところ皆可

フリーゴ・ユンカースが第一に着手したのはガス發動機の實驗所であつた。

『うんと立派なガス・モーターを作つて、大量生産をしてやるぞ。』

今に漁船から町工場まで、ガス・モーターをブンブン廻してみせる』

と、大きい抱負と自信をもつて、まづデッソウ市にユンカース、ガス發動機實驗所を設立して、懸命に仕事に没頭しはじめた。

時に一八八九年（明治二十一年）で彼が三十歳になつたばかりである。

『ユンカースつて技師は若い、仲々見どころのある男だ』

デッソウ市は、工業都市だけに、彼の名はそう、そう／＼たる大工業家仲間、早くも評判になつた。

『あの男の考案したガス發動機は、今迄のものと同つて、製造方法が、合理的だ』

『今に、あのガス・モーターは競争相手が無くなるぞ。ああ安く作り出されちゃ、他のものがやりきれない』

と、製造業者は、ユニカースの敏腕に尻ツ尾をまいた。ところが、ユニカースは、吸入装置や、着火装置を改良して、今迄に見られぬ軽量で、しかも堅牢なモーターを製作してゐたのであるが、ただの製造業者とは違つて飽くまでも學究的な彼は、
『最少の燃料で、最大の出力を出さねば、ガスモーターは經濟的に使用できない』
と考へた。

そこで、燃焼熱を正確に測るために、日夜装置に工夫をこらした。

『しめたッ。これは役に立つぞ』
出来上つた熱量計は、すばらしく精巧なものであつた。

すぐその設計を、特許局に願出してみると、今までにない設計である、と認められて、特許を得たのである。

そこでこの熱量計を生産して賣り出してゐたが、
『この熱量計を利用すると色々なものが出来るぞ』
訝えたユニカースの頃の中では、次から次へと新しい工夫と考案が生れてきた。

第一に、新式のガス風呂だつた。第二は、ストーブだつた。

『これは新式だ。仲々スマートぢやないか』

文化生活が漸く廣まつてきた時代のことゝて、ユニカースのガス風呂とストーブは、至るところで好評を博した。

事務所でも、家庭でも、別荘でも、ユニカース式ガス風呂を備へ、ユニカース式ストーブを抱くことを、新生活のシンボルのやうに思つた。

ドイツだけではなく、
フランスにも、イギリスにも輸出されて行つた。
わが國へも、ユニケル・ストーブとして、多量に輸入されて、關東震災前の文化生活につきものゝ感があつた。

それだけではない。理髪用のバリカンの、鋸着作業のドリルも製作した。
そしてこれらの機械製作によつて、ユニカース會社は、ぐん／＼發展して行つた。

今では、少壯實業家として、ユニカースの名は高まつて行つた。彼は三十六歳の若さであるが、企業にも、發明にも、非凡の才を現はしてゐた。

このころ、ユニカースには、飛行機の發明などはまだ全く念頭になかつた。時折り新聞に、飛行機發明の記事が、大きく出てゐるが、

『僕も、いつかこんな仕事をしてみたいと思はぬでもないが、今は急しい』
と殆ど顧みなかつた。

けれども、ガス機關や、熱量計の工夫は、後に英佛軍を悩ましたユニカース・ユモ發動機を完成する素地となつたには違ひないのである。

『ユニカースの熱機關は、在來に見られない改良が施されてゐる』と云ふ噂を知つた、彼の母校アーヘン工科大学にては、早速、ユニカースの製作したガ

ス・モーターを取りよせて、一流の學者たちが研究した。

『この氣化装置と、着火法とは、從來のガス機關を一變せしめるものだ』

『熱量の利用については、この方式は最も經濟的なものであらう』

と、教授會では、何れもユンカース・モーターの成績を認めた。

そして、ドイツ工科大学中、最高學府であるアーヘン大學の名譽教授（プロフェッソル）の稱號を授與したのである。

『誠に身に餘る光榮です。振つて、ますます研究をつゞけたいと思ひます。』

ユンカースは、授けられた教授のガウンを身につけ、授與式に答辭を述べるのであつた。

しかもアーヘン工科大学では、更にユンカースを機械工科の研究室の主任教授に任命したのである。ユンカース教授と世間で云はれてゐるのはこのためである。飛行機の發明に無關係なガスモーターの改良で彼は早くプロフェッソルの位をとつてゐたのである。

學者としてのユンカース教授は、講座に於ても、研究室でも、熱心に、勞作をつゞけた。

幾多の研究によつて、貴重な論文も書いたし、その資料も發表した。

『少壯學徒ユンカース』の名は、教授の地位を保つ十分な名聲を得てゐたのであるが、彼はいつも主張したのは、

『いかに高尚な學問をしても、それが、社會民衆のためにならず、また國家に貢獻せねば何の價値もな

『よ』

と、そのころ、學者と云へば、所謂象牙の塔に立つてもつて、ともすれば、紙魚先生のやうに、世界を白眼視してゐる連中に一矢を酬ひた。

『ユンカースは學者ぢやない。ありや事業家だよ』などと、中には彼の名聲を嫉んで、非難するものもあつた。

けれども、ユンカースは、
『學問も國家のためのものだよ』
と一言で笑殺した。

そして一面實社會における活動もやめなかつた。デュッソウ市のユンカース・ガスモーター研究所では、更にガスモーターの改良、出力の向上につとめてゐた。そのみでない、新にアーヘン市に、ユンカース・オイル研究所を設けて、燃料油や潤滑油の

研究を始めた。

かくして、事業は次第に進んで行つた。ユンカースのために、折資を申出るものも多くなり、研究所の製品も次第に販路が伸びて、各國へ賣りつける製作權の収入だけでも、相當な額に上つて行つた。

ユンカースは、ますます張り切つて事業に没頭して、ガス・モーターの外に、通風装置や冷却装置の新式のものも作られて行つた。

『これだけ事業が廣くなつたら、もう研究所だけでは、十分にゆかないね』

『そうですね。ユンカース會社を設立して、事業を引うけた方がいゝですよ』

『そう云ふ組織にした方がいゝ』
と、協力者の間で相談がまとまり、ユンカース會社が新に設立されたのである。

ドイツ・デッツウ・ユンカース會社——この名はひろく、世界的のものとなり、實生活とユンカースの特許品とは密接に結びあつて行つた。

飛行機に着目

お隣のフランスでは、ルイ・ブレリオが自ら單葉飛行を製作して、デリー・メール新聞社の懸賞に應じて、美事英佛海峡を横断に成功した。

ときに一九〇九年七月二十日だつた。ドイツでもグラーデーなどが、しきりに飛行機の研究に努力してゐた。ユンカースは、飛行機について、今まで餘り興味を抱いてゐなかつたが、

『飛行機の將來が、どのやうに發達するか知れないが、今のやうな形でいゝのだらうか』
と、ふと疑問を抱くやうになつた。

そのころ、まだ幼稚な初期時代の飛行機は、大抵複葉式であつた。細い木製の翼骨に布を張つた弱々しい翼であつたから、どうしても複葉に組んで針金を蜘蛛の巣のやうに張り廻はさねば、翼の強さを保てなかつた。

『何と弱々しい、原始的な形をしてゐるんだらう。どうも面白くない。第一、翼が二重になつてゐるやうな生物で飛ぶものはないぢやないか』

ユンカースが、當時飛行機に興味を持てなかつたのは、その形態だつた。

あんな不ざまな、その場限りの間に合せのやうな構造は、どうも近代科學の粹と考へられないのだ。

初めは、だから飛行機に對して冷淡だつた。

『あの弱々しい單葉だつて、尙更らのことだ。まるで、バラツルのやうに一ぱい針金で張りわたして、

薄い、へなくの翼で、これが飛行機として發達してゆくだらうか』

と、頑丈な、がつしりした機械を眺めつけてゐる彼には、その時代の飛行機は危なくて見ておれなかつた。

けれども、飛行界では彼の不安と反對に、この弱弱しい構造のまゝで、だんくと成長してゆく。記録も改められ、飛行機が、空中征服の利器として、將來きつと伸びてゆくであらうことは、もう決定的となつた。

『うむ飛行機は成程、馬鹿にしたものぢやない。では、一つ改造してやらうか』
と、彼は決心するに至つた。

時に一九一〇年（明治四十三年）の事であり、フーゴー・ユンカースは、もう五十歳に達してゐたの

である。しかし、尙ほ青年の元氣の消えうせぬ彼は激測として、新しい事業に、突進してゆくのであつた。

彼の考案

『成るほど理窟としては、そうなるかもしれない。しかしだね。飛行機は、軽く作ることが何より生命だからね』

ユンカースの説くところに眞向から反對したのは飛行機の製作者たちであつた。

そのころの馬力の餘り強くない飛行機ではやはり複葉の方が都合がよいのである。

しかし、ユンカースは、自説を主張した。

『支柱や張線を、翼の中に納めて、厚い翼にすれば抵抗はうんと減る。抵抗が減れば速力を増すことが

出来るではないか。

現在の飛行機は、空気抵抗のために無駄な馬力をうんと消耗してゐるのだ。こんな馬鹿げたことはなし』

と論じた。

大體、空気の抵抗は、速力の二乗に比例するものである。だから、かりに一本の支柱にしても、百キロのスピードのときに五十キロの空気抵抗をうけてゐたならば、スピードが二倍になれば、抵抗は十キロではなくて、二十五キロと云ふ夥しい數となる。だから高速力のものほど、抵抗を少くすることが必要なのだ。

そして、この抵抗が増加すれば、これに打勝つための馬力は、三乗に比例して消費されるのである。

『將來の飛行機はもつと經濟的でなくちやならん、

何百馬力もつけて、たつた二人や三人しか乗れぬや

うな事ではいけない。それにはどうしても抵抗の少い、そして浮揚力の大きい翼を選ばねばならぬ。』

ユンカースはこの持論を自ら實行しやうとした。

『ユンカースは、立派な工業家だらうが、飛行機には素人ぢやないか。そんな支柱も張線もない翼を作るなんか、無鐵砲極ることだ』

と航空界では、ユンカースの理論を受入れやうとせなかつた。

そこで、ユンカースは、アーヘン工科大学の風洞を借りうけて、翼断面の研究を始めた。

それのみでなく、デッソウ市にある元のガス機關研究所を改造して、航空研究所としてこゝで航空機の研究に没頭した。

『どうも、昨今のヨーロッパの情況をみると形勢が

よくない。今に必ず祖國は戦争をせねばならなくなるだらう。そのときこそ必ず、飛行機が軍用として使はれるに違ひない。そのときこそわれわれは、もつとも秀れた飛行機を祖國に提呈すべきが義務ぢやないか』

と部下に督勵した。

新しい構造へ、いな、新しい創造への發足はすべて苦惱の道である。

内にあつては、まだ誰も手につけてゐない翼の空氣力學的な研究に對する眞摯な努力が必要である。

外に對しては、ユンカースの所信を反對する學者や飛行機製造家への論争がある。

ユンカースは、しかし、屈するところもなく内外共に孤軍奮闘したのである。

けれども、そのころドイツの航空科學者は、ルン

プラーと云ひ、ファルツと云ひ、出来る丈け薄い翼

を使ふことによつて抵抗を少くし、複葉に作ることに

によりて、軽く製作できると主張してゐた。

しかも、當時の航空機は、この方式によつて相當

成績を収めてゐたのであるから、ユンカースの述べ

るやうな、厚つぽたい單葉などには誰一人、耳を傾

けやうとするものも居なかつた。

『あんな、厚い翼は、むしろ抵抗が増えるばかりぢ

やないか』

『第一、あの翼を金屬で作るなんて重いことをして飛べるものかね』

『大方ユンカースは、ガス風呂に羽根をつけるつもりだらう』

しかしユンカースの考へは、果して素人だましの突飛なものであつたらうか。

否、決して彼の考へは、根據のな文人畫ではなかつた。それが證據に、一九一〇年二月一日附で「特許飛行翼」として、ドイツ特許局のむづかしい難關を合格して認定されてゐるのである。

それは、ユンカースの主張であつた「翼の生ずる浮揚力にとつて、少しの助けにもならぬ一切の構造物を悉く翼内に收めてしまつた、全翼式飛行機」なのであつた。

このやうな飛行機は、もちろん今日でも出来てゐない。けれども、現在の飛行機の形は、次第にこれに近づきつゝあるのだ。

ユンカースの先見の明は決して、思ひつきでなかつた。必ず可能とされる性質のものであつた。

支柱も針金もない翼、すなはち、カンチレバー翼（片持ちの翼）は、いまにては一般化してゐるではないか。

拓くは己れの道

『私の理論は正しいと思ふ』

アーヘン工科大学内に設けた實驗室で、風洞實驗によつて、機體の形や翼面について、どこまでもユンカースは、自己の所信に向つて細密な研究をつけたのである。

研究してみればみるほど、彼の自信は動かすべからざるものとなつてきた。

『もう大丈夫だ。實際に飛行機として作りにかゝつてみやう』

と決心して、彼のデッソウ市における元のガス機

關研究所の一部で、試作機に着手することにした。

ときに、一九一四年（大正三年）の春であつた。

それは全く新しい設計である。

翼は、見るからに強靱な一枚作りの厚いものが、ピンと張り出してゐる計りであつて、支柱もなければ、針金も張つてゐない。こんな片持ち式の翼は今まで、どこの飛行機にも使はれたことはなかつたのである。

果して、こんな大膽な設計のものが、空を飛ぶであらうか。

『なるほど、物理的には、片持ち梁（カンチレバー）と云ふ理論はあるが、それが飛行機のやうな、動的な荷重をうけるものを利用できると思へない』

『かゝる形式の翼が、空氣中に於て生ずべき振動とか、振れなどについて、いかに安全性を興へるかは

大きい問題だと思ふね』

アーヘン工科大学の物理學者も、ユンカースの所説を、理論として認めても、いざ實行に移すとなると、少からず疑惑を抱くのであつた。

『それは、要するに材料の問題だと思ふ』ユンカースは答へた。『私は、在來の飛行機製作者の如く、たゞ軽からんことのみを望まないのです。むしろ強度に主眼を置きたい。その點に於て、私はこの飛行機を金屬で製作しやうと考へてゐる』

『なに、金屬だつて！』

『そう、私は敢て斷言するが、金屬は木よりも軽いとね。何故なら、こゝにある寸法を元にして考ふれば、成る程木は軽いだらう。しかし、飛行機の要求するのは強さだ。必要な強さを、安心して計算できるのは、金屬である。木の如く産地や、湿度、氣温

で強さに差があるわけでもなし、精密に必要な強さを
知りうるから、それだけの材料を使へば反つて軽
くなるかと考へてゐる』

と堂々たる主張を述べたのである。しかし、當時
の航空學者や、飛行機製造家は、ユンカースの説に
盡く反對した。

厚い翼、片持ち翼、全金屬製——あまりにも、當
時一般の飛行機のもつ概念から、懸けはなれたもの
であつた。

『諸君が何と云はうと僕はやるよ、しかし、全然白
紙の立場で進めてゆくつもりだ』
と云つた。

今迄の實驗や研究に頼つては、どうしても先入觀
念に支配されて、眞の新しい改良は出来ないこと
を彼は恐れてゐたのだ。

第二篇 飛行機王ユン

カース

第一章 大戦中のユンカ

ース

J 1 號 成る

將來の飛行機は金屬化する。

ユンカースは、この信念を改めなかつた。祖國が
運命を賭して大戦争をやつてゐるにつけ、また聯合
國の空軍が優勢なのを見るにつけて、彼は一日も早
く、理想の飛行機を完成したかつた。

彼は助手とデッソウの研究所に立てこもつて新飛
行機の構造を實驗しはじめた。

『ねえ、ツインデル君、これは成功らしいぞ』

ユンカースは、最も信頼する助手エルンスト・ツ
インデルと翼桁の荷重試験を重ねておつたが、〇・
一ミリの紙のやうな薄鋼板を材料としていよいよ實
物の製作に着手した。

その上、この新飛行機は、今迄の飛行機とは全く
違つて針金もなければ、支柱もなく、ピンと張り切
つた一枚の單葉で、各部分を電氣銲接で結合してあ
つた。

『ユンカースのお化飛行機が飛ぶそうだが』

『馬鹿な、あんな重いものが飛ぶかい』

と、人々は誰れもこの鋼鐵製飛行機が飛ぶなどと
考へてゐなかつた。學者仲間でも、わざわざ工場へ

見に来た人は、

『こんな厚い翼は、空気の抵抗になつて速力が出ないだらう』

と噂をした。

ところがJ1型の出出上つたが大正四年十二月、伯林郊外デ・ベリッツ陸軍飛行場へ搬ばれた。

『大丈夫と思ふが、しつかり頼むぞ』

ユンカースは、操縦席に近づいて、コリンクロツド少尉につける。もし今日の飛行が失敗に終つたらユンカースの畢生の事業は、こゝで出鼻を挫かれてしまふのだ。

しかも立合の陸軍関係の飛行家や技師たちは、この重々しい鋼鐵製の飛行機は、走り廻るだけで飛び上らないものと、きめてかゝつてゐる。

『御心配ありません。美事にやつてみませう』

十九日の朝、肌寒い風をつんざいて、メルセデス百廿七馬力のエンジンは轟々とうなりを上げた。

『放せッ』

ユンカースは、飛行場の一角に立つて、じつと腕を組んで化石のやうに、突立つてゐる。

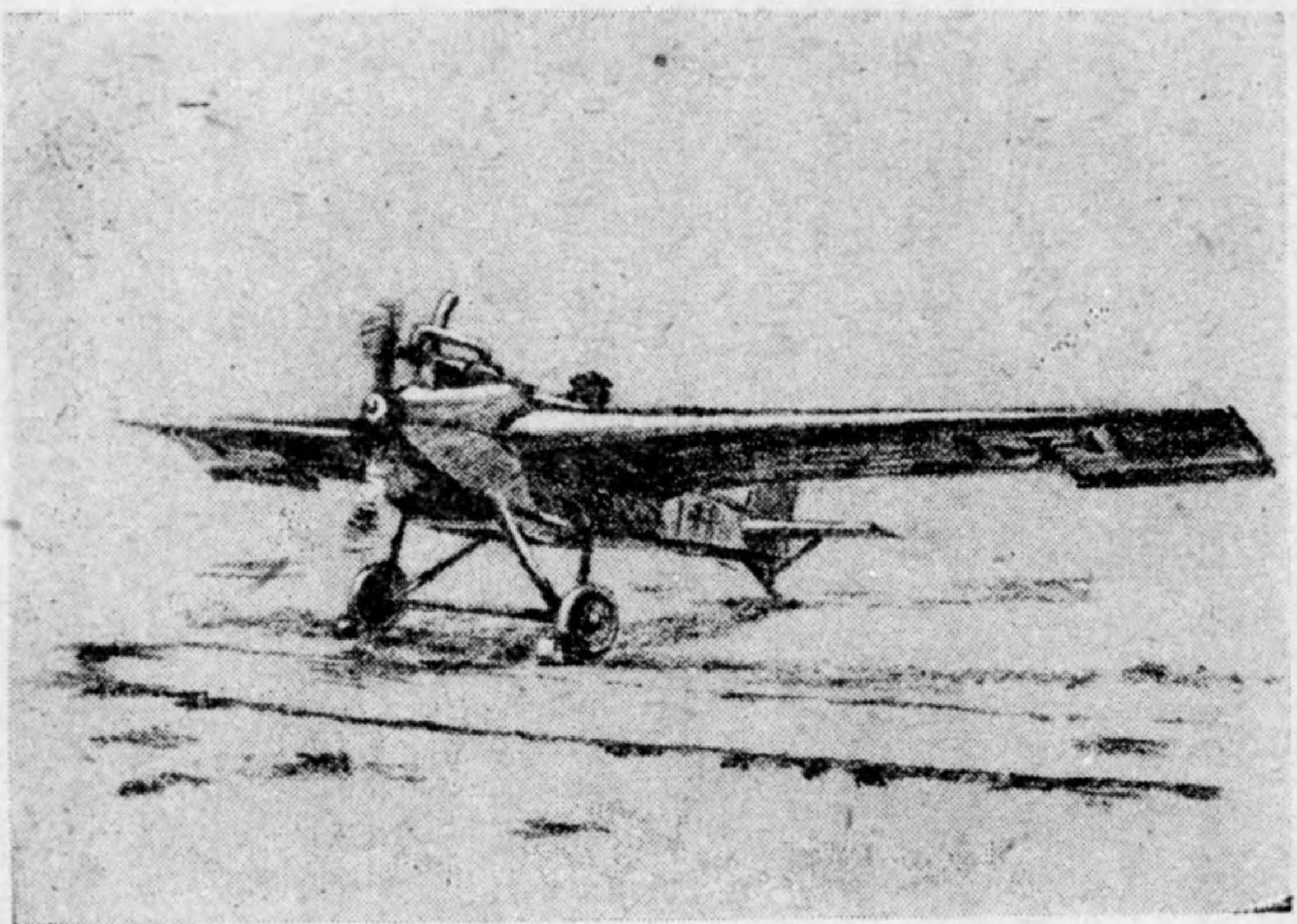
見よ、飛行機は砂塵をまいて四十米ばかり滑走したと思ふと、ふわりと離陸した。

『飛んだ、飛んだ。』

ユンカースは、小供のやうに熱狂して喜んだ。重いと冷笑された金屬製の單葉は、百七十二杆のスピードで自由に飛び廻つて悠々着陸した。

『有難う、有難う、大成功だつた』ユンカースは、コリンクロツド少尉の手を握つて感激の涙をハラハラとこぼした。

『皆さん、このJ1型は、鋼鐵製だから重いと云は



れましたが、現在軍用の代表的複葉機が平均千二百廿五匹の自重であります。本機はそれより少く千十匹にすぎません。そのみでなく、スピードは二十杆も早く馬力は五十馬力少くすむのであります』

とユンカースは、口を極めて軍當局に説いた。

しかし、新らしいものは、秀れてゐても、なかなか親しまれぬものである。そこに開拓者の苦しみであらう。優秀な性能と判つてゐても、あまり新らしいすぎる構造のために、評判は芳しくなかつた。

『いくら良くても、あんな甲蟲みたいな飛行機は好かんね』

『全くだ、餘程命の惜しくないものでなきや乗れないね』

パイロット仲間でも歓迎しなかつた。けれども、

ユニカースの決心は固かつた。

『この型式を進めてゆかう、必ず芽が出る時が来るに違ひなく』

そこで第一に目をつけたのは、材料である。鋼鐵は非常に強い。

だから、飛行機の必要な強さにしやうとすれば、紙のやうに薄くなつて、工作上不便なのだ。もつと厚くて工作上に便利で、その上軽い材料はないだろうか。

丁度このころ、アルミニウム合金の研究が次第に發達しつゝあつた。デュラルミンと稱されてゐる輕合金がある。輕さは鋼鐵の五分の一にすぎない。それでゐて軟鋼と同じ強さがある。

『これだ、輕合金で飛行機を作らう。もつとよい飛行機が出来る』

の複葉機の如く木製布張りではなく、第一號と同じ全鋼鐵製であつた。そして大正五年のドイツ軍總攻撃に間に合ふやう六臺が五月中に完成して全部陸軍に納入された。

面白いことには、複葉でありながら、上下の翼を連絡する支柱も張線もなく、たゞ二枚の單葉翼を胴體の上下に張り出した異様な形であつた。翼も從來のものやうに骨組になる梁一本もなかつた。

翼に働く壓力や張力や撓みの力は、すべに翼を張つてゐる〇・一ミリの鋼板が受持つた。云はゞ張子のやうなものであつた。

數枚の鋼板を小骨によつて、銲接して作られてあつた。

『ドイツには装甲した飛行機がある！』
誤つて佛軍陣地に不時着して鹵獲されたその一臺

ユニカースは直ちに、新らしい設計にとりかゝつた。最初に飛んだ鋼鐵製の飛行機は、記念のためにドイツの工場内に納ひこんでおいたが、後にドイツが復興するやうになつた、ミュンヘンの全ドイツ博物館に今でも保存され、訪ふ人々に驚異の目を瞪らしてゐる。

軍用機創造

そこへ新らしい注文があつた。

『ユニカース飛行機工場は至急對地攻撃用飛行機を建造せよ』との陸軍省からの注文であつた。

彼はこの機會に自分の主張する新機を提供したかつたが、軍の注文もあつて、それは複葉に作られたのである。

しかし、他のアロバトロス會社やランブラー會社

は、世界の驚異となつた。J四型對地攻撃用複葉はかくして、航空技術の勝利となつたが、ユニカース博士には、胸中描く輕合金飛行機の製造があつた。

そのころドイツは、世界の大国を相手として、四面重圍の中で、しかも寸土も敵に奪はれることなく進撃をつゞけてゐた。

『もつと飛行機を、もつといふ飛行機を！』

前線から要求してくる。

ユニカース工場は目の廻るやうな忙しさだつた。ドイツの工場は次第に擴張され、職工の數も千名をこへて行つた。ワルネムンデにも分工場が設けられたし、當時ドイツのために優秀な戦闘機を製造しつゝあつた和蘭人フォッカー氏とも屢々會見して、工場の共同使用などについて、ひたすら軍部へ多數の飛行機を提供することに努力した。

このやうな忙しい間に、ユニカースは、デュラルミンの研究を怠らなかつた。アルミニウムを原料とするこの新しい合金は、ツェッペリン工場で飛行船の骨格に用ひられてゐたけれども、まだ飛行機用として誰も使つてゐない。

飛行機用として、翼や、胴體などに加はる力、圧力や張力、曲げの力、扭れの力などについて、デュラルミンを、どのやうな形に使へば最も利用であるかは、判つてゐなかつた。

『木製飛行機の構造を、そのまま金属に置きかへるのは知恵のない話だ。軽合金製飛行機には、そのものの獨特の設計がある筈だよ』

『先生、デュラルミンの鹽分に侵され易いことも工夫しなければなりませんね』

『うん、その通りだ。嚴密な材料試験をしつかりや

らう。しかし國家は一日も早く我々の仕事の完成するのを待つてゐるのだ、ぐづぐづしてゐられない』
『いゝですとも、先生、お國のためです。寝なくても食はなくても頑張りませう』
ワインデル助手とユニカースとは、研究室に立つてもつた。

デュラルミン採用

デュラルミン！ デュラルミン！ これこそ近代航空科學の寵兒である。軽いアルミニウム特性を利用して、これに銅、マンガ、珪素などを少量混ぜて合金にすると、一平方耗について四十三疋の力で引張ることに堪へうる強い金属になる。

最近では、もつと強い超デュラルミン、超超デュラルミンが出来てゐるが、ユニカースは、率先して

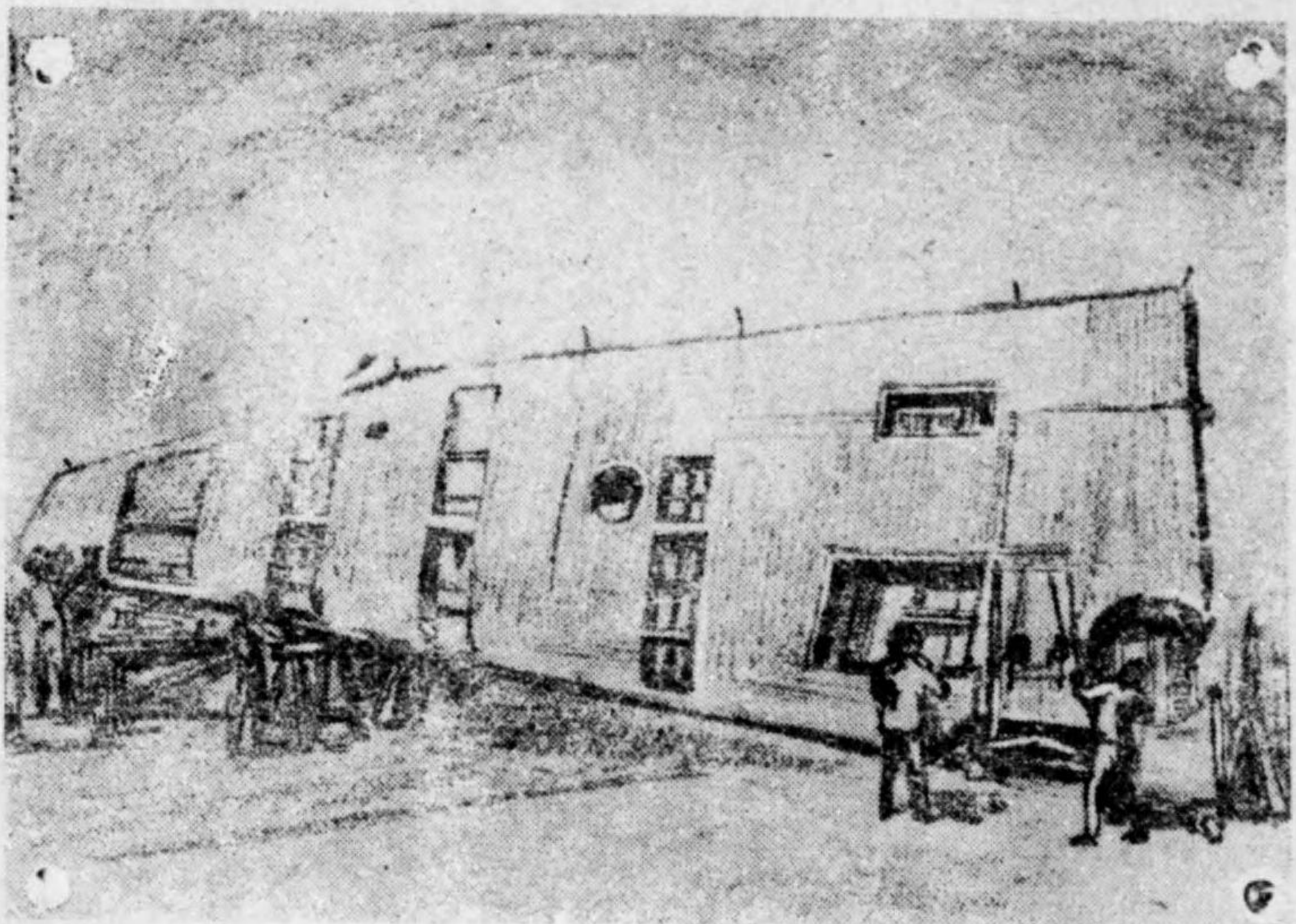
この材料を使ふことに着目した。

まづ翼の作り方の根本的な改良である。今迄の翼と云へば、全幅に長い梁が走り、これに多數の小骨を差しこんで作つてあつた。

『厚い翼の内側にガソリン・タンクを置くやうにしたら、胴體内に有効に使へるし火災の危険も少い。それには梁などは邪魔になる』とユニカースは、まづ軽合金の管を數本にして翼幅の方に並べた。そしてこれを三角形のパイプで連結した。

『今迄の作り方より、ずつと軽い、その上に翼の撓みや振れについてもこの方が丈夫だよ』

彼は計算通りに實物の完成してゆくのを楽しそうに眺めた。翼骨も胴骨も同様にして作られた。そして外覆ひは、波板のデュラルミン板を張ることにした。これで一層構造が丈夫になつた。



また防蝕用の塗料も出来た。この翼覆ひのヂュラ
ルミン板は〇・四ミリの薄いもので、全體に亘つて
四二ミリの幅の波形にしてあり全く新型の飛行機で
あつた。

ユンカース博士は、自ら工場にあつて、夜は遅く
まで設計室にとどこもつてゐた。そして彼の股肱と
頼んだ技師たちも熱心に新造機の完成をいそいだ。

かくて出来上つたのは、ユンカースJ四型であつ
て、發動機のあたりから、操縦席へかけて、厚さ四
ミリのクロムニッケル鋼板を張つて装甲されてゐた
のである。

『どうもあの飛行機では、まだ俺の理想に遠いやう
に思ふんだ。飛行機の主翼は胴體の下につけるべき
ものだと考へる』

ユンカースは、熱心に唱へた。

支柱のない片持ちの翼、即ちカンチレバー型の單
葉を胴體の下につけた低翼式、今でこそ、飛行機の
形の定石となつてゐるが、その頃では、

『低翼式だつて？、そんなのに乗つたら、まるで地上
を見ることも出来ないぢやないか。第一安定も悪い
だらう』

と人々は非難した。

「そうではない。胴體に翼をとりつけると、力のか
かる所が一ヶ所に集中できる。だから、合理的に強
さを高めて軽く作れるのだ。その上萬一不時着陸
しても、地面を打つのは翼であつて胴體でない。だ
から搭乗者は安全なのだ』

と力説し、D一型を製造した。これぞ世界最初の
低翼單葉の一人乗戦闘機だつた。

そして今の軍用機は、全部この型式となつてゐる

ではないか、いかにユンカースの先見の明が正しか
つたかゞ知れるではないか。

この機體が出来たのは大正六年、ドイツが全戦線
で最も活躍した年で、フォッカーの作つた高翼木製
戦闘機と、ユンカースの作つた低翼金屬製戦闘機と
が互 鎗を削つて精銳を争つた。

ある日のことである。アントニ、フォッカーは、
ふらりと訪れてきた。

『やあ、ユンカースさん、仲々御盛んですな』

『有難う、しかしフォッカー戦闘機の性能はすばら
しいですな。特に上昇力はねえ』

『いやそれは、今の所まだ金屬機が過渡期にあるん
ですからな。今にきつとこの形式になりますぞ』

流石、専門家の見る目は違つてゐた。かくして、
ユンカースと、フォッカーは手を握つて共に飛行機

をドイツ陸軍に提供することを約した。

大 戦 の 翼

大正七、八年、ユンカースD一型は多數作られた
が、これについてCL一型が出来た。

少し大型の二人乗、百六十馬力のメルセデス發動
機がついてゐた。この形は水上機にも作られ、ヂュ
ラルミン製のフロートをつけて北海を勇ましく駆け
り飛んだ。

今は、ナチス航空團長として時めくクリスチャン
ゼン大將は、まだ青年將校で、この水上機に乗つて
盛んに活躍してゐる。

『潜水艦だッ』

ある日、北海水域を哨戒してゐると、英國の潜水
艦らしいものを発見したので、直ちに爆雷を投下し

て美事に撃沈した。

ところが、ユンカース水上機を發見して、英國の誇るシヨート飛行艇が復仇にやつてきた。鈍重な水上機同志の空中戦となれば、火力の勝つた飛行艇に勝目がある。

『よし、下からやつつけるぞ』

クリスチャンゼンはいきなり低空へ舞下りて、荒浪を物ともせず着水してしまつた。英國飛行艇は追ひつめたとはかりに勇んで、その上空へやつてきたが、大きな艇體の影なつてクリスチャンゼン少尉のユンカース機を射撃できぬ。

『今だぞッ』

下からは、バツ、バツと旋廻機關銃をふりむけて飛行艇の土手ッ腹に猛射を浴びせ、とうとう巨大な飛行艇を撃墜してしまつた。

この奇襲は、ドイツ海軍飛行家がその後お手のものにして、散々イギリスの飛行艇を惱ました。

これも、ユンカース機が頑丈で、高浪にもたへて着水できたからである。

さて、戦争は次第に凄愴を極めてきた。西部戦線は、膠着状態に陥つてしまつたし、國內の物資は次第に缺乏してきた。

勝たねばならぬ。どうあつても。

そのために戦線へ送るべき飛行機は、日に夜をついで建造された。何しろ激しい戦場のことであるから、毎月第一線の飛行機の三割七分は破損し、搭乗者は二割五分の消耗率で死傷してゆく。

開戦當時、毎月三十七臺の飛行機を作る能力しかなかったものが、大正六、七年頃には月産千臺をこへた。

前線には五十人の操縦者がゐたが、國內四十八ヶ所で懸命になつて、乗員を養成して損耗を補はねばならぬ。

大戦の絶頂だつた大正六年には、英佛合せて二百三十九中隊、これに對してドイツは二百八十六中隊を有して優勢であつたが、この年の終りころになると、聯合國の三千八百臺の飛行機に對して、二千三百臺を有するにすぎなくなり、資材の缺乏は、次第に戦線でも壓迫され勝ちとなつた。

『作るんだ、作るんだ』

ユンカースは必死となつて軍用機の建造に全力を注いだ。

二千三百名の職工を擁する大工場から、三百十五臺の金屬製軍用機が前線へ送られたのである。

『大きい飛行機な作ることが肝心だ。爆弾を二三ト

ンもつんで、バリもロンドンも焼野原にしてしまふことが、戦争を勝利に導く唯一の方法だ』

ユンカースの胸中には、巨人機の姿を描いた。同じ金屬製飛行艇の設計者クロード・ドルニエ博士もこれと同じ考へを抱いて、巨大なツェッペリン・シユタッケン機の完成をいそいでた。

しかし、アメリカの新たな参戦は、戦局を一轉させてしまつた。

『アメリカは正義と自由を表看板にして、ドイツを屈服させやうとしてゐる。我々は數と量とに於て、もう力は及ばない』

日一日と不吉な戦報が傳はり、國內は物資の缺乏と思想の不安から動搖が濃くなるばかりである。

ユンカースは、それでも血走つた目に、薄汚れたカラーのまゝ、早朝から工場へやつてくる。

「何事も考へないで、諸君は仕事をしてくれ。たとへ戦況がどうなつても、ドイツはこのまゝ倒れてしまはぬのだぞ」と絶叫した。

第二章 平和の空へ

敗戦の後に

平和はやつてきた。

五年間鐵と血との嵐が吹きまくつた歐洲の天地にも平和の光がさしそめた。

だが、それはドイツにとつては、最も悲惨な形で最も苛酷な鞭となつてやつてきたのだ。

一寸の土地も、敵の手に委さない五年間の戦争の末、食糧の缺乏と國民の思想的混亂から、國の内側で崩れはじめた。

兵士は光榮ある勳章を泥土に投げこんで、赤旗のもとへ走る淺間しさであつた。

大正七年十二月十一日、休戦と共に、聯合軍側はドイツを再び立てないやうに、打ちのめそうとかつた。

國內の混亂は極度に達し、カイゼルは蒙塵してオランダに逃れた。共和黨の臨時政府が出来たが、マ

ークは暴落し銀行は破産し、社會組織は崩壊した。民衆は絶望と、失業と、飢餓とにみちて、險惡な日が毎日つゞく。陰慘な曇り方のもつて、暴動が起り、屈辱の日夜が連續するのだ。

誰れも明日に希望は持てなかつたし、ドイツはこ

のまゝ地圖の上から姿を消すのではないかとさと思はれた。

「工場では騒いでゐます。軍の注文がなくなつてから、全く仕事をしてゐませんからね」

「え、賃金は渡してあるだらうね」

「今週までは、どうにか渡しましたが——」

「職工を放すな」

ユンカースは、支配人に云つた。

「俺の私財を全部投出す。そして俺は食はなくてもいゝから職工に賃金をやるんだ」

「だつて、仕事もないのに——」

「いや、俺はさう思はん。今のドイツはなる程、絶望し切つてゐる。しかし、光榮あるゲルマン族の祖國は決してこんな事で倒れないぞ、きつと今に復活する。いや、今に戦争よりも、もつと澤山の飛行機

が必要となる時代が来る。

ユンカースは、先頭に立つて彼の協同者たちを激勵した。このまゝ航空工業を荒廢させる忍びなかつたのだ。

時には、ユンカースは世の不安と混亂を忘れた人のやうに研究室にとちこもつて、新機的设计をつゞける日もあつた。時には工場へ出てきて、職工たちにドイツの將來を諭してきかす事もあつた。

沈衰と不振とのドン底にゐる經濟界の人々に説いて廻り、大戦中の同志に説明して、大正八年四月、デュッソウ市に「株式會社ユンカース飛行機製作所」を新設したのである。

「一體今ごろ、飛行機を作つてどうするのだ、戦争はもうすんでゐるぢやないか」

「食物にも事缺くときに、飛行機でもあるまい」

株主總會の席には重役連は交々立つて、ユンカー
 スを責めた。いかにも學者の迂遠さを嘲笑するやう
 に――。

だが、ユンカーは明快に答へた。

『諸君の云はれることは尤もである。しかし、飛行
 機は戦争をするだけの能ぢやない。今に見給へ、勝
 つた聯合國にしても、有り餘る飛行機と、飛行士を
 どう扱ふかについて苦勞するだらう。そして航空輸
 送が始まるに違ひない』

『そんな飛行機は今作れるだらうか』

『作れるよ、既に僕の腹案にあるのだ。それは經濟
 的で、安全なものでなくちやならん、それが出來た
 ら、アメリカや日本は喜んで買ふだらう、輸出の道
 も開ける。これがドイツの航空工業を救ふ唯一の殘
 された道だと信ずる』

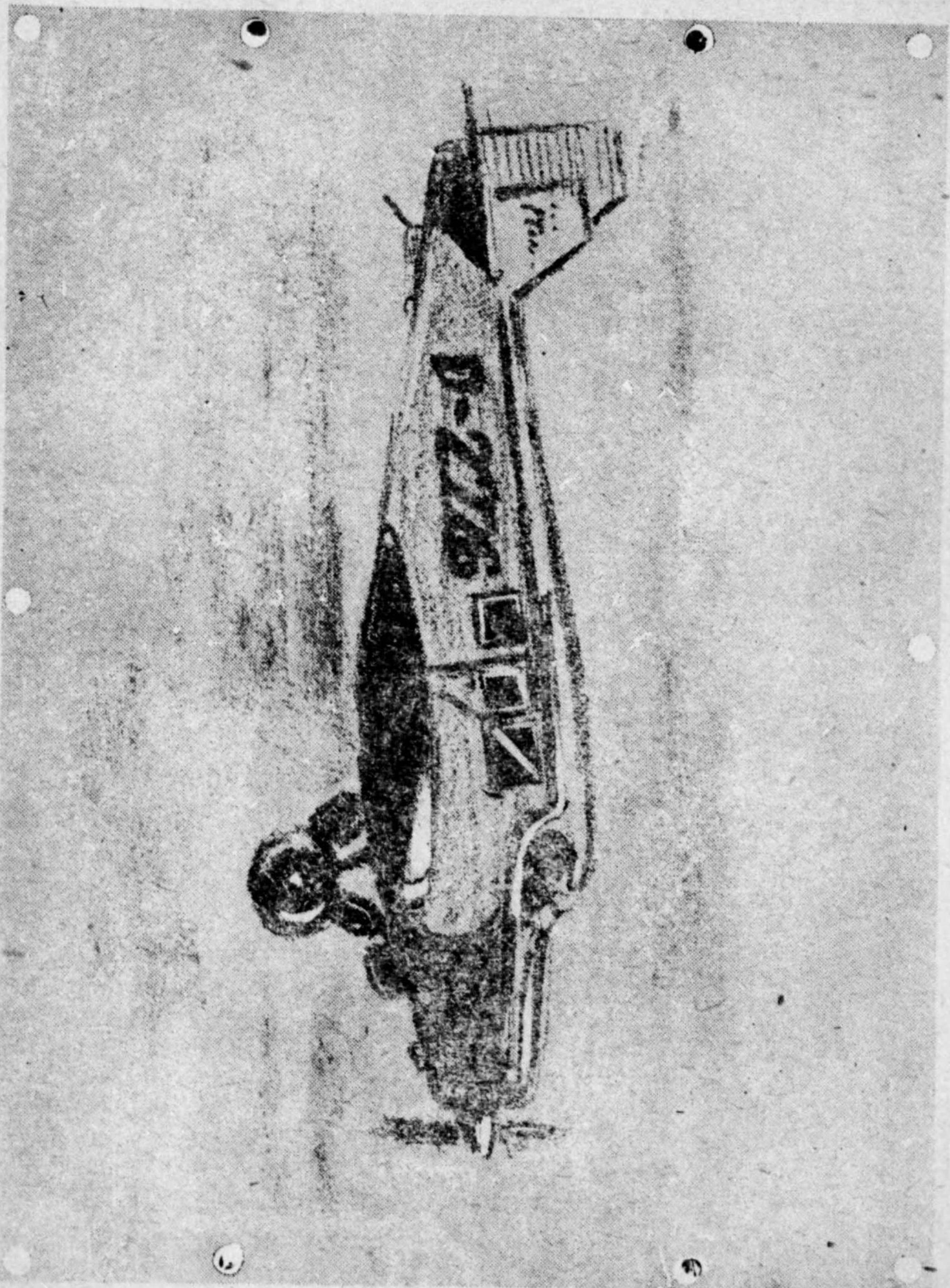
ユンカーは説き來り、説き去り熱心に反對者を
 説伏せた。かくしてユンカーは飛行機製作所が生れ
 た。そして、こゝから生れたのは、世界最初の金屬
 製旅客機F十型である。

ではこのF一三型について暫く耳を藉したまへ。

輝くF一三型

休戦當時の擾亂を他にして、ユンカーが心血を
 そゝいで、技術的にも工業的にも未知の領域に對し
 て研究を怠らなかつた成果はこのF一三型である。

大正八年の初期に製作されたこの全金屬製の單發
 動機付旅客機こそ、後の民間航空の始祖鳥である。
 なぜならば、後年、發動機の性能が數倍し、精密な
 知識と技術とが旅客機の改良を齎したが（昭和十
 年頃まで）この飛行機への信頼性は衰へなかつた。



だから、大正八年に、このF一三型が現れたことは、ドイツ自體よりも、南北アメリカの航空界に大きい感銘を與へた。スイス、イタリア、日本へ澤山輸出されて、國々からはドイツ航空工業の勝利として羨望の目で、敗殘のドイツを眺めた。

英佛でさへ、軍用機の拂下げに、間に合せの覆ひをつけて旅客を運んでゐた時代に、豪華な皮張りの高級自動車と變らぬ五人乗の坐客室や、強靱なオール・メタルの翼は、いかにも近代調であつた。

『聯合國では、いよいよ我國の航空工業を根こそぎ絶滅さす考へらしいのだ。しかし、軍用機の製造を禁止されたと云つて、全面的に悲觀しなくてもいいよ、商業機は別だからね』

エンカースは、どんな壓迫にも、制限にも屈しなかつた。出來上つたF一三型は、甲蟲のやうな太い

胴體に牛細になつた厚いカンチレバーの低翼をつけ、見るから強靱なもので、翼幅十七メートル七五、全長九メートル五〇、客室は廣い窓、大きい扉、それに布張りのアームチエアが二つと、ソファが一つ煙草ものめるし、室内は靜かで話も出来る。

『驚くね、僅か百八十馬力のベ・エム・ヴェ發動機で六人をのせるのだからね』

F一三型を眺めたアメリカの技術者は舌をまいて驚歎した。自重が一トン二七七であるのに、全備重量は二トン三〇〇、だから、殆ど自重にひとしい積載量を持つわけである。普通の飛行機なら、自重の三分の一か、良くて二分の一位しか旅客や燃料をつめないのに、これはまた何と云ふ經濟的な飛行機であらう。

物凄い飛行機が出來たものだ。しかも全金屬製で

あるため丈夫この上なし、雨や雪に曝して野外に放り出しておいても傷まない。熱帯の直射下においても木製のやうに狂ひはこない。

『おい聞いたか、八人をのせて六千七百五十メートルの上昇記録を作つたさうだ』

E一三型が生れて勿々世界に大きいニュースを提供した。この飛行機こそ世界の航空機に革命を與へたものだと言はれ、當時まだ勃興期に入つてゐなかつたアメリカでは、この新鐵機に着目した。

『世界の富はいまアメリカに集つてゐる。アメリカは國が廣くて大都會が散在し、自動車工業が盛んであり、人々の生活程度が高い。アメリカこそ、航空機の發展すべき恐るべき國だ』

エンカースは、とくに見抜いてゐた。しかし今は亡びやうとするドイツの工業を救ふには、アメリカ

の富を頼る外ない。大正十年アメリカのジョン・ラーセン會社の支配人と會見したとき、

『アメリカでこそ、この旅客機がうんと活躍出来ると思ふ。よろしい賣りませう』と即座に引うけて、十二臺のF一三型を賣却した。當時、興りつゝあつたアメリカの郵便飛行に、何かよい機體を求めつゝあつたので、郵務局長パウソン氏は、わざわざドイツへ迄やつてきて、デッソウ市にエンカースを訪ねた。

『平和用の飛行機には、祕密はありませんよ、必要となれば、私の方から技師を送つて、あなたの國で製作する指導をやつてあげませう』

『そう願へれば結構ですな』

F一三型の製造權は、かくしてジョン・ラーセン會社へ賣られ、翌年になつて同社では、アメリカ自

慢のリバチー發動機をとりつけたJL六型を作り始めた。

——スチンソン（日本へ来た女流飛行家の兄）ベ
ルタッド兩氏、二十六時間十九分三十六秒の世界滞
空記録を作る。

——全備重量三千六百封度で一萬五千呎に上り、
十五分間で六千五百呎へ上昇し、百十哩の速力を出
し、商業機中最大の成績を出した。

——百八十馬力付六人乗で一萬二千四百呎のグロ
ス・ヴェネテイゲル（チロル・アルプス山系）を横
断す。

——伊太利政府主催商業機競技の一二等は、ユン
カース機一三型が占めた。

——大正十四年ソヴエイト人シュミット隊長以下
のシベリア横断飛行隊のユンカース機はモスクワ、

北京間を最初に飛ぶ。

等、等、ニユース・フラッシュは、めまぐるしく
F一三型の勝利をつけた。

大正十二年わが國へも購入され、陸軍では安滿航
空本部長が、各航空隊巡閲の乗機となり、昭和四年
日本航空輸送研究所が二臺を使用して大阪別府間の
旅客輸送に好評を博してゐる。

そののみでなく、南米のコロンビアの航空會社ス
カヅタをはじめ、北歐でも、ソ聯でもF一三型はひ
ろく使用され、至るところで好評を博して行つた。
これらは壓迫と否認との桎梏にあへぐドイツ航空工
業に一脈の血路をつけてゐたのである。

辛じて、亡び去ろうとする航空技術を喰ひ止めて
わたのである。だから、F十三型の好評が、海外で
どの位高く評價されてゐやうとも、ドイツは敗戦の

重荷にあへぐ慘憺たる姿であつた。

決して容易な道でなかつた。

鐵鎖の日

大戦敗北後の、米英を中心とした聯合國のドイツ
に對する態度は峻烈と苛酷そのものであつた。

休戦當時、ドイツは保有してゐた五千三百臺の飛
行機は、聯合國の委員の手で全部押收された。建造
中のもは一切破壊を命ぜられた。

『全くひどいですよ、何から何までそつくり押收で
す。小さな計器からプロペラまで封印して運び出す
んですからね』

『ドイツから、一臺の飛行機も残しておかない魂膽
だ。已むを得ん、敗けたのが弱身だ』

ユンカースは、その廣大な工場にありしは幾十、

幾百の荒鷲の愛機を建造したのに、今は我物顔に柵

の奥まで、せり出す聯合國委員によつて、何もかも
運び出されて、空屋同然のガラン洞となつてしま
つた。

それだけならまだ我慢も出来る。ガリ、ガリ、ガ
ラガラ、鋸と槌の音が工場の一角から響いてくる。
だが、それは勇ましい建造の音ではなく、無惨な、
無秩序な破壊の音であつた。

『あゝ、R一型もとうとう……』
ユンカースは、沈痛に顔を曇らして、聞くにたへ
ないやうに耳を蓋ふた。

『博士、残念ですなア、あの双發動機大型機も、と
うとう目の目を見ずに壊されてしまふのですなア』
ツインデルは、身を震はせて口惜しがつた。

『どんな壓迫も、僕の頭の中まで及ばないさ。まあ

時を待たう』

ユンカースは毅然として顔をあげた。もうそこには、絶望も不安もなかつた。残された商業機への道を進んで、ドイツ航空工業の亡びるのを守り抜く決心と燃えた。

けれども、どう見ても、そのころのドイツ航空界は何一つ芳ばしい事はなかつた。英佛にも有り餘るほど飛行機が残つてゐて、注文などを受けられそうもない。その上ドイツは、政治にも經濟にも半身不隨になつてゐる。苛酷なヴェルサイユ條約によればドイツ國境は、實質的に鎖國の状況にあつた。國內の經濟市場は全く亡び去つてゐる。

その上、大正十一年になると、聯合國側の監視委員は、遂にドイツが空軍を保有してはならない外、六十馬力以下の小型飛行機の製造を除いて、全面的

に大型飛行機はそれが平和用であつても、製造を禁止された。

がんじがらみの鐵鎖である。

『ユンカースの旅客機なるものは頗る疑はしい性質を持つてゐる。機關銃と爆弾をつめば、すぐ軍用機になるではないか』

と、説き始めたのである。勿論これは技術的に見て適正でなかつたが、いろいろの政治的意味から、論じられた。

しかし聯合國側にも具眼の上があつて、佛にフランス空相として有名な手腕家であつたルーラフ、エイナツク氏は、

『商業航空を同時に隠れた軍事航空として作り出すことは不可能である。軍事航空と民間航空とはその特質は全く異つてゐる』と判決を下し、やつとF一

三型は制限から除外されることが出來た。

『よし、ではいよいよ大型機にとりかゝらう』ユンカースはこれに力を得て、全備重量九トン、二百四十馬力發動機四基付の大旅客機の製作の着手した。

『仕事はぐんぐん捗つてゐます。もう胴體は完成しました。翼もあと、張るばかりになりました』

ツインデル技師は、うれしさうに、ユンカースの室へ入つてきて報告した。が博士の顔は暗かつた。

『どうしたのです、先生！』

『いやたつた今、通牒を受つたのだ、聯合國委員からあの大型機は否認さるべきものだ』と云ふのだ』

『えッ、否認ですつて』

『そう、壊すか、外國へ賣つちまふか、二つの一つだ』

あゝ、先生、それではこの工場を閉鎖するも同じ

ことですよ』

負けぬ氣のツインデルも、慘酷すぎる聯合國の要求に悲憤の涙にくれた。

残る百二十人

會つては五千の職工を擁した大航空工業。必死の離業喰止めにも拘らず、航空工業の見込みがないと身勝手にきめて、暇を貰ひに勞務課へくる職工が日に十人と下らない。

『もう百二十人しか残つてゐません。それも浮足たつてゐますよ』

工場には、操業の行はれない日がつゞく。職工たちは不安に駆られて、一日と減つてゆく。

『職工を散らすな。とくに熟練工だけは、どうあつても手放すな』ユンカースは他日の復興した暁を考

へると、こゝで人的資源を失ひたくなかつた。

と云つて飛行機の仕事はない。業務は衰微する計りだ。彼は、残つた百二十名の技術者と、勞務者を散らさぬために、巴むなく小さな一般工業をとり入れることにした。

『どんな仕事でもいゝ、とにかく工場を生かしておきたい』

鐵製算筒、スケート靴、食卓道具、ストローヴ、自動車橋、トラック……そんなものが飛行機工場で作られた。

一時の窮境をどうにか切り抜けるためだ。たがそつ間に、このやうな仕事をつゞけつゝ金屬、特に輕合金の仕事に經驗を持つ職工を養成しておくことが出来た。

延人員で四千人の職工を使つたことになるが、こ

れらの職工は臨時雇で、次から次へ變つて行く。し

かしその姿を眺めつゝユンカースは、『あいつらは、俺の寶だ。今にドイツが復活するとき、あの四千人を常雇として、飛行機を作ることが出来るのだ』

と想ひ描いた。

そのうちに早や二年はすぎた。頭を下げた上を土足で踏みにおつて、青痰をひつかけられたやうな屈辱極まりない「否認」は、大正十一年になつて、やつと「制限」の二字に置きかへられた。

戰勝國の鼻高々と、ドイツに對しては、高馬力飛行機の製作や、多數の飛行機の保有を制限されたのであるが、一切を否認された佗しい二年間よりは少しい。

しかし、あらゆる作業は嚴しい統制委員會の監視

にあつた。何もかも戰勝國たる聯合國の許可なしには製作も飛行も出来ない。

ところが、ドイツを極度に押へつけたために、反對に不便を感じてゐるのは、英佛である。航空路なども、ドイツを避けるために大迂回をせねばならぬいしドイツの製作技術を取入れることも出来ない。

『見る、人を呪へば穴二つだ。今にきつとこの制限も取除かれるに違ひない。その時になつてからぢや手遅れになる』

ユンカースの先見の明は、その曉こそ、航空輸送の時代が来ることを信じた。

大正十一年六月、デッソウル大風洞を建築し、工場の設備を増加した。

『實際に使つてみた結果は、どんな事でもいゝから研究部へ通知してくれ給へ、それによつて設計を考

へ直す。材料も試験するよ』

ユンカースは、陣頭に立つて、材料試験、金屬科學、空氣力學の研究には、彼自ら作業服一枚で毎日家へ歸らず實驗をつゞけた。

これは後で述べるが、ユンカースは自然製飛行機を消化するために設立した、航空輸送部と緊密に連結した。

大正十一年にはF一三型だけでも二十五臺を整備し、翌年には六十臺となつてゐる。

そして大正十一年には旅客千名と貨物十五トンを運んだのが、十二年には八千名に増加し、六十五トンの貨物に激増した。

『今に、必ず航空工業の黄金時代が来るよ、來たらば、その中心だから、今の苦境だけを切りぬければあとは大丈夫だ』

とユニカースは、自ら茶葉服ちやばくに身を包んで、百二十名の職工と食堂で共に語り、休暇には彼等と談笑だんぎょうした。

その一面ツインデル技師以下、技術者を集めて、『ドイツ航空界が健康をとり戻すのも、もう間もないことと思ふ、それについて私は、第一の仕事として、航空機の統一と云ふ事を諸君に骨折つて貰ひたいのだ。』

『つまり、發動機と、機體を一貫してやらうとするのですな』

『左様、勿論、メルセデスにし、べ、エム、ヴェにしる、ドイツは立派な發動機はある。しかし、ユニカース機の輸出が、近頃の如く多くなり、また航空輸送部の方も盛んになるとだね、この際、本所自らが、獨特のエンジンを製作すべきであらうと信じ

る』

『賛成ですな』

ユニカースは、前にも述べたやうに石油發動機の改良から發足した人である。むしろエンジンの方がお手のものだ。

技術者はあるし、ユニカースの熱心さは人々を奮ひ立たせるに十分であつた。

ユニカース飛行機製作所の一部の發動機工場は今まで、小型の二氣筒發動機を作つてゐたのであるが航空發動機を作るために、ユニカース發動機製作所を獨立させた。

『この際だ、一つ君の方で、エンジン製作に協力してみる勇氣はないかね』

ユニカースは舊友が經營してゐるマグデブルグ工機製作所へやつてきて、時勢について説いた。

マグデブルグ工機製作所でも、餘り仕事が芳しくない時だつたから喜んでユニカースの指揮下に馳

せ加はり、こゝにユニカース飛行機、發動機、マグデブルク工作機械の三者は姉妹會社として、しつかり地歩を固めて行つた。

まづL一型四氣筒水冷七十五馬力が出來ての經驗から、L二型水冷六氣筒二百六十五馬力が、出來上つた。

大正十四年末には、早くもL五型二百八十馬力が出來て、堅牢と、燃料消費の少い點でメロセデスやべ、エム、ヴェの好敵手として航空界に大きく姿を現はしてきたのである。

遂に大型機へ

大正十二年、曾つて涙をのんで、聯合國委員の手

で廢棄した大型旅客機の姿も再び現はす日が來た。

『眞の發明者と云ふものは、たゞ自分の考へを發表して特許をとれば、それで満足してゐるものぢやない。自分が率先して陣頭に立つんだよ』

ユニカースは、部下に説いてきかせた。

『すると、事業家を兼ねるわけですな』

『いや、營利を追及するのが目的ぢやない。體系的に技術上、工業上の研究事業をやつてあらゆる連累を發見するのだ。そして繼續的な製作、實驗を行つて、製作者と、消費業者の要求を注意深く考へるのだね。そのうち、最も望ましい結合を送り出すことだ』

『そうすると、あくまで自分の發明を忠實に作り出してゆくわけに行きませんか』

『それでいゝのだ。自分の發明に、こたわつてゐる

と發明狂になるよ、技術者の偏狹になるのだ。若し必要とあらば、暫く自分で製作者と市場の兩方に備へることもいゝぢやないか』

ユンカースは、あくまで航空機が、交通機關の新らしい形式として發展してゆくことに對し、飛行機、翼、發動機、プロペラの一切を提供し、一面自分の作つた飛行機を利用して航空輸送を旺盛にしやうと企てる。

ところで、ユンカースF一三型の赫々たる成功に對して、世評はまだ十分に賛成の意を表してゐなかつた。

『合金製飛行機は成るほど堅牢だらうが、原價の高いことに疑問を持つね』

と云ふ設計者もあつた。操縦者の中には、低翼式を何となく毛嫌ひするものもゐた。

中にも、ユンカースの唱へてゐる飛行機の大型化について、技術者は深く懷疑的であつた。

それは、不幸な二乗三乗の法則が存在してゐたからである。

寸法が倍になると面積は二乗に比例して増える。そのとき、この飛行機の重さは、元の三乗に比例して増えてゆくと云ふのである。だから今、とても成績の良い飛行機があつて、これを二倍の大きさにすると、翼や胴の面積は二乗で増えるのに、重量は三乗になるから、ある大きさまでゆくと重量が制限點に達し、飛べなくなつてしまふと云ふ論であつた。

『それは尤な話だ。しかし、それは原形と同じ材料を使ふ場合の話だらう。金屬を管にし、波板にすれば必ずしも三乗で増えない。例へば、小型機の椅子や、窓や鉸が、何も二倍の寸法にならないからね』

ユンカースは反駁して。彼はドイツ特許三一〇六

一九號低翼單葉三三五二二號波狀金屬覆の翼、三〇九六四六號管狀構成結合の翼組、四二一六〇六號空虛胴の鉸結合の四つの利刃をひつさげ、大型飛行機における金屬の有利、多量生産に於て組立の場合の勞力、經費の輕減を主張して下らなかつた。

『ユンカース博士の云ふことも一理ある。彼は明治四十四年にグライダーの特許をとり、大正七年に、翼に直接負荷さす事に成功してゐる。しかし、大型飛行機JG型(九トン)トール大飛行艇(四十二トン)も要するに紙の上の設計で飛んでゐないぢやないか』

と冷笑を以て酬ゆるものがあつた。

『今に出來上るのを待つてくれ』

ユンカースはもはや辯駁する時間も惜しいほど大

型機G二四型の製作に熱申した。

大正十二三年になつて、G二四型は、全貌を表した。胴體の下についた低翼、翼上にとりつけられた二つの發動機、翼内に收められたガソリン・タンク——これは、最初試作されたG三型を改良したものであつて、翼中二十八米五〇、自重三トン八〇〇、積載量二トン二百、全備重量六トンの巨人機であり、十人の旅客をのせるものであつた。

しかもこのG二四型は、F一三型に劣らぬ成績を挙げたのである。

G二四型の出現は、歐洲の航空路の花形となつたかの觀があつた。工場の營業部は、てんてこ舞ひの有様で注文を受けてゐた。

『こいつは愉快だ。アルプスの高山をこへるオーストリア航空會社と地中海を飛ぶ伊太利のトランス、

アトリアチカ會社とから一ぺんに注文が来てゐるぞ』

『それや主任さん、この間のトルコの熱帯地方とスエーデンの雪國からの注文によく似ておますね』

『うん、何しろ金屬製で寒暑の影響を受けないからなア』

今まで、ユンカース會社は、いろいろの形式を大小各種の飛行機を作つてきたが、G二四型に至つて遂に大型旅客機への第一歩を踏み出すことが出来たと云つてもよいのだ。

昭和二年、この年は世界の航空界は、ユンカースG二四型によつて彩られたと云つてもよい。

『このG二四型こそ僕の畢生の仕事である金屬製大型機の基礎なんだ。この構造をそのまま大きくし、強馬力にすれば百人乗飛行機も遠からず完成すると

思ふ。だから、一つ腕によりをかけて、世界をアツ

と云はせてくれ給へ』ユンカース博士は、いまし二トンの荷物をつみ、轟々たるユンケルス二三〇馬力三基の爆音をひびかせて、まさに離陸しやうとするレーデル試験飛行士の側に歩みよつて、力強く、言つた。

『大丈夫です、先生、きつと大レコードを作りますよ』と、弦を放れた矢の如く、千メートルまで八分でかけ上り、百卅七杆の高速力を出して悠々七時まで飛びつゞけた。

三日おいて、ホルン飛行士が代つて、一トン積みで、百四十杆の速力を以て十四時間飛んだ。

それから間もなく、ユンカース會社の主任飛行士チンメルマンとリステツツ兩氏は交々飛んで、次から次へとレコードを改めてゆき遂に一ケ年に、二十

一ケの新記録を作つた。

それがしかも、たゞレコード破りのレコード飛行ではなかつた。

『ユンカースG二四型の輝かしい記録をみると、何れも一トン乃至二トンの有効積載量を以て、二百十杆の驚くべき高速力を出し、千杆以上の距離を飛んでゐる。これは、實用上同機の性能が秀逸であることを物語るに十分だ』と専門の雑誌は、盛んに書き立てた。

そののみぢやない。もつと驚くべき大飛行がG二四型で行はれた。

昭和元年七月、ベルト・クナウス博士一行は、ベルリン、北京間の航空路の開拓に、飛び出したのである。

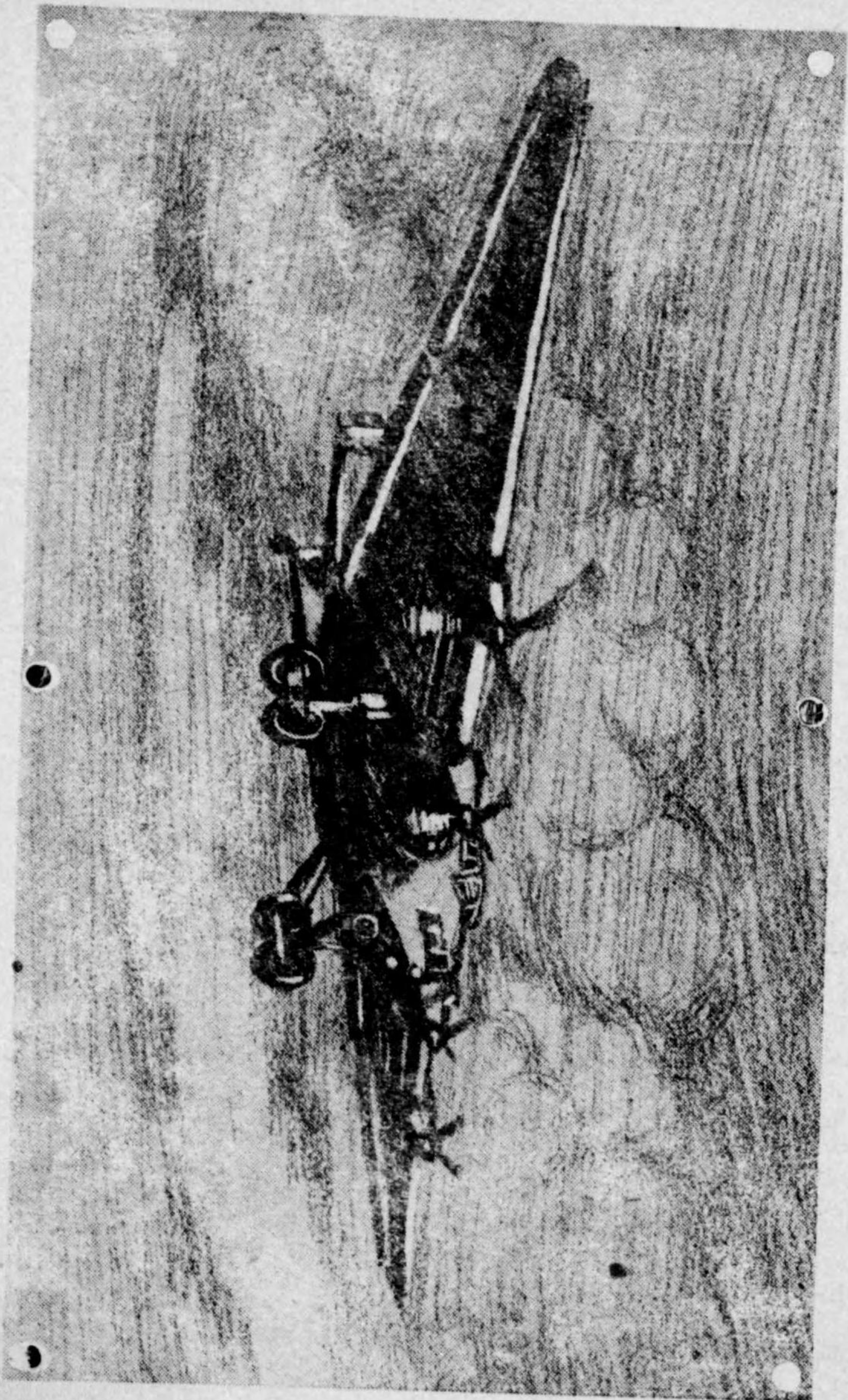
ユンカース博士は、クナウス博士のために新造の

工機を提供し、

『シユナベル君、君の操縦なら間違はあるまいが、どうかこの新航空路の開拓を達成して、無事に歸つてこられる日の速かなることを待つてゐる』と鄭重に挨拶した。

『全力を盡してやりませう。途中で修理や、發動機積替へを許さぬこの全航路に對して、ユンカースG二四型に乗つてゆけるのは全く安心です』と答へ、二十四日の夜、荒模様の空について飛び出した。

まんぢりともせず一夜を明かした博士は、二機無事ケーニヒスベルヒ到着と知つて、モスクワにゐる友に、今日中に着くと確信を以て打電した。果せるかな二十五日の夜はモスクワを飛びこへて、ウラル山麓まで伸してゐた。更に毎日電報は健全な二機の進みを示し、四日半で早くもイルクークに到着し、



北京へついたのは八月末、それから九月末に二萬軒を往復翔破して伯林へ歸つてきたとき、眞先きに出迎へたユンカース博士は、

『よく歸つてきたね。何處も異状はなかつたか』と長旅から歸つた愛兒を迎へるやうに色褪せた翼を撫でながら、技師のウインテルフェルド氏に尋ねる。

『申分なしでした。シベリアの曠野に吹ざらしで置いてあつても、ビクともしませんでした』と答へればシユナベル飛行士も、

『全く國內を飛ぶやうに安樂な飛行でした。客室型の飛行機なればこそですよ』と讚美の聲をあげる。

ユンカースG二四型、その赫々たる成功は博士の自信をさらに高めた。その經驗と、すぐれた特長とは博士を勇氣つけた。

昭和二年、更に大型のG三一型が完成したのだ。

合計千六百馬力の三ヶの發動機や、低翼全金屬製、美しく至れり盡せりの客室などすべて、G二四型から出藍のほまれを見せてゐる。

翼巾三十米、全長十七米、自重五トン餘りに對して、滯積量は三トン三に及ぶ。かくて、十年前の夢にだつた九トン旅客機は、遂に、實現しやうとしてゐる。

とりわけ、全長五米七五〇、巾二米、高さ一米八五の廣いゆつたりした十二人乗の客室の豪華さ、皮張り四人掛けの一室が三つ、折りたゝみ式の机、通風採光の苦心、まことに大型旅客機として、最初の設計であつた。

果せるかな、G三一型は、歐洲南米の航空輸送會社から注文が殺倒した。チンメルマン飛行士は相かはらず巧妙な腕を振つて同機のために南歐一周や、

アルプス一周に活躍した。かくて、ユンカースが、その初一念は、遂に實現する日が来た。彼は、この小成に決して安じなかつた。

いよいよ飛行機の改良と、性能の向上をもつて、祖國への献身につとめやうと決意を固くしたのであつた。

第三章 建設への道

シルドクレーア號の誇り

「飛行機は、どこまでも實用性がなくちやならん、僕は、飛行機が大きな貨物を地上海上機關に代つて輸送する時代が必ず來ると信じてゐる」

ユンカースはある日工業クラブに於て、こう話しかけた。

「それや君の飛行機に對する過信だよ。旅客や郵便は、航空輸送の對照になるがね、貨物のやうな嵩張つたものはやはり地上を行つた方が得だよ」と大抵の技術者は反對した。

「いや、そうぢやない。そりや文明國での事だ。近頃採金鑛業を始めたニュギニア・クプロの砂金區だね話にきくと、僅か四五十軒ばかりの山奥だが、途中道はないし、蠻人の來襲があるし、途中三千米の高山とジャングルがあつて、一週間もかゝるそうだ。そこなど、飛行機で運べばいゝと思ふがな」

ユンカースの胸中には、紫煙をくゆらしながらの雑談に、すばらしい思ひつきが浮んだ。

その夜から新らしい設計が始つた。W三三型貨物

機はかくして生れた。天井に大きいハッチが切りひられ、そこからは重さ二千五百トンの大水力發電機を細かく分解して一つ一つ積みこまれた。

ニュギニアのプロロ山地のジャングルの天高く、貨物機は飛び交つて、砂金鑛區へ次から次へ物資や機械が運ばれたのであつた。

かくして、空のトラックは、世界の果に、航空文化を以て、近代調を彩り、唯一の運輸機關であることを示した。

W三三型は、G三一型を少し、小型にしたものと思へばよい。翼中十七米七百、全長十米五——しかし自重一トン二〇〇に對して、一トン二三〇の荷物をのせられ、ユンケルスL型發動機一つで、百九十軒の高速力を出したのをみても、いかに優秀な飛行機であるかは知れる。

「僕の作つた飛行機のうちでW三三型は最も自信のある機體だつたよ、あの一號機は、現代のアラビアンナイトなのだ」

とユンカースは、いつも云つてゐた。まことに、W三三型の一號機——それは大正十五年に完成したユンカース第七百九十四號機、ドイツの國籍でD九二一號——シルドクレーアと命名されてゐた。

「こいつを一つ、うんと使つてみやうぢやないか」
「面白いですね、我々で、いろいろの飛行を計劃してやつてみませう、ねえルーズ君」と、シユネベル飛行士は博士の提案に同意した。

「僕も一役買ふよ」リステイツ、Lエツツアードの兩飛行士も、同座してゐたが、出來たばかりの銀翼黒胴のシルドクレーア號を惚れ惚れと眺めた。

「まあ一つ諸君の腕におまかせする。本社飛行部の

精銳をすぐつて、面白い飛行をやつてくれ給へ』

『承知しました』若い鳥人は異口同音に答へた。

七月十日、シルトクレア號水上機フルネムンデに
飛び本年度水上機體能競技に一等賞を獲得す。まづ
第一の吉報が入つた。

翌昭和二年二月、スエーデン・デッソウ間無着陸
十六時間の新記録を作る。三月シユネベル氏五百咫
をつみ十六時間滞空す。更に 十二時間十一分滞空
し二千七百軒を飛ぶ。

月、水上機に改装して十四時間千七百軒を飛
ぶ。さあ事務所では飛行士と一揉め。

『おい、餘り活躍しすぎるなよ、新聞社からの電話
の應接で大變なのだ』

『だって、もう少し活動せぬと大将の期待に背くか
らね』

『次の計畫は何だ』

『胴體をみてくれ、面白いだらう』

『何だい、そりや “Tod dem Schädling” だつて、
害虫を殺せつて、何をやるんだい』

『機體の内に大きい砒素剤を入れるタンクがあつて
ね、森林や田畑の害虫にふりまくのさ、飛行機のお
百姓さんだよ』

『そいつは、ほんとうの實用的な仕事だね』

『うん、だから、しつかりやるよ』

この害虫驅除飛行は北米ヤソ聯で、後に實用化さ
れてゐるが、ユンカース W 三三型の貢獻した開拓的
飛行に負ふところが多い。

八月、リステツツ、エッアード兩氏五十二時間二
十三分を飛ぶ――

南ベルシアのコレラ流行につき注射器十萬本をつ

み、デッソウ、テヘラン間四千軒を、二十七時間に

飛ぶ――

コレラ流行の中心地プシール、バンターアバスに
飛び醫師及注射器によつて猖獗を極める悪疫防止に
つとめる――

昭和三年シルドクレア號バルシア鐵道建設計畫地
を空中測量し、途中三千米のエルスプール山をこへ
ハマダンに達するコースを飛ぶ。

『おい、このニュースのどれがお氣に召したかい』

『どれも、これも、バルシヤにおける千五百時間の
飛行中の手記だけでも、一冊や二冊の現代アラビア
ン・ナイトが書けるね』

『もつと大きいニュースを教へやうか』

ユンカースの事務所へ行つておれば、航空界の動
きが判ると云ふので、新聞記者は、いつも入れ替り

立ちかはり、押しかけてくる。

『あッ、博士、何か新しいお話は』

『うん、大分皆さんお揃ひで熱心だな。別に新らし
い話はないよ、僕のところは、どれもこれも古くて
カビが生えとる。その古いところから、新しい仕
事が生れるんでね』

『こりや面白いですな。時に、大西洋逆横断は、い
よいよ決行しますか』

『そのつもりだ。昨年出發した二臺とも引返してし
まつて残念だつたがな』

『どうかして我國の手で先鞭をつけたいですね』

リンドバーグが、紐育から巴里の飛行に成功して
以來、大西洋横断は、飛行界の最も華やかな話題で
あつた。

誰れが最初に逆コースを開拓するだらうか――。

世界中の眸は、魔空北大西洋に注がれてゐた。アメリカから歐洲へのコース回轉の影響で、追風に恵まれるが、逆コースは、たへざる逆風と、ラブラドルの氷雪濃霧の危険がある。フランスの名飛行家ナンゼッセ大將をはじめ、数名の大膽な挑戦者は盡く行方不明となつてゐる。

『北大西洋の逆横断は飛行家の墓場だ』と恐れられてゐた。

昭和三年四月、ドイツの詩人飛行家フニェフェルト男は、ユンカース博士と協議の末W三三型ブレメン號を以てこの壯舉に乗り出した。

霧の戦士と云はれる名パイロットのヘルマン・ケール大尉、アイルランド人のフィツモリス航空士が乗りこみ、荒天をつき難航を重ね、遂に魔空を突破して、北米の一角ラブラドルのグリーンクロー島に到着

した。目的地のニューヨークには達しなかつたが、三千百料を翔破して死の試練に克つた。

『今日は、救援機に乗つてフニェフェルト男一行が紐育へ来るんだ』

お祭騒ぎのすきなアメリカの市民は潮のやうに紐育市有空港へ押よせた。

大型フォード旅客機が飛んでくる。そこは折柄滞米中のユンカース博士が乗つてゐた。蜻蛉のやうに出迎へ飛行機が飛び交ふ。

『見えたッ』

『來たッ』

魔空の三勇士は健やかな姿を遂にニューヨークに現はしたのだ。真先きに馳けつけたユンカース博士は、喜悅にあふれて、しつかと三勇士に握手した。

『どうにか逆横断の一番乗りをやりましたよ、あん

空を結ぶ

ユンカース博士は、その工場から生れる優秀な機體に確信を抱いてゐた。海外の市場におけるユンカース單葉の好評と信頼にも自信を持てた。だが、一營利業者ならばそれですむ。彼にとつては、祖國である。

『徹底的に敗戦したドイツは、その殖民地を失つてしまつた。しかし、經濟的、商業的發展のために、迅速な交通網を把握することが、この窮乏から救ふ唯一の道ではないだらうか——』

と考へた。また工場の經營についても、

『自社の製品を、最も公正に批判し、研究して改良するため、自ら消費者となつてみなければならぬ』とも考へた。

な物凄い天候は始めてです。ユンカースW三三型でなかつたら、翼をへし折られてゐたと思ひますよ』とケール大尉が述懐した。

それのみでない。ブレーメン號の姉妹機、オイロバ號は、その秋フンネフェルト男、リンドネル飛行士、レンゲリッヒ航空士の乗組みで日本へやつてきた。日本から太平洋を横断する計畫だつたが、時季が遅れたので、男はオイロバ號を帝國飛行協會へ寄附して歸國した。間もなく男は急病で逝去したが、遺愛のオイロバ號は、日本にあつて相當活躍し、また同型の報知日米號は、本間海軍中佐、馬場英一郎飛行士、井上知義通信士が搭乗して、太平洋横断に出發したまゝ行方不明となつた。

成らなかつたが、その壯舉はいたく國民の心を打つたのである。

ドイツの政治も次第に秩序をとり戻しつゝあつたし、青年に對して航空機の趣味と教育を興へる獨逸航空聯盟も生れ、財閥汽船會社などの投資によつてエーロ・ロイド會社が出来て、ドイツ國內から隣接國へ二十三本の航空路を設けてゐた。

『エーロ・ロイドがあるか、まだ航空路の必要もあるし、本社の飛行機を利用して生産を促進することも必要だと思ふよ』

『その點は全く同感だ。事業の方は我々で引うけてやつてみやう』

とユニカースの親友たるゴダート・ザクセンベルヒ氏とゴットフリート・カウマン氏は進んでユニカースの提唱に乗り出した。

かくて大正十一年、ユニカース飛行機會社に航空輸送部が設けられた。

つくしませう』

と潔よく申出に應じたので、ユニカース航空輸送部では、まづ十五本の航空路を決定した。

『航空輸送は、狭い國內だけで満足してゐてはならぬ。近隣國の航空會社とプールを結べ、互に乗り入れをやつて大衆の便利を圖るべきだ』とユニカースの主張する通り、十五航空路は、ドイツ國內の主要都市だけでなく、北歐、バルト沿岸諸國と協定して航空路を伸ばして行つた。

開設當時は十一臺の飛行機で、三萬五千斤の輸送路を有してゐたにすぎなかつたが、三年後の大正十四年には百五十臺が就航し、二百十四萬五千斤を飛ぶやうになつた。旅客のときは二十倍に激増して四萬人を運び、百五十トンの貨物郵便を運んだ。

『同じ乗るなら、ユニカースの飛行機は乗心地がよ

F一三型、G二一型、W三三型……と優秀な製品が工場から生れると共に、これの機材は、航空路に使用された。

『エーロ・ロイドとは競争すべきぢやないね。むしろ協力してゆかねばならない』ユニカースは、嚴に個人的な競争を戒めた。ユニカース輸送部の誕生はエーロ・ロイドの經營者を驚かして、これは手強い競争相手が現れたと思はせたが、カウマン氏は、逸早くエーロ・ロイド本社を訪れた。

『お互ひに一個人、一會社の營利を云々してゐる秋ぢやないと思ふのです。社長（ユニカース）は、貴方の方とよく協力して航空路も重複せぬやう、切符を共通にしたいと仰言るのです』

と眞意をつたへた。

『よく判りました。協同してドイツ航空界のために

いよ。フランス製のはやかましくてガソリン臭くていけない』

『ユニカース機は安全だよ、不時着しても、脚が壞れ、主翼が地面に當つて潰れても、客室まで破損せぬからなあ、あれが高翼式なら、客室が眞先につぶされる』

空の旅になれた人々は、ユニカース機をほめた。

『成績は頗るいいですよ、博士』

ザクセンベルヒ氏は、輸送部の會計簿を示しながら説明してゐる。

『君たちの努力を感激してゐるよ。ところで僕はもう一步進めて君たちの努力を希望するのだがね。今の資本金五百萬マークを倍にしやうと思ふ』

『そりや少し早計すぎやしませんか』

『いや、本社だけでやるんぢやないよ、北はスガ